COBALT-SERIES

天冥の剣 1

ハイスクール・オーラバスター



若木未生

集英社

苦戦を強いられた〈髪切り〉事件の結末からすでに二週間が過ぎた。斎伽忍の不可解な態度の影響で、5人の術者たちの関係はぎくしゃくしたものになる。そんな状況にしびれを切らした諒はとりあえず希沙良に連絡をつけてみる。その頃、六本木を中心に『吸血鬼殺人』と呼ばれる通り魔事件が頻発。新人TVレポーター工藤かおるは、事件に関連ありと思われるモデル斎伽忍の調査を始めていた。

恋を夢みる乙女のための小説誌!

[コバルト]
Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売

隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

集英社



COBALT-SERIES

ハイスクール・オーラバスター

天冥の剣1

若木未生

集英社

目次

天冥の剣1
地涯篇

序章　晩景……14
第一章　氷の薔薇……26
第二章　爪痕……56
第三章　看視者……86
第四章　君のせいじゃない……115
第五章　陥穽……140
第六章　沈黙の代償……166
『天冥の剣』第一回緊急対談……198

鬼とも妖怪とも呼ばれ伝説に語られてきた人外の存在――〈妖の者〉が目立って活動するようになったのは、ここ十数年のことなのだという。

九百年の昔に彼らの天敵たる〈空の者〉との大戦に敗れて以来、〈妖の者〉の多くはなりをひそめ、世に出るのはごくわずかな残党のみであった。しかし現代に至り、妖者総帥「九那妃」復活の報が期待と確信をもって彼らのうちに流布され、それを刺激として〈妖の者〉は勢力を回復しつつあるのだ。

〈妖の者〉の形態は千差万別だが、共通する点が二つある。

一つは、本体が精神体であるということ。いま一つは、人を喰らうということ。彼らの多くは人間の身体にとり憑き、人の社会にまぎれてひっそりと生息する。

そして古より隠密裏に伝承された真理。人を喰らうのが〈妖〉であるならば、〈妖〉を喰らうのは〈空〉であると。

選ばれた血統の、選ばれた赤子の内にかぎり転生を為す〈空



の者〉。それは神の降臨とさえ呼ばれる奇跡である。

またその血統を保ちつづけた一族を、斎伽の一族と呼ぶ。その血には妖者の「妖力」に対抗する超常能力「術力」の因子が内在し、一族の者は空者とはならずとも何らかの能力を保持した者、すなわち「術者」として空者に仕えていたと伝えられる。

しかし〈妖の者〉との大戦の後、一族の血は分かれ、純粋な血統はほぼ絶えたと言って良い。数百年にわたり〈空の者〉の降臨はなされず、術者の数は激減した。

そのような現代に、ただ一人転生した〈空の者〉がいる。空者総帥「伽羅王」、またの名を斎伽忍。弱冠十九歳にして一族の長を務める若者である。

〈妖の者〉の動きが活発になる一方、〈空の者〉に比べれば甚だ微弱な術力しか有さぬ術者数人が手中にあるのみという現状に、彼が何を思うか——うかがい知ることは、いかなる者にも許されなかった……



崎谷亮介（さきやりょうすけ）

おとなしく内向的な性格だが、実はとてつもない力を秘めている〈術者〉側の切り札的存在。〈術者〉の中でただひとり忍の事情を知っており、彼の指令で隠密行動をとっている。

《術力について》ただひとりの中和能力者（オーラバスター）。術力、妖力を問わず無効化してしまう、特異な能力をもつが、自分の意志で制御することはできない。秘められた力は巨大で、これまでの中和行為は氷山の一角にすぎないらしい。感覚が非常に強く、『見えないはずのものを見る』力は〈空の者〉に匹敵するほど。一方で、攻撃力、防御力ともに皆無。



水沢 諒（みずさわりょう）

亮介の親友。戦闘的な〈術力〉と能天気な性格がウリ（？）の〈術者〉。「ディアーナ」事件直後、忍から広島へ戻るよう命じられたが、忍の意図を探るため東京に残って…。

《術力について》『動』のタイプの術者。運動能力にすぐれ、人間ばなれした走り、跳躍などをみせる。感覚は弱い。光剣を使う。すなわち、術力を剣のかたちで定着させることができる。手刀への応用も可能。剣からのプラズマで結界をはり、時に雷撃を起こす。さらに光剣を浄火に転じる（発火能力）ことも。剣の名〈朱雀〉は、斎伽忍の命名による。

和泉希沙良（いずみきさら）



諒に匹敵するだけの攻撃力を持つ〈術者〉のひとり。奔放な性格だが、従兄弟（いとこ）の十九郎以外にはなかなか心を許さない。諒と組んで不可解な忍の行動に抵抗を試みるが…。

《術力について》『動』の術者。たぐいまれな運動能力をもつのは諒と同じである。特にスピードにおいて秀でる。感覚は弱い。手刀を使う。術力を両の手に集中させるということ。光剣のように、自分の身から離れたところに術力を定着させることはできない。結界は張れるが、動きを制限されるのでほとんど使わない。

里見十九郎（さとみじゅうきゅうろう）



沈着冷静な参謀型の〈術者〉で、希沙良のフォロー役。「ディアーナ」事件での忍のやり方に強い反発を覚えている。身体にも何やら異状があるようで…。

《術力について》『静』の術者。鋭い感覚をもつ。結界による防御を得意とするが、相手の結界を崩すなど、攻撃的な面もかねそなえる。彼の場合、結界も発火能力も、本質的にはすべて〈気〉の集中なので、そのために精神統制が必要となり、現在は九字や真言で自己暗示をかけている。術力の性質としては、従兄弟の希沙良と完全に対をなす。



七瀬冴子（ななせさえこ）

強気が専売特許の美少女で、回復系の能力を持つ〈術者〉。「ディアーナ」事件の標的となった彼女は、忍に鎌倉の本家での謹慎を命じられ…。

《術力について》『静』のタイプの術者らしいが、怪我の『癒し』と妖気の『浄化』は、彼女ならではの特殊能力。感覚は強い。防御力については不明。諒の結界を維持（キープ）したことはあるが、自ら結界を張った経験はない。



神原亜衣（かんばらあい）

亮介の同級生でGF、〈術者〉ではないが、事情に通じており、時に落ち込む亮介を励ます気丈な美少女。だんだん「普通の」生活から離れていく亮介の身を案じている。

牙（きば）



亮介たちが軽井沢で出会った謎の男。実は〈伽羅王（からおう）〉の側近〈使（つかい）〉である。姿は変幻自在で、忍の命令には絶対服従。今回亮介と行動を共にしている理由は…。

《術力について》〈空の者〉伽羅王の〈使〉であって、人間ではない。実体はあるが生命をもたず、伽羅王の術力によってその身を形成されている。ゆえに姿を自在に変形させる能力をもつ。戦闘能力は高く、我が身そのものを武器とするが、なによりも彼の力が最大限に発揮されるのは伽羅王の手中にある時である。

斎伽　忍（さいが　しのぶ）



〈術者〉一族の若き総帥で、〈伽羅王〉が転生した現世ただひとりの〈空の者〉。一連の事件の背景を把握しているのは彼だけらしい…。

《術力について》空者総帥「伽羅王」として莫大な術力を有するが、その全貌はいまだ明かされていない。

イラスト／杜　真琴

天冥の剣 1

地涯篇

序章　晩景

……十四の夜と十五の昼を、彼らは数えた。

＊　　＊　　＊

「そうね、とにかく特異な存在だと思ったわ。特殊というか……不思議な男の子だったわ」

かつて彼女自身、高名なファッションモデルであったというそのモデルクラブ社長は、美しくみがきあげた爪をからませながらそう語りはじめた。

「だってあの子、どこにいたと思う？　新宿の東口よ。それも多分、アルタの前かどこかだったのよ。待ち合わせのメッカの。

ウィークエンドの夕方なんてたいへんな人出じゃない？　あんな人だらけの中に立っていたら、まず見えないわよ。埋もれるわよ。その中にいたのよ、彼が。

しかも人を待っているんじゃないのね。ただ人を見てる——観察っていうより鑑賞って感じでね——なんだかおもしろそうに見てるって気がしたのよ。その姿が本当にいきなり、ストンってこっちの目に入ってきたのよね。

あ、それがね、不思議なのはそこなのよ。そうよ、今の彼だったら百メートル先から見ても目立つわよ、誰だってふりむくわよ。だけどそのとき彼が目についたのって、理由がないの。きれいだからとか目立つからってわけじゃないの。私、あの子に近づいて声をかけたとき初めて、あっこの子って顔立ちがいいんだわって驚いたんだもの。

おとなしい恰好してたわね。地味めのスーツに、バーバリーかなんかのコートね。高校生みたいでかわいかったわね。……かわいいなんて、今の彼にそんなこと言う人いないでしょうけどね……」

＊　＊　＊

表参道の雑踏をくぐりぬけて、地下鉄の駅をめざす。

待ちあわせは夕方五時、銀座。何をとち狂ったのか、銀座を指定してきたのだ——奴が。はっきりきっぱり、俺は銀座なんかキライだと断っておけばよかった。今さらながらそんなことを考えつつ、和泉希沙良は足早に横断歩道をわたる。

日が長くなってきた。四時を少しまわったくらいでは、街の景色はまだまだ昼間と変わらない。

たった二週間だ、あれから。

いつもどおりの人込みを、なんとなく苛立つような気分で希沙良は眺めやる。

「……気楽でいいよな」

吐き捨てて、再び歩きだす。制服姿の中学生たちの集団がすれちがう。

土曜日の午後。ガキどもの目的地は竹下通りあたりか。

本当なら自分もケンコー的に部活にいそしむなり、なじみの映画館に割り引き料金でもぐりこむなり、にこにこ楽しく優雅に遊んですごす権利があるはずだ。不公平だ。不条理だ。不服で不満で腹が立つ。どうして自分だけ銀座なのだ。例の、めちゃくちゃセンスの悪い制服姿で銀座になんか行きたくないし、ということはわざわざ私服に着替える手間がかかるし、その手間が面倒くさかったものだからつい学校そのものをサボってしまったではないか。この責任を誰がどうとるというのだ。

（いったい誰のせいだと……）

なにもかも全部おまえのせいだ、と責任転嫁できる相手は、今、自分の隣にはいない。一瞬だけ、希沙良はかすかに顔をしかめる。足の運びをゆるめはしなかったが。

（どうして）

絶対に間違っている。
何かが、絶対に間違っている。
どうして。
どうしてこんな最悪の気分のまま俺はひとりで歩きつづけているんだろう？

＊　＊　＊

『人を待っているの？』
『……ええ』
不意に見知らぬ相手から問いかけられたにもかかわらず、驚きもせず、拒みもせず、ひどく落ちついた、そして洗練された物腰で応じる……十八歳の、彼の姿。
『いえ……どちらとも言えないということにしておきます。必ず会えるとはかぎらない相手なので』
『……フラレる確率高しってことかしら』
あんまり説得力ないわね、君の場合、と呟くモデルクラブ社長に、ふわりと人懐こい笑みを向けて、それきりその言葉の真意を語らずに……。
『確率は意志によって操作できるんです。ただ、自由という名のもとに人の意志が指向性を失

う状態は怖いと思えるので……』

『……哲学のお話？』

『いいえ。個人的な愚痴です』

漆黒の髪を揺らして、やわらかい口調で。

彼の言葉も、態度も、姿そのものがひとつの謎かけにも似て。

『わかりにくい話をしてすみません。——慣れない自由にとまどっているだけなんです』

＊　＊　＊

吉祥寺の駅前で、神原亜衣は定期入れをにぎりしめ、立ち尽くしている。

高陵高校の生徒たちが、かたまりになって彼女の横を通りすぎてゆく。

肝心の、見慣れた小柄な制服姿はどこにもいない。そのことは朝の登校時にも確認してあるし、二年C組の名簿を見てもわかる。彼があらわれない、直接の原因も承知している。

目の前にあるのは、うすよごれた緑色の公衆電話。

時計を見る。四時三十分。

（きっと、まだ……）

出しかけたテレホンカードを、亜衣はまた定期入れのなかへ押し戻す。連絡は、くる。必ず

くる。

この数日の沈黙は、おそらく、状況にまったく変化がないということなのだ。

（中間試験が始まっちゃうよ、崎谷君……）

彼に言ってもしかたない。問題の根源は、あの人のほうにある……。

ふと思いたって、亜衣はまっさらなテレホンカードを再び引っぱりだし、電話にのみこませ、アドレスをめくって、これまでかけたことのない番号をプッシュしてみた。その回線がいまだに使われているかどうかは、半信半疑だったが。

三回のコールで、留守番電話の人工的な応答メッセージが流れた。

部屋にいられなくても、留守電の録音テープを外から聞くことはできるはず。

「神原です……」

すぐ近くではしゃいでいる下級生の大声が気になる。

「あ、同じクラスの……神原です……。しばらく会ってませんけど、お元気ですか」

強烈な妖気をあびて死にかけた人物相手に、元気かというあいさつはどうもリアリティに欠ける。だが切実だ。命のやりとりなんて、本当の意味で理解することはできないにしても。

「冴子さんも、水沢君も、うちの学校の生徒ってことは確かなんだから……中間テストくらい受けにこられるといいんだけど……。ノートだったらいくらでも用意しておくから、だから……」

だから、という話のつなぎかたは少し変かもしれない。

そう考えつつ、亜衣はいやな手触りの古びた受話器を、そっと握りしめている。

部外者の——普通の人間である自分に、うるさく口出しする権限はない。事態がそれほど異常なところまで進んでいるらしいことは察している。けれどそれで自分さえ彼らに関わることをやめてしまったら、いよいよ彼らはこの『普通の』生活との接点をなくしてしまう。

「……だから水沢君……。崎谷君を、助けてあげてね……」

いやだなあ当然でしょ、神原さんてば俺のことまるっきり信頼しとらんのとちがいますか、もしかして。それってひどくない？　宿命のライバルとしてはさ。

そんな反論がどこかから返ってくるのを期待して、神原亜衣はため息をつきながら受話器をおろした。

＊　＊　＊

彼は決して、職業としてのモデルには適していないのだと社長は説明する。

「まず身長とか体格とか、物理的なことも無視できないわ。あの子って昔からかなり華奢だし、背も百七十六そこそこでしょ。

それにモデルは顔を売るのが仕事じゃなくて、顔にかこつけて商品を売るのが仕事なの。そ

の点だけでも彼は失格。売りものになってくれないのよ、あそこまで完成されてる容姿と並べられたら、どんなに格式ばったブランドでもね」

ならば何故？

「彼を使ってきた理由？

一種の挑戦、だと私たちは思っているわ。

彼の姿をフィルムにおさめたかったのよ。記録できる限界への挑戦よ。彼が一度もステージに立たずに写真オンリーで通してきたのも理由は同じよ。生身の彼なら私たちには見えてるわ。それをのこすのが目的だったの。ベールをおろさない、フォーカスをぼかさない、本物の『斎伽忍』を」

それはどういう意味ですか？　彼がいつも自分の像にベールをおろしていて――本当の姿を見せなかったということですか？

「少し違うわ。

結論を先に言うけれど……私たちは二年間あの子とつきあって、結局、あの子の本当の凄さを記録することはできなかったのよ。彼はフィルムの限界を超えていたの。きれいな写真ならたくさん撮れたし、傑作としてのこる作品もあるでしょうけど、でもあんなものは影と同じよ。つまり光そのものを撮影してもフィルムにはなにも写らないわ。せいぜい写るのは影や反射。へたをするとフィルムが焼ける。そういうことよ」

具体的には、いったい何がおこったんです？　なぜ今、その『限界への挑戦』を終わらせることになったんですか？

彼が急に契約を切ったのは、何かその理由となる『事件』があったからなんでしょう？

「……それは言えないわ」

彼女は口をつぐみ、首を横に振った。

「それだけは、私から説明することはできないわ」

＊　＊　＊

夕刻の環状八号線を南へむけて疾走する、漆黒のＣＢＲ２５０ＲＲ。

均整のとれたライディング・フォームに、隙と呼べるものはまったく見られなかった。

バイクと同色の、黒いフルフェイス。

そつのない――どこか機械的な動きで、つながりはじめた乗用車の傍らをすりぬけてゆく。

ほとんど減速することのない走りは、たしかに器用だが、はりつめきった糸の危うさをも感じさせた。

まるで触れるものすべてを切りつける刃のような、鋭さをまとわせて。

「！」

西からの強い陽光が、前方を行く車のミラーに反射して両眼をかすめた。
錯覚があった。……灼かれた……!?
一瞬の光。たったそれだけのわずかな刺激で、にぶい痛みが視神経をかけめぐった。ハンドルを握る指に痺れが伝わった。
もう慣れた症状だ。
ぐい、と強引に車体を路肩によせる。左折して車の流れをはなれ、人目のない橋の上で、彼はようやくCBRを停止させた。
輝きに誘発された目眩と痛みをやりすごすために。
全身を縛る鎖のような重苦しい感覚がやわらぐまで。
神経がひどく過敏になっているのは、耐性が失われているからだ。身体の内側から。
原因はわかっている……。
ゆっくりとヘルメットをはずし、かすかに頭を振って髪を風にさらし、彼は西へかたむいた太陽に目を向けた。
挑むように。
自分が日ごとに変貌してゆくことを、里見十九郎は自覚している。
自分が、自分らしくなくなってゆくこと。
けれどそれは——失われてゆくのは、果たして自分の本質なのか、それとも本心をいつわり

つづけた仮面の部分なのか？

＊　＊　＊

高層ビルの窓に行儀悪くもたれかかって、長身の影がスクランブル交差点の人波を見おろしている。

六本木の夕暮れは、一日の始まりだ。

黄昏には不吉な印象がつきまとう。終末の予感が似合う。逢魔が時なんて言葉もあるくらいで。——けれどこの街なら。

（神々の黄昏？）

闇は怖くない。天照大神のストライキなんて知らない。一瞬の稲光であわてふためくほど自分は信心深い民草でもないし。

ガラスに掌をついて遠い夕焼けへ目をこらし、水沢諒はかすかに……笑う。口元だけで。

大差のついた完全試合、九回裏ツーアウト、打席はあいてる。

スタートラインには不足なし。

「百鬼夜行、だったりして……」

勢いをつけるようにスニーカーで窓枠を蹴りつけ、ふわりとスタジアムジャンパーのすそを

ひるがえすと、彼は力強い足どりでエレベーターにむけて歩きだす。

――戦いはつづく。闇の内にも。戦うべき者たちが、その剣を棄てずにいるかぎり。

第一章　氷の薔薇

I

「五時になりました。『イブニング・ニュースサーチ』の時間です」
「皆さんこんばんは、大江浩次です」
「横山優子です。今夜は友京証券不正事件にからむ新事実からお届けします」
狭苦しいスタジオのなかで、カメラに向かってメインキャスターの二人がにこやかにそう挨拶をする。モニター画面のほうでは、別録りしたビデオ映像が次々と入れかわり、今夜の主なメニューを視聴者にアピールしている。
「五、四、三……はいスタジオ戻します」
キューが出された。あいかわらず金融業界へ波紋をひろげつづけている友京証券の不正取引ですが、とベテランの横山優子が切りだし、本番が、いつもどおり安定した空気で進みはじめる。
ばたばたっ、とスタジオの裏側がざわついたのは、その三分後だった。

「殺人です……！」
メモを片手にADが総責任者であるプロデューサーの元へ駆けより、そう囁く。
「また六本木か？」
「なんで知ってんですか？」
六本木界隈はこのところ殺人のメッカだ。頷いてから、ADは声をひそめた。
「うちの放送センターのすぐ裏なんです、それが」
そりゃすごいぞ、とプロデューサーが呟いた。目と鼻の先で殺人事件がおきたショックからではない。他のどこよりも早く現場の映像をとれるからだ。
「誰が行ってんの？」
「かおるちゃんです。カメラはゴンさん」
「かおるちゃん熱心だからな」
コマーシャルをはさみ、痛ましいニュースを読むときの表情をつくって横山優子が、たった今はいったニュースです、と告げた。
「今月に入ってから、東京都内の繁華街、特に六本木周辺にて頻発している殺人事件ですが……今日の夕方、また新たな犠牲者が出てしまいました。現場から工藤がお伝えします」
『はい、こちら工藤です。六本木CBS放送センター裏からお伝えします』
中継用モニターに、若い女性の姿が映しだされた。

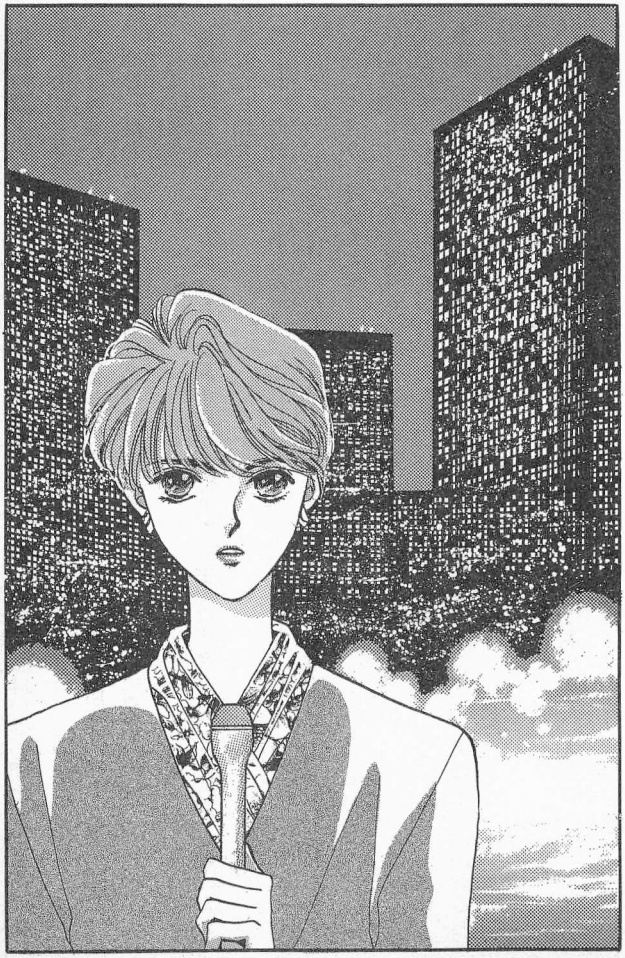
知的な印象の、背筋がきれいにのびた新人レポーターだ。キリッと口元を結んでいるが緊張しすぎてもいない。

テロップに名前が出る。

〝工藤かおる〟

『本日午後四時三十分ごろ、ビルの警備員から、建物のかげで人が倒れているとの通報があり、この男性を警察が調べたところ極度の出血多量によってすでに死亡していることがわかりました。所持品からこの男性は、古田順一さん、十九歳、M大学二年生と判明しています。被害者が多量に失血しているにもかかわらず現場に血が流されていないこと、金品がいっさい奪われていないこと、などから警察はこの事件を、一連の通り魔事件、いわゆる『吸血鬼殺人』と同じ犯人によるものとみて捜査をすすめています。古田さんは八人目の犠牲者ということになりますが……』

「今日の『ニュースサーチ』見ましたよ、かおるちゃんテレビカメラ通すとますます綺麗になるなあなんて、うちのオヤジ感心してましたよ。ファンなんですよ、オヤジ。いい年して。あっ、もちろん俺だって負けずにファンですよ、そんなこと知ってますでしょ？　いやもう昔っから俺、かおるちゃんひとすじですからね、あっはっはー」



珈織の顔を見るなり一息にそんなことをまくしたてて、鷹木文彦はいつの間にか珈織の荷物を預かり、エスコートを気取ってさっさと歩きだしている。

「今夜は残業なしですか？　そりゃよかった。ベイエリアの新しい店キープしてあるんですよ、ぜひ一度かおるちゃんに見せてあげたいと、もー、ずーっと心に決めてて」

「……あのね」

珈織は咳払いして、なれなれしく肩に置かれた文彦の手をはずさせた。そんなこと頼んだおぼえはないのだ。

「残念ね、取材がまだあるんです、これから」

「えええーっ、なんでえ？　なんでえ？　どうせそれって自主取材でしょー、例の。めんどくさくないですか、そんなにずーっと同じことばっかり調べてて」

「人が真剣にとりくんでるものを『どうせ』呼ばわりしないでください」

文彦の手から自分の荷物をとりかえして、珈織はくるりと踵を返す。

鷹木文彦はまだ二十二歳そこそこのカメラマン助手である。二つ年下の男の子に『かおるちゃん』呼ばわりされるのもあまり気持ちのいいものではないし、こんな風にべたべたと甘えてくる相手が昔から珈織は苦手である。

カメラマン助手、という肩書きも本当はあやしい。ろくに仕事もせず、気が向いたときだけファッション系のカメラマンを手伝っている。要するに放蕩息子だ。カメラについても、たい

した情熱を向けていない。専門学校を中退して、それきり誰に弟子入りするでもなし、賞を狙うでもなし、いいかげんな業界の空気に浸かってフラフラしている。

そんな気ままな生き方も、お坊ちゃんだからできるのだ。彼の父親はこのCBSの重鎮である。フリーターでカッコつかない歳になったらオヤジがなんとかしてくれますから、と文彦はあっさり言う。ということは遊べるのは今のうちだけでしょ、などとつけくわえて。

「ちょおっと、待ってくださいよ、冷たいなあ、わかってますよ、言ってみただけですよ、珈織さあん、待ってよ」

局の廊下をぱたぱた追ってきて、文彦は情けない声をだす。

彼が局内を自由に出入りしているのも、もちろん父親のコネがあるからだ。

が、それだけでもなかった。彼の態度には妙に堂々としているところがあって、まるでいっぱしの芸能人のように見えるのだ。何をしても当然、と思わせる空気だ。どんな部署にずかずか入りこんでいっても不思議となじんでしまって、なんとなく周囲が——特に女性社員たちが——彼をかわいがりはじめる。果たしてそれを人徳と呼んでいいものかは不明だが。

生まれついての、お得な人生を歩んでいる人物であることに変わりはない。

ハンサムでフェミニストで財産があるんだからおいしすぎるじゃない、と同期の女の子たちは口をそろえた。なるほど、玉の輿という要素もあるわけだ。

（あたしにはドナルドダックにしか見えないけど）

美意識の違い、というやつだろうか。

なんにしても世間にはドナルドダックが好きな人だって当然いるのだし、趣味にあわないからといってあんまり冷たくあしらってばかりでもかわいそうだ。

「梶先生には会えたの？」

ふりむいて——ただし余計な期待は抱かせないように——事務的な調子で珈織はたずねた。

「あっ！　ああそう、それそれその話をしなくちゃって思ってましたよ、俺」

かまってもらった犬が尻尾をふりまくるように文彦は明るい表情になる。

「梶先生にはまだコンタクトとれないんですけど、アシスタントの小池って奴に会えたんですよ。なんか俺、すごい話、聞かされちゃいましたよ」

「何、それ？」

珈織は足を止めた。

すごい話、と文彦が口にしたとたんに、ぞっと寒気のようなものを感じたのだ。直感、だ。

「だってこれ、怪談ですよ。小池も、あっ小池って俺と同じバイト先にいたことある奴なんで、それで喋れたんですけど、その小池も神妙ーっな顔しちゃって、絶対ほかの人には言うなよなんて念を押しちゃって、もうマジでビビっちゃってておかしかったなあ、ほら俺ってそのテの話まるっきり信用しないから嘘だぜそんなのって笑っちゃって、それで小池ムッちゃってもう話さないぞなんて言いだすし」

「その小池君って〝彼〟の撮影に立ちあったことはあるわけ？」
無駄なおしゃべりは耳に入れずに、珈織は本題を促す。文彦はうなずいた。
「あいつ長いですからね、梶先生とは。――そう、それで小池が言うには、どうやら例の件、梶先生が〝彼〟ともめたわけでも『メンズ・ジャパン』のほうでトラブったわけでもないんですよ」
「じゃあ〝彼〟が勝手にあそこの雑誌から降りちゃったってこと？　梶先生あんなに惚れこんで『彼だけは、他のカメラマンには撮らせたくない』とまで言ってたのに……」
「ちがいますよ、言ったでしょ、怪談だって」
文彦はわざとらしく声をひそめた。
「梶先生じゃなくたって、どんな凄腕のカメラマンだって、もう〝彼〟は撮れないよって小池は言うんです。――あのですね、実はね、〝彼〟の姿がいくら撮っても写真にうつらなくなっちゃったっていうんです」
「え？」
一瞬、その意味がわからなかった。珈織は顔をしかめた。
「嘘みたいでしょ？　ある日いきなり、影もかたちもフィルムに残らなくなっちゃったんですよ。確かに本人がそこにいて、何本もフィルム使いきったはずなのに、現像してみるとバックの小道具しかうつってなかったっていうんです。……そりゃ、そんなこと本当にあったらモデ

ルとしちゃ致命的ですよ。写真にうつるのが連中の仕事ですから。けどねえ……そんなの理由として通用するもんじゃないでしょう?」

「……立派な理由だわ」

不意に珈織がそう呟いた。文彦はきょとんとして彼女を眺めた。

「ちょっと、やだなあ、珈織さんまでそんなデタラメ信じちゃうんですか?」

「じゃあ何? それがデタラメだって証拠があるの、あなた?」

「証拠お? だーって……もしそんな話がホントだったら、そいつ人間じゃないですよ!」

「斎伽忍が人間じゃないってこと?」

きらりと輝いた瞳が、文彦を見返した。

「は……?」

文彦が言葉を失う。

「あのね、鷹木君……あたしが知りたいのは『常識』じゃなくて『事実』よ」

ルージュの唇を結び、珈織は両腕をくみあわせた。

鏡にうつらない魔物なら、古くからの伝承にいくらでもあるはず。——そう、たとえば、吸血鬼ドラキュラとか。

写真にうつらない……フィルムに残らないとなると、それは何者なのだろう……。

「あたし、その小池くんって人に会って話を聞きたいんですけど。だめですか?」

「ええっ？　やっぱいなー俺、友達の縁、切られるかも……」
「無理なら仕方ないんですけど」
すっかり他人行儀な態度になって、すたすたと珈織は歩きはじめる。すでに取材対象のことで頭が一杯になっている。
「ええーっ、そんな、珈織さあん、珈織さあんってば」
でれっとして尻尾を振っていた犬が一転してきゃんきゃん鳴きだした風情で、文彦は未練がましく彼女を追いかけた。
「いいですよ、俺、かおるちゃんのためなら友情のひとつやふたつ捨てますよー。だから今夜はめんどくさいことやめて遊びに行きましょうよ、ねえ、ねえってば」

II

ハイセンスにしてハイクォリティな喫茶店の、もっとも奥まったテーブルで、最大級の不機嫌をかくそうともせずに和泉希沙良が待っていた。

デートにくりだすオシャレな男女の大群をかきわけて、頭半分まわりより高いシルエットがそのテーブルへたどりつく。似合わない野球帽は、どうやら変装用らしい。東京にいてはならない人間がこんな所にいるからだ。今さらとりつくろったって無駄なものは無駄だと希沙良は思う。

頬杖をついたきり、相手の反応を冷ややかに眺めて希沙良は黙っていた。

お待たせしましたの一言もお久しぶりの挨拶もないまま、どさっと勢いよく向かいの席に腰をおろして水沢諒はお上品なメニューに目をやる。コーヒー一杯で千円という犯罪的な値段に、とんでもないと言わんばかりに眉をしかめて、それでもそれより安いものがないため仕方なくそのコーヒーをオーダーしている。

この場に似つかわしくない高校生男子二人連れに少し馬鹿にしたような視線——というのはあくまで希沙良の解釈だったが——を向けてウェイトレスが離れていくと、問題の遅刻犯は長すぎておさまりのわるい脚を組みなおし、帽子を脱いでぐしゃりと髪をかきまわした。……反省の色がない。

「人を呼び出しといて二十五分も待たせるのがおまえの習慣かよ」

長い沈黙の後の、希沙良の第一声がそれだった。

「俺の二十五分って、奇跡的に早いほうだと思うんだけど」

ぼそりと諒が答える。これは言い訳ではなく、本心からの台詞である。

店の壁にかかった大時計の針は、五時三十分ジャスト。
いつもの遅刻なら、この長針がもうひとまわりくらいしている。
「おまえ、よくそれで今まで友達なくさずにきたよな」
「たかが二十五分で失われる友情なんてたいした友情じゃないよね」
しーん、と再びしらけた沈黙が流れた。
「わかった。おまえ、友達いないんだな、初めっから」
「ざーんねんでした、深い絆でむすばれた相手がいるもーんだ」
「ちゃかして言うってことは本気じゃないんだろ」
「悲愴な顔して言えばいいってもんでもないでしょ。はっ、さては君、闘達なわたしのことを心の底では尊敬していながらもひねくれているから素直になれないんだね？」
「カッタツってもしかして、阿呆の別名か？」
「まあいやだわ、これだから無知な人って。いかに心の広いワタシでもお話にならないわ、諒ちゃんついていけないわー」
「……おまえって思いこみと押しつけだけで生きてるだろ」
「別にきーさんほどじゃないもん」
またもや沈黙。
氷点下まで温度のさがった空間へ、ウェイトレスがコーヒーを運んできた。テーブルをとり

まく不穏きわまりない気配を察して、そそくさと去ってゆく。
ごほっ、と諒がうつむいて咳払いをした。
「そーじゃなくて……」
「俺はあやまらねえぞ」
「わかってる。俺が悪うございました。ごめんなさい」
頬杖をついたまま、希沙良は視線だけをあげて相手を見る。
この大馬鹿者にしてはめずらしく真っ正直な反応である。いつもこの調子なら、けっこうつきあいやすい奴かもしれないのに。
「目的を見失っちゃいけないよね」
気分を切りかえるように、諒が呟いた。
「……話って何だよ?」
たしかに今日ここに来た目的は、不毛な言いあいをすることではないはずだった。無造作にシュガーポットを相手のほうに押しやりつつ、希沙良も抑えた声でたずねる。
「うん、まあ、いろいろ話さねばならんことはあるんだけど。ところできーさん、俺、砂糖はいらない人なんだけど」
「いらねえならいらねえと先に言え、人が親切に気をつかってやる前にっ!!」
「それって他人に対する観察不足でしょうが。俺だって、きーさんのコーヒーがブラックだっ

てことくらい憶えてるぞ」
「おまえが、そういうつまんねえことばっかし気がついて肝心なとこがボロッとぬけてる典型的なA型野郎だってことくらいなら俺も憶えてるぜ」
「おっかしいなあ、O型のカレとA型のカノジョって相性バッチリのはずなんだけどなあ……」
「やめろっ気味が悪いっ!!」
「……A型って俺のことだけじゃないよね」
ぽつりと言って、諒が大量のミルクをカップに流しこんだ。希沙良が不意に顔をしかめて目をそらした。
しつこいくらい何度もコーヒーをかきまぜ、諒が銀のスプーンをソーサーに戻してからも、希沙良からの返答はなかった。しばらく無言で彼のことを眺め、ふっと諒はその目を細めてテーブル上に両腕を組みあわせた。その身を希沙良に近づけるように。
「……和泉君。つって俺が呼んだら変?」
「和泉でいい」
そっけなく希沙良がそれだけ言う。
「んじゃ和泉。里見さん、どうしてる? ……あれから」
二週間前の、あの結末から。

〈髪切り〉の妖者・弥峨と、そのバックについていた三将の一人・剡司に、斎伽忍の指示を欠いた状況下で〈術者〉である彼らはひどい苦戦を強いられた。

たったひとつの歯車のズレが、なにもかもを崩壊へ導いてしまったような……ただひたすら苦さだけを残した一件だった。たしかに冴子の髪を素材として作りだされた〈傀儡〉は燃やし去られ、弥峨は倒され、剡司を退却へ追いこむことはできたのだから、戦果だけをみれば問題は特にない。

だが現実に今、この同じテーブルに崎谷亮介と七瀬冴子と里見十九郎の三人がそろわないのだ。以前のように、術力をもつ仲間たちがごく自然に顔をあわせる——それだけのことがかなわないのだ。

元凶はわかりきっている。

あまりにも不可解な、〈空の者〉斎伽忍の態度だ。

彼は術者たちの指導者たることを戦半ばで放棄するという信じがたい暴挙に出たかと思うと、強力な結界の内に姿をひそめ、中和能力者である崎谷亮介との間だけになんらかの盟約を成立させ、そして最後になにごともなかったかのごとく現れて術者たちへの失望を告げたのだ。

すべては演習か、と里見十九郎は尋ね、斎伽忍はそれを肯定した。

（演習……？）

いずれ本格化する三将との、あるいは九那妃との戦いに向けて、か。

筋はとおりそうだが、忍は急ぎすぎているように見える。結局は、手持ちの戦力を思いっきり削ぎおとしただけだ。忍の考えはこちらの発想をこえたぎりぎりのところまで進んでしまっているように、諒には思える。冴子を謹慎させ、自分を東京から遠ざけて、斎伽忍はその間にこの状況をどうするつもりなのか――。

『我々は、あなたの道具ではありません』

『しかし庇護は受けるというわけか』

説明できない。

その斎伽忍の一言がどれほど残酷な力をもっていたのか。道具以上にすら献身的であった里見十九郎がなぜそのとき道具の二文字を口にしなければならなかったのか。

想像、するだけだ。諒は諒なりに、希沙良は希沙良なりに。

「……あいつなら、元気にしてる」

諒から目をそらしたまま、希沙良が答えた。

「元気にしてた……と、思う」

「それって最近？」

「……十日前」

「十日？　今は？」

「その後は知らない」
「知らない？」
そんな馬鹿な、という顔をした諒をちらりと希沙良は睨む。
「別に俺たち、一緒に住んでるわけでも学校が同じってわけでもないぜ」
「……そりゃそうだけど」
「あいつ忙しい奴だし、いつも」
「……忙しい人だってことは知ってるけど」
その多忙きわまりない里見十九郎を遠慮のかけらもなくひきずりまわしてこその和泉希沙良、ではなかっただろうか。
少なくとも十九郎は、どんな事情があろうとそれを口実に希沙良を放り出すような人物ではない。
「……そうか、俺、きーさんから里見さんにつなぎがとれるもんだとばっかし踏んでたけど……そうか……」
独り言のように諒が呟く。希沙良は顔をそむけている。
「十九郎に用があんなら、あいつ本人か夏江さんに頼めよ。——俺は会いたくない」
顔なんて見たくない。声さえ聞きたくない。だから会わない。
「……うん、わかった。あの人に用があるときはそうする。夏江さんにもお礼したいし」

調子を変えずに諒がそう答えた。わけを訊いてこないのは一種の親切か。

……会わない。会いたくない。そうじゃない。そうじゃない。そうじゃない。会えない。

（違う）

なにもかもが嘘だ。

（違うんだ、俺は……）

『大丈夫だよ』

いつもどおり向けられる微笑。いつもどおり。

『大丈夫だよ、希沙良』

嘘だけで。もう残っているのは嘘だけで。そんな冷たい笑顔なら要らない。

（違うって言ってんだろうが、畜生っ!!）

ばさ、と頭を押さえつけられて目の前が暗くなった。ぎくりとして希沙良は顔を上げ、被せられたのが例の野球帽だと気づく。

「俺の前でまで泣くような奴じゃないだろう、おまえは」

水沢諒の低い声がした。

「うっるせぇな……」

余計なお世話だと帽子をたたきかえせばよかったのかもしれない。

けれど……。

「うるせえな……友達いねえんだよ、俺は！　三分だけ黙ってろっ!!」
「俺って三分間かぎりのお友達？」
いいけどねそれでも、とひとりごちて諒は壁の大時計を見上げる。
覚悟はしていたつもりだが。
いざ動きだしてみると、状況はやはり一筋縄ではいかない深刻さだ。予想外のところまで波紋が広がって。
斎伽忍の影響力、というものをあらためて認めなければならないのか……。
「あのさあ、これ戯言だから、そのまんま聞いて」
三分きっかり経過したところで、諒が口をひらいた。
「俺、本当はもっと早くこうやって和泉に会って、里見さんにも連絡とって、とにかくあのまんまじゃ忍のやろうとしてることがあまりにも不可解だから、ふたりに力を貸してもらってあいつの企みをひっくりかえしてやろうと思ってたのよ」
「……」
帽子ごと希沙良は沈黙している。表情を隠して。
「だけど現実には、すでにあれから二週間たってるわけですよ。そりゃ、いろいろ下準備とか裏工作とか……そういう雑用もあったりしたけど……でも本当のところは、要するに俺が落ちこんでただけなんだ、何もできなかったのは」

（……誰が？）

その口調に、今までひとりでずっしり落ちこんでいたという響きは感じとれない。

「正直言って、やっぱり打ちのめされましたよね。後になればなるほどね……」

組んだ指を口元にあてて、諒が少しうつむく。

「……そっちこそ、俺に愚痴こぼすような奴かよ？」

ぼそりと希沙良から声が返った。にっ、と不敵な笑みを諒がうかべた。

「うん。まーさーに、そのとおり。否応もなく元気になるよね、きーさんの前に出ると」

「厭味か、そいつは」

「ここで厭味なんか言ったってなんの得にもならんでしょうが。――つまり俺がまるっきりひとりだったら、動きだす勇気も出なかったかもしれないってことですよ。だから……まずは、こうして来てくれたことに感謝してる。それだけでも嬉しいと俺は思う。どうもありがとう」

「……」

複雑な無言状態の後、ぶっきらぼうに希沙良が言い捨てた。

「……たしかにすげえ戯言だな」

肝心なのは、まず自分たちの置かれたこの状況をきちんと把握することだ。

今の空気が、なにかとても居心地の悪いものだということだけははっきりしている。このままずるずると流されて、言いたいことも言えず、会いたい相手にも会えず、誰かの思惑で退けられていくのはいやだ。自動的に舞台から退場させられるのはいやだ。

「とにかく忍が隠してることをぶちまけないと……」

日の暮れた並木通りをゆっくり歩きながら、諒が言った。とりあえず晩メシでも食いながら話すかと喫茶店を出たはいいが、何を食べるかについて互いの意見がまったく一致しないため、あてもなくトロトロ歩いている最中である。

「なんで忍があんなに目茶苦茶だったのかってことと、あいつがこれからどうするつもりなのかってことの両方……かな」

「……」

並んで歩く希沙良が、一瞬、なにかひっかかったような目を諒に向けた。

「……変だな、おまえ」

「は？」

「変だぜ」

「……そう藪から棒に言われても」

「わかんねえならいい、別に」

釈然としない諒を残して、さっさと希沙良は先に進んでいく。なにがなんでも俺は屋台のラ

ーメンはいやだからなっ、とクギをさして。
希沙良から見れば、斎伽忍はいつも目茶苦茶なのである。その無責任な気まぐれを神の仕業と呼んで常に意味づけしようとしていたのが斎伽忍の信奉者たちであり、水沢諒はまぎれもなくそのはしくれのはずだ。――そうでなければ、瀕死の状態で斎伽忍から見捨てられても平気でいられた説明がつかない。
（中途半端だ……）
斎伽忍という一個人については何ら興味も関心もないが。
神様として語られていた存在がときおり人間として扱われる――というのは、妙だ。その切りかえの位置が諒といい……そして十九郎といい、一定していないように思えて。
『あなたには、何もわからない……！』
なら何をわかってほしかったっていうんだ、あいつに。
何を期待したんだ。なんでそんなに。おまえはなんでそんなにあいつの全部を欲しがったんだ!?
（どうして）
……少なくともあの従兄は、この自分相手にあんなことは言わない。
この自分を、あんな風に責めることはない。
理由を希沙良は知っている。知っている、気がする。

「斎伽忍がどういうつもりで動いてるかなんて、どうやったらわかるんだ？」

ぽつりと希沙良の背中が尋ねた。

「それにあの冷血野郎の考えがわかったとして、おまえどうするんだよ。仮にそれがとんでもない――この前よりもっと目茶苦茶なことだったらどうするんだ、おまえあいつを止めるのかよ。平気でおまえを見殺しにできる奴だぜ、相手は。もしまた誰かがそんな目にあったら、おまえって本気で斎伽忍のこと止められるのか？」

「……」

「はっきりさせとこうぜ。おまえ何のために斎伽忍の考えを知りたいんだ？」

希沙良はふりかえり、足を止める。

「……なるほどね、確かに俺は忍の敵にはならないだろうね」

あっさりした返答があった。

敵対する意志がないのか、その力が足りないのか。

希沙良が反問するより早く、諒が言葉をつづけた。

「だけどあいつが間違えたら、それを言ってやる奴がひとりくらいはいなきゃならないし……あいつのせいで誰かが泣くのもいやだし、それに」

それに――。

スタジアムジャンパーのポケットに両手を突っこんで、正面から風を受けとめ、水沢諒はま

っすぐに希沙良を見返した。
「大事な親友と惚れた女をいっぺんに横取りされて、泣いてひきさがったら男の人生真っ暗でしょうが」

III

寂しく光る星を見ている。
白く冷たい、けれど剛い……恒星。
藍色の夜空を見つめている。
子供のころ叱られて家の外に出されて、涙ごしに仰いだ静かな闇に似ている。
深い畏れと、かすかな安らぎと、胸の痛み。

＊　＊　＊

沈みきってしまった太陽。

「もしもし?」

車道沿いの電話ボックスから、数日振りのコール。

「……もしもし……。あ、崎谷です……ごめん、遅くなって……」

いくつものテイルランプがすぐ近くを高速で走り去ってゆく。

東京タワーのライトが道路の先にのぞいている。土曜の夜でも、この交差点の周辺は閑散としていて人通りはない。

「え? いや、そのことは知らない……あさってまで? じゃあ山岸に電話すればいいんだ? ……うん、わかった、ありがとう」

先週はまだ良かった。学校に行く時間くらいなら取れていたのだ。遅刻したり早退したりしながらも、なんとか登校したという形跡を出席簿に残している。

結局、今週はまるまる全滅だ。——拘束は仕方ない。そうする必要があると〝彼〟が判断した以上。

ポケットの内にはいつもコインが眠っていたけれど、こうして連絡する機会はなかなかとれなかった。そんなことはきっと言い訳になってしまうのだろう……。

ガラスの壁に指を触れて、亮介はまた空を見る。

「明日は時間とれると思うんだ……会えるかな……うん、夕方、行くから。電話する」

大宇宙。
原始の星を、太古の風を思う。
『……崎谷君、今、元気？』
電話のむこうから、神原亜衣がそう問いかけた。
「元気だよ」
亮介が答える。
……嘘じゃない。まだ君に話せないことはあるけれど。
それがせめてもの誠実なら。
「元気だよ……。少し、ドキドキしてる。今はね……」

＊　＊　＊

信号が青に変わり、さまざまな恰好の人々が横断歩道へ流れ出す。夜の街へくりだす若い男女や、駅へ急ぐサラリーマン、そして異国からの来訪者も六本木には多い。
メモを片手に、工藤珈織はその流れに同化して車道を横切った。
鷹木文彦から聞きだした『小池君』の連絡先は、新宿のスタジオだった。腕時計を気にしながら珈織は地下鉄の降り口を目指す。もたもたしているとスタジオが閉まってしまう。

新宿区の片隅には、珈織のささやかな住まい——六畳のワンルームマンションだが——もある。帰り道を、わずかに遠まわりすればいいだけのことだ。地下鉄をあきらめて、珈織の目は空車の赤ランプを点けたタクシーを探しはじめた。

『どんな凄腕のカメラマンだって、もう〝彼〟は撮れないよって小池は言うんです』

〝彼〟——知る人ぞ知る、『メンズ・ジャパン』専属モデル。

珈織自身は、ファッション業界にこれといった興味は持っていないし、カルトなメンズ雑誌をひらいてみる機会などありはしない。文彦がその雑誌の一ページを持ちこんできてくれなかったら、永久に〝彼〟とかかわることはなかったかもしれない。

となると、文彦に感謝するべきなのだろうが……しかし……。

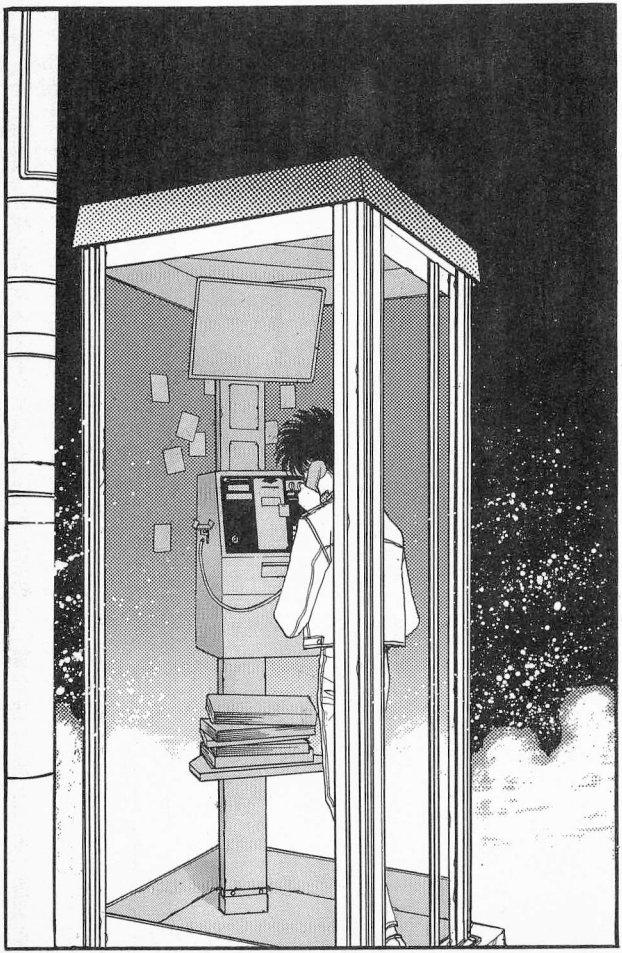
（人間じゃない？）

調べれば調べるほど、とんでもない獲物に突きあたってしまったように思えてくる。まともなエピソードがないのだ、彼に関しては。

その素性も、経歴も、現住所さえもわからない。徹底した秘密主義。モデルクラブの人間も、『メンズ・ジャパン』編集部も、彼を担当したカメラマンたちも、何も語ろうとしない。彼らも要するに知らないのだ……あの青年の正体を。

わかっているのは、至高の美貌。

有無を言わせぬ、圧倒的な存在感。



凍らせた薔薇、と呼んだカメラマンがいる。触れれば砕け、棘を残して消え去る。香気と光。瑕瑾のかけらもなく完成されたヴィジュアル。

高い評価を得ながら広く一般大衆に知られていないのは、彼が仕事量を極力おさえていたためと、情報が外へ流れすぎないよう巧みに操作していたためだ。たとえば彼の写真が『メンズ・ジャパン』の表紙を飾ったことは一度もない。彼自身の意向によって、であると編集者のひとりが証言している。

(なにか目的が……?)

謎、謎、謎また謎。近づきすぎてはいけない相手だ。

危険……。相手が悪すぎる……。

「あ」

赤ランプのタクシーがすぐ目の前まですべりこんできた。珈織は片腕をあげてそれをつかまえ、荷物を肩にかけなおして車道へ踏み出そうとした。

ふうっ、と強風が吹きぬけた。

「……!」

珈織の手中から、もぎとられるようにメモが飛んだ。スタジオの場所を記した紙片が。反射的にその行方を追って、珈織は風下をふりむいた。タクシーの……後ろ。

瞬間。

なにげない動作で、一本の腕がその紙片をとらえた。
まるで風がその位置を狙いすましたようなタイミングだった。ごく自然に、優雅に。
白い指が映える。
珈織は目を瞠っていた。信じられない。そんなはずがない。
彼は。
暗色の、夜に溶ける装いで彼はそこに立っていた。漆黒の髪を風に泳がせて。大人びた、端正な、幻めいたその若者は。
「どうぞ」
やわらかいテノールの一言とともに、珈織の掌に紙片が戻された。珈織はそれを受けとったが、他にどうすることもできなかった。
彼は微笑したかもしれない。
あるいはその静寂は、鬼気を孕んだものであったかもしれない。
気づくと珈織は、ひとりでそこに立っていた。お客さんどうしました、とタクシーの運転手に言われ、我にかえる。風のなかで握りしめた紙片と自分の髪だけが舞いつづけていた。
……斎伽忍の姿は、すでにどこにもなかった。

第二章　爪痕

I

『今月に入ってから、東京都内の繁華街、特に六本木周辺にて頻発している殺人事件ですが……』

予約録画してあった今日の『イブニング・ニュースサーチ』のビデオを再生し、珈織はストッキングを脱いでベッドの上に放りやる。もう少しで日付が変わる時刻である。

とんだハプニングのおかげで新宿のスタジオに行く時間が遅れた。問題の小池君は一足違いでスタジオを出ており、話を聞くことはできなかった。明日は日曜日でスタジオは休みだ。

「まいったなあ……」

ため息が出た。

絶好の情報提供者とコンタクトする機会が先のばしになってしまったのも、ショックと言えばショックだが。

頭の内側に、まだ熱が残っている。

正体不明の衝撃がつづいている。
……やられた、という感じだ。言葉にするなら。
（あれが、斎伽忍）
まさかあんな成り行きで本人を前にすることになるなんて。
予想をはるかに超えた……美しさ。
生身で存在するとは信じられない。本当に彼はそこにいたのだろうか。本当に自分は彼の声を聞いたのだろうか。
『……などから警察はこの事件を、一連の通り魔事件、いわゆる吸血鬼殺人と同じ犯人によるものとみて捜査をすすめています』
十四インチのテレビ画面で、自分の姿がそんな台詞を吐いている。
――吸血鬼？
古い言葉だ。作り話じみている。報道の現場には似合わない類いの。
ラガービールの缶をあけて、珈織は狭い部屋の真ん中にぺたんと座りこんだ。
「やっぱり、似てるかもしれない……」
似ているかもしれない。
二十歳になったばかりの、変わり種のスチールモデル。斎伽忍。
同じ顔、ではない。そのものではない。けれど――近い。どこがとはうまく言えない。まと

わせる空気が。そなえた美の性質が。

あの女性に。

ルルル、と不意に電話が鳴った。ぎくりとして珈織はビールの缶を床に置く。こんな夜中……。

大阪の実家でなにかあったのだろうか。なにか不吉なこと。よくない知らせ。

「はい、もしもし……」

工藤です、と名乗って出ないのは、都会で一人暮らしをする女性の常識だ。

『あっ、珈織さんですか？　夜分遅くすみません、俺です。鷹木の文彦ですけど』

「……鷹木君？」

はたして彼には自宅の電話番号まで教えてあっただろうか。珈織は一瞬、プレイボーイの情報収集能力に舌を巻く。これで用件が今から飲みに行きましょうよなんて内容だったら、いったいどうしてくれよう。

「どうしたんですか？」

慎重に、こちらから尋ねてみる。

『どうしたもこうしたも……』

めずらしく抑えた声音で、鷹木文彦が呟いた。

『小池やられちゃいましたよ』

「え？」
『ですから。カメラマンの梶先生のアシスタントの小池ですよ』
「それはわかってるけど。何？　小池君どうかしたの？」
『殺されちゃったんですよ。さっき』
「……え？」
冗談――にしてはひどすぎる。
悲惨なニュースを読むのなら仕事だ。殺人だの犯人だのといった言葉になら慣れている。けれどこんな風にいきなり、こっちがビールなんかあけてくつろいでいたりするところにその手の知らせが飛びこんでくるというのは。
「……嘘でしょ？　だって……」
『今さっき、昔のバイト仲間から電話まわってきたんですよ。嘘じゃないです。本当に、ほんの一時間くらい前のことらしいんですよ。まだ警察が動きまわってる最中なんじゃないかな。――なんだか知らないけど、あいつ、六本木で見つかったんですって』
「……六本木？」
『明日のニュースになりますよね、これって』
どこか意味ありげな、鷹木文彦の一言。
そうか、と珈織は気づいた。同時にひどく不気味な、ひどく現実感を欠いた、いかにも推理

ドラマ風の想像が頭をかすめていった。

『九人目の犠牲者、だそうです。——例の、吸血鬼です。なんであんな、小池みたいなフツーの奴が狙われたりしたんだろう……』

（……彼）

先刻、あの、魔物のような美青年とニアミスしたのが、やはり六本木だ……。

（彼……見ていた？）

あのとき、スタジオのメモを受けとめて。その内容を。もしかしたら、彼が。

そんなできすぎた話って。

「少し、詳しく聞かせてもらえる？」

『あっ……じゃあ俺、もっと友達とかあたって、事実関係はっきりさせたら、また連絡しますから』

案外しっかりした態度で、文彦はそう言って電話を切った。珈織は受話器を置き、ぐしゃぐしゃになった頭の中身をどうしたものかと途方に暮れた。

II

近頃、世間はなにかと騒がしい。

朝刊の社会面には、八人目と九人目の『犠牲者』の記事が、そろそろ慣れてしまった風情であっさりと載っている。

「いやねえ……」

コーヒーをわかしながら、ダイニングテーブルで新聞を広げ、里見夏江はそう呟いた。日曜の朝から物騒な話はあんまり読みたくないものだ。

ちょうど二週間ほど前から、その連続殺人は気まぐれに、なんら法則性をもたずに引き起こされている。やや異常なその手口に、マスコミはいつの間にか『吸血鬼』のイメージをダブらせ、それを世に浸透させることに成功した。

犯行は、決まって夜。

被害者の身体からは、大半の血液が失われている。しかもその血はどこにも流されていな

い。

場所は、きらびやかな六本木の片隅。

妖艶な美女が男を誘いこんでは血をすすっている、などという無責任な噂を口にする人々までが現れている。いわゆるワイドショーや二流週刊誌におけるコメンテイター・タレントに、その手の言説は多く見られる。

噂なら、つい先日まで、まったく内容は違うが性質は等しくホラー調の噂がひとつ、まことしやかに流れていたはずだ。とうの昔にそんなことは忘れて、マスコミは新しい話題に乗りかえている。もともとマスコミとはそういうものだが。

ただ、前回の『髪切り』があくまで噂の域を出なかったのに対し、今回の『吸血鬼』は立派な凶悪事件である。警察が出てきて太鼓判を押してくれれば、それまでは子供たちの噂を笑うだけだった大人も、諸手をあげて盛りあがることができる。

誰だって、世の中を面白がりたい。ただし自分は安全なところから。

あたりまえの話だ。

「煮詰まってますよ、コーヒーが」

台所から、優秀な一人息子の声がそう告げた。

「あら、ごめんなさい」

「そっちに運ぶから」

「あなたの分ないわよ」
かちん、とコーヒーメーカーのスイッチを切る音がして、ポット片手に十九郎がテーブルのほうへ姿を見せた。
顔色は悪くない。いつもと変わらない。夏江は冷静に彼のことを観察する。
悪くはないが……。
「どうしてそういう、子を子とも思わない真似ができるんだろう、この人は……」
夏江専用のカップをテーブルに置きながら彼が呟く。
「ありがとう、ついでにホットミルクね」
「ついでに？」
「母の頼みが聞けないの？」
「……誰かに態度が似てきましたね」
複雑な独白を残して、十九郎はそれでも台所に消える。
「レンジであったためないで、火にかけるのよ。味がぜんぜん違うんだから」
「カフェオレなんて、いつもは飲まないんじゃなかったんですか？」
「あたしは朝からカフェオレなんか飲まないわよ。ミルクはあなたが飲むのよ」
ミルクパンを持つ十九郎の手が、一瞬止まった。
「……そうならそうと……」

「あたしも年かしらね、耳が遠くなったわ」
ばさりと新聞紙をめくって夏江がそんなことを言う。
そちらを振り向いてから、やむを得ず十九郎はコンロの火をつける。台所に立つのはもともと嫌いではない。趣味と実益を兼ねて。
「通り魔殺人、九人目ですってよ。気をつけるのよ」
「……」
どんな気をつけろというのだろう。
「気をつけるのは母君のほうですよ」
「だって犠牲者は若い男性ばっかりなのよ」
六本木へ出向く用など、自分にはない。
「受験生が、夜中に六本木をうろつくわけにはいかないよ」
青い炎を見つめながら、十九郎がそう答えた。
「京都大なんて第一志望にするから忙しさに輪がかかるのよ」
「やるからには、ハードルは高くしておきたいから」
「愛する息子が心に決めたことなら、もちろん応援は惜しまないけど。京都に行くつもりだってこと、あなた希沙良には話したの？」
「どうして？」

「また一騒ぎあるんじゃないの？」

高校受験のときの話を夏江はしている。十九郎と同じ学校に行きたいという一念で希沙良が私立祥英高校を受験し、結局その目的を果たせずに終わったという前例があるのだ。

さすがにあのときは夏江でさえ、希沙良をうまく慰めてやることができなかった。希沙良はよく拗ねる子だが、本当に心底から絶望的に落ちこむことは滅多にない。その滅多にない状態が一か月近くつづいたのだから……。

「……先の話だよ」

十九郎が短く言う。

まだ希沙良には話していないということだ。

「最近、来ないわね、あの子」

呟いて夏江がカップをとったとき、電話が鳴った。

ベルの音が鼓膜に刺さる。

十九郎は動かなかった。夏江が立っていき、受話器に手をかける気配があった。

身体が重い……。

「あら、朝早くからめずらしいこと」

軽くはずんだ夏江の声がした。十九郎はもう少しでマグカップをとり落とすところだった。

電話の相手が誰なのかは、夏江の声音ですぐにわかる。

あの日ここをとびだして行ったきり、一言も交わせずにいる——年下の従弟。

「今日？　あたしに？　午前中なら大丈夫よ、夕方からお店に行かなきゃならないけど。え？　外で？　どうして外で会いたいの、なにか訳があるんじゃないの？」

（……！）

そういうことか。

十九郎は静かな足取りで台所を出ると、窓際の夏江から無言で受話器を譲りうけた。

「……希沙良」

切られるかもしれない。

そう思ったが、返ってきたのは沈黙だけだった。

「家に来ればいい。俺ならいないから」

それだけ言って、十九郎はまた台所に戻ってゆく。コンロの火を消す音がした。

「……ふうん？」

彼の背中を見やって夏江は小さく呟き、あらためて受話器を持ちあげた。

「うちのバカ息子はあんなこと言ってるわよ、希沙良。どうする？」

わかったわ、じゃあね、と告げて夏江が電話を切る頃には、十九郎は上着の袖に腕をとおし、鞄を手にとるところだった。

「西城君との待ち合わせはお昼じゃなかったの？」

「その前に図書館で試験勉強でもするよ」
「朝御飯は？　あなたドサクサにまぎれてミルクも飲まないで行く気ね」
「外で済ませるから」
「見えすいた嘘つかないで。全然食べてないこと知ってるのよ、あたしでも」
十九郎はかすかに唇を噛む。
「……食べるよ、今日は」
「あたしは見えすかない嘘をつけって言ってるわけじゃないのよ。当然だけど」
……わかっている。
わかっているけれど。
どうしても傷つけてしまうなら嘘でもつくしか。
「母さん……本当に」
顔を伏せ、十九郎は無理に声を押し出した。
「本当に、大丈夫だから……」
扉をひらき外へ出ていく彼の姿を、夏江は腕を組みながら見送った。
（背負いこむんじゃないわよ……）
ほんの十七年生きた程度で、人は大人にはなれないのだから。

III

曇り空から小雨がぱらつき始めた午前十時、和泉希沙良は自由が丘の里見家にたどりついた。

十階建てのマンションの七階に、あの母子の家はある。

エレベーターの中で、雫の落ちかかる前髪を希沙良は指でかきあげる。目を閉じて、またひらく。怖くない。なにも怖くない。

（震えるな……！）

自分の身体に言い聞かせて。

七階に到着したエレベーターから、一歩踏み出す。

と、通路の奥から三枚目の扉が、ふわりと開かれた。まるで時をはかったように。

「いらっしゃい」

夏江が微笑した。扉の内側で。

「……降られちゃってさ」
濡れた顔のまま、希沙良は笑うことができた。
「カサ借りていい？」
「ばかね。その前にタオルよ」

＊　＊　＊

図書館への角を曲がるところで、十九郎はふと足を止めた。
細かい雨がアスファルトをしめらせている。灰色の景色のなか、街路樹を背にして、見知った人物が立っていた。
傘はさしていない。スポーツジャケットのフードで雨をしのいで。
「おはようございます」
十九郎の視線を真顔で受けとめ、水沢諒がそう告げた。
「……元気そうだね」
「おかげさまで。その節はお世話になりまして」
「いいよ。あれは別に君のためじゃない」
「……はっきり言うんですねえ」

少し感心したように諒が呟いた。

助けたくて諒の命を助けたわけではない、という文脈にもとれてしまうことに気づき、十九郎は不用意な一言をその場で後悔する。

余計なことに気をとられているからだ……。

「ごめん……どうかしている……」

「考えすぎないでください」

首を横に振り、諒はかすかに笑ってみせた。

「いきなりで申し訳ないんですが。ちょっとばかし、お時間とってもらえませんか」

＊　＊　＊

「本家？」

夏江が眉をひそめた。

「どういうつもり？　あなたまさか殴りこみかけようなんて思ってたりしないでしょうね」

「なんで俺が殴りこまなきゃならねえんだよ」

妙にあり得そうな想像だったので、希沙良は居心地の悪そうな顔になる。たしかに斎伽の〈本家〉に対しては、ろくな印象を抱いていないが。

いけすかないという理由だけで殴りこんだらただの馬鹿ではないか。
「俺じゃなくてさ。情報欲しがってんのは」
「あら、あなたいつの間に諒ちゃんと結託したのよ」
「まあだ何っにも言ってないだろッ、俺はっ!!」
ばんっ、と希沙良の片手がテーブルを叩いた。
「だってそれ以外ないじゃないの、この話運びは」
「……そうだけどさ……」
夏江は平然としている。なんとかならねえのか、この察しの良さは、と希沙良は内心で歯軋りした。
これがあくまで利害の一致による協力関係であって、まかりまちがってもオトモダチ関係などでは断じてないっ、ということをまず先にこんこんと説明してからでなければまたもやいらぬ誤解をまねくであろうと深く考察した末に話を持ちこんだのに。
「諒ちゃんってば、伽羅王に東京から追放されたくせにまだ頑張っているわけね？　……なかなか根性あるわね」
「……よく知らないけどさ、俺は」
本当に、気がついてみると、水沢諒の背負っている事情を希沙良はほとんど知らない。
崎谷亮介の友達で、斎伽忍の使いっ走りで、おちゃらけてばかりいるかと思うと根が暗くて

ヒステリーでやかましくて自分勝手で自信過剰で後先見えていない馬鹿な奴、ということくらいしか。

（火事で親がどうかしたって？）

学校を転々としてまで斎伽忍に尽くしていたわけだから、何か特殊な理由があって然るべき、ではあったのだ。

「本家にはできるかぎり関わらないのが正解よ。特に希沙良、あなたはね」

さとすように、静かに夏江がそう言った。

十九郎と同じ態度だ、と希沙良は思う。

知らなくていいと決めつけて自分から遠ざける。隔離している。昔から、ずっと。

「だから。俺が知りたいってんじゃないし俺は関係ない。ただ、あの阿呆がお姫さんの居所を知りたがってるだけなんだからさ」

「冴子ちゃんね……」

夏江は少し間をおき、じっと考えこんだ。

「……本家といえば鎌倉がいちばんのお屋敷だけれど、他にも、武蔵野やら多摩やら相模湖やら、大きな別宅が東京近郊にはいくつかあるのよ。諒ちゃんが迷ってるのは、多分そのせいね。とりあえず、その件はあたしが調べてみるから待ってるように諒ちゃんには伝えて」

「なんでそんなにむちゃくちゃ金持ちなんだよ、本家って」

「本家だからよ」

よくわからない。

「とにかく、絶対に早まらないで。独断で行動に出ちゃ駄目よ。情報面でならあたしも少しは協力できるけど、問題がおきてしまったらあたしひとりの力で本家はどうにもならないんだから。いいわね？」

「……大袈裟なんだな」

「甘く見ないで。大袈裟なんかじゃないのよ。肝に銘じておくのよ、あなたたちふたりとも。諒ちゃんはまだわきまえていそうだけど希沙良のほうが心配だわ。動くときは必ずこちらに相談するのよ、でなきゃ認めないわよ」

「わかってる、わかったからさ……」

仕方なく希沙良は降参する。頭ごなしに言われると気分はあまりよくない。

「で？　この件、バカ息子には内緒なの？」

「……」

不意をつかれて、希沙良は黙りこんでしまった。

「まあ言っても言わなくても、いずれ伝わることだけど」

「……っていうか、さ……」

テーブルに両ひじをついて体重をかけながら、ぽつりと希沙良が呟いた。

「あいつ、今はしばらく……こっちのこと、考えないほうがいい……」
壊れる。
あのままにしておいたら。
どうしたら楽になれる？　何が変わったら？
「駄々こねてあげないのね？」
「んなことしてねえよ俺は、いつも」
「嘘。生き甲斐を失って拗ねてるわよ、あの子」
それは違う。
怒鳴りたい気持ちを、希沙良は抑えつける。
「俺のせいじゃない」
「……希沙良はそう思うのね」
「思ってるんじゃなくて知ってるんだ」
言いきって、希沙良は立ちあがった。
「俺のせいじゃない。……それから、夏江さん、あいつバカじゃねえんだから、バカ息子っていうのやめてやってよ……」



＊　＊　＊

「……東京にいるんだな」
ふと気づいたように、十九郎が言った。
「そうそう素直に命令ばかり聞いてもいられません」
諒が答える。
「なるほど……」
傘をたたみ、十九郎は図書館の入口で諒をふりかえる。突き出した屋根と大きな柱が風雨をさえぎる。
「意地だけで残ってますけどね、俺も」
諒は肩をすくめた。
「意地を張れるならまだ大丈夫さ」
「里見さんの哲学ですか？」
「実践論になればいいといつも思っていたり……したら、笑えるね……」
本気なのか冗談なのか、今ひとつつかみにくい空気だ。諒は無言で彼のことを見つめた。
「水沢はどうしたいんだ？　それで」

前触れもなく、十九郎がそう尋ねた。
「どうしたい、と言うより……」
いきなり核心に来るあたり、相手のほうが一枚上手である。かなわんなあと思いつつ諒は口をひらく。
「その前にまず『いったいどうなっちゃってるの!?　誰か教えて！　誰も教えてくれないのなら諒ちゃん自分で調べちゃえーっ』とゆーのが俺の正直な立場ですけども」
「今の状況そのものはそれほど複雑じゃないよ。見ればわかることばかりだ。水沢が知りたいのは状況でも事実関係でもなくて『斎伽忍』という人の心の内側だろう。違うか？」
「……」
鋭い。
逃げ場がない。里見十九郎という人物の前には。
優しさのオブラートに包まれて、それはいつもはっきりとは見えないのだが。
「……大当たりですわ」
雨のはねかえる地面を見おろしながら、諒はそう認めた。
情報をいくら積みあげたとしても。また、その結果として自分がどんな行動に出ることを選ぼうと。
本当の動機は。自分を動かす力の源は。

「あいつは待ってるんじゃないかって気がするんです。変な譬えですけど、俺の目の前に俺の大好きな餌をふたつぶらさげといて『さあ動け、動いてみろ、追っかけてこなかったら二兎どころか一兎も手に入らんぞー』と言ってるも同然なんじゃないかと」

「何を待っているかが問題なんだ」

あくまで冷静に十九郎が続けた。

「そうして条件を整えることで罠をかけて、水沢を反逆者として処分する名目を作ろうとしている可能性もある。――可能性ならね」

さすがに諒は絶句した。平気な顔でそんなこと言わないでほしい。

（……そこまで考えるか!?　この人は）

和泉希沙良の苦労する理由が、なんとなくわかる気がしてきた。

いや……もしかすると、斎伽忍にとっても、この人物の存在は……。

「悪意があって言っているんじゃないよ。誤解しないでくれ」

「……わかります、それは……もちろん」

「ただ……あの人は、先入観の通用しない人だから」

十九郎は遠い雨空に目を向ける。

「期待というのは先入観から作られるものだろう。裏切りもね……。そしてあの人は何通りもの先入観を相手にして生きなければならない。正反対の先入観を両立させるのは……疲れるよ

……」

「……」

その言葉には、嘘も悪意もない。

やわらかい情念を、諒は聞きとった。理解と共感がなければ、きっとそんな風には語れない……きっと。

「だけど、なら、里見さんは……」

「悪いけれど、俺は水沢に協力することはできないよ」

言いかけた諒の台詞を制して、十九郎がそう告げた。

「崎谷君にも、冴子さんにも……誰にも、今は関わりたくない。動きたくないんだ」

「……理由は、訊いちゃいけませんか？」

諒が尋ねる。

その瞳を見上げてから、十九郎は苦笑に似た表情を作った。

「反抗期の不良少年に理由なんかないよ」

「……あのですね……」

これもまた、冗談なのかどうかよくわからない。

「理由があれば許せるってものでもないだろう。同情はひけるかもしれないけれど」

では十九郎はどんな方法で人を許すのだろう。

知りたいような気がしたが、諒は一歩、後ろにスニーカーを戻した。
「里見さんと話してると、それだけで勉強になりますね」
「そうかな……やつあたりしているだけだよ、俺なんて」
「人が褒めてんですから素直に受けとっていただきたいっ！　素直にっ！」
「だから反抗期なんだ。人の言うことは信じたほうがいいよ、水沢君」
「よおおくわかりました、先輩。また新たな教えを請いに現れますので、その折はよろしく。ではではっ」
今回かぎりでは諦めないぞという意志表示をしておいて、諒はぺこりと頭をさげ、フードをかぶりなおして踵を返した。覚悟しておくよ、と十九郎が背後で笑った。
「あ、里見さん」
数歩離れたところで、ひょいと諒が肩ごしにふりむいた。気になっていたことがひとつある。
「……痩せちゃいましたね、少し」
「そうでもないよ」
諒の一言を、十九郎は穏やかに否定した。それだけだった。

IV

午後三時。

いつしか雨は天に還り、まるで夜明けが遅刻してきたように、雲の切れ間から太陽がさしはじめた。暗い空の裂け目から光が降るさまは、よく宗教画に描かれるイメージそのままだ。

ふっ、と強い存在が近くで実体化した気配があった。夏江は洗いものの手を止めた。

今日は奇妙な日だ。ずいぶんと星回りの派手な日にちがいない。

来客運、というやつだろうか。

エプロンを居間のソファに置き、玄関へ向かう。

扉をひらいても、そこに人影はなかった。夏江は階段のほうをふりむき、その壁際に彼の姿を見つけた。

「まあ、嬉しいわ」

あざやかな黄金色の陽光を半身にうけて、彼は立っていた。静かに。

「お目にかかれて恭悦至極、よ。伽羅王」
「どういたしまして、こちらこそ」
にっこりと笑った夏江に応えるように、斎伽忍は人懐こい瞳をして、そんな一言を口にした。

「それほど長く不義理をしましたか？」
「長いわね、たいへん長らくの御無沙汰、御健勝でなによりですこと、と言いたくなっちゃうもの、私」
「なぜかあなたからはいつも、遠ざかっているという気がしないんですよ。……御子息のおかげかな」
斎伽忍はマンションの屋上に踏み入る。雨あがりの大気が彼の身を包み、流れてゆく。
「お誕生日、だったのよね。今月は、あなたの」
夏江が呟いた。
五月二日。斎伽忍が二十歳になった日。
「成人の儀は廃止？　いくら長の意志でも御老体たちが黙ってはいないでしょう」
「来年の正月にでもやればいい。かたちだけの祝いごとなら」

「形骸ならね……。ただ、あなたには他の意味で、あなたのことを祝える人がいるはずじゃないの？」

「無用です」

あっさりと忍は首を横に振った。

「これで先行きが一年減った。秒読みは悪趣味ですよ」

「あなたの発想のほうが悪趣味だわ」

顔をしかめて、夏江が言う。

「失礼。それほど深刻に考えたわけじゃない。言い訳にはなると思ってね」

忍は微笑し、そして天を仰いだ。自然な、若者らしい仕種で。

彼のことを〝斎伽忍〟とは、夏江は呼ばない。夏江だけでなく、斎伽に属する家に生まれ育った者すべてが。彼は生まれながらにして一族の長であり、神の化身であり、それゆえに――。

「伽羅王」

思わず、夏江は呼びかけている。

「ばかなこと考えちゃ駄目よ」

その言葉に興味をひかれた様子で、彼が見返った。

「伽羅王相手にそんなことを言えるのは、あなたくらいですよ」

「……光栄に思うわ」

だからこそ夏江は異端者となるのだ。決して一族全体の思惑にはなじまない。

一族の内に、斎伽忍の近くに、もっと多くの理解者があればと夏江は願う。孤立しすぎている……この空者総帥は。

「ところで……」

そこでふと、斎伽忍の声音が変化した。

語るものから、命じるものへ。

「御子息に、伝えていただきたいことがある」

「私からでよろしければ」

「無論」

忍は頷いた。

「あなたを頼む以外に、道はないのでね」

そのためだけに彼は今日、ここを訪れたのだろうか。

自ら、ひとりで。

「では、こう伝えてください。早急に鎌倉へ行き、冴子に会うように」

「――――」

夏江が目を瞠った。斎伽忍は、何も説明しようとはしなかった。

「理由なら、十九郎自身が最もよく知っている。それで充分だ」
「……伽羅王」
「そして、くれぐれも急げと。二度の忠告はしない。鎌倉へは、こちらから通達を出しておいた。――以上だ」
そして彼は身をひるがえす。
風に操られる彼の黒髪。色彩を拒む影。
天地の理に添わぬ、異形の者。
人として生まれながら人で在りえぬ、妖美なる宿体。
九百年の時を経て。

現世にただひとり転生を果たした、若き超越者。闇を支配し、因業を裁く者。天眼と神力をそなえ有する者。

しかし――。
彼が真実、何者であるのか誰も知らない。今はまだ、誰も。

第三章　看視者

I

暗い駐車場の片隅に、その少年はぽつんと立っていた。

とても普通の少年、だった。真面目そうで、おとなしそうで、頭が良さそうで、小柄で、芸能人を追いかけてテレビ局まで来るようなタイプには見えなかった。

そもそも追っかけの子たちなら、もっと確実な穴場をつかんでいるものだし。彼らは往々にして徒党を組んでいるものだし。

（出演者……？）

工藤珈織は荷物を肩にかけなおしながら、ＣＢＳの通用口へつづくスロープを上った。駐車場に突っ立っている健全な高校生に、それ以上の具体的な関心を抱くこともなかった。

月曜日の午前十時にコーコーセーが暇そうにして立っているのも本当は妙なのだが、時間感覚のおかしい業界にいるせいか、そのことには気づかなかった。そんなことまでかまっていられなかったというのが正しい。

とにかく殺人のショックはさっさと忘れたほうがいい。事件はあくまで事件として、冷静に扱うべきだろう。報道にたずさわる者としては。

（梶先生がつかまってくれるといいんだけど……）

おそらくモデルとしての斎伽忍をもっともよく知っていると思われるのが、彼の写真の七割方を担当してきた中堅カメラマン、梶伸之である。

斎伽忍が『メンズ・ジャパン』の専属契約を切ってしまったのが、今月の初頭だ。その後、梶伸之のほうは長期オフに入ったということしかわかっていない。もう人物写真をとる気がないらしいですよ、とは鷹木文彦の弁だが……。

「あ……」

後方から、小さな呟きが聞こえた。次いで、はっきりとした警告の叫び。

「危ない……!!」

「え!?」

声につられて珈織はふりかえり、そこでそのまま凍りついた。

まっすぐこちらに向けてスロープを上ってくるのは赤いシビック。駐車場に停まっていたはずの。なぜそんなものが勢いよく突っ走ってくるのだ——運転手もいないのに!?

（冗談!!）

避けようにもこの狭いスロープの上では。てすりをとびこえて二メートル下にジャンプすれ

ばいいんだろうなとは思うが。

思ったからといって即座に身体が動くほど立派な運動神経はもちあわせていない。自分がスロープに立ち往生している姿を、いやにはっきりと珈織は認識した。無人暴走車にはねられて自分が死んだら、やっぱり誰かがそのニュースを四十五秒くらいの枠におさめて読んでくれたりするんだろうか？

「！」

ふわっ、と黒い影が足元へとびこんできたのは、その時だった。

猫？

黒猫だったか小型犬だったか、はっきりしない。ともかく動物に見えたのだ、珈織の目には。

動物だったのだ、が——。

まばたきひとつする間に、それは変化していた。

人間に。

その人影は珈織の前に出現するとすかさず、シビックを片腕一本で受けとめた。まるで突進する牛の鼻先を掌ひとつで押さえこむように。

がしゃん、と前部のバンパーを地面にぶつけて、赤いシビックは静止した。

ボンネットが思いきり潰れ、そのあおりをくらってバンパーが地面にのめりこんだのであ

る。結果として、何にせよ車は止まっていた。スロープの中央で、無残な姿となって。

「……」

珈織はまず状況を呑みこむのに数秒を費やし、それからまたあらためて唖然とした。何だ、この事態は？

「あの……大丈夫ですか!?」

耳元で呼びかける声があった。

ついさっき、危ないと叫んでくれた声の主だ。

駐車場のはずれに立っていたマジメな高校生。

背が低い。目の高さが、珈織とほとんど変わらない。不思議ときれいな目、だった。間近にそれを見つめかえして、パニックした頭がスッとさめるのを珈織は感じた。この少年は人を安心させる何かをもっている……。

（純粋培養みたいな……）

なんてかわいい子なの息子に欲しいわ、などと妄想していたせいで反応が遅れた。

「あ、ありがとう、大丈夫です……けど……」

ちょっと待て。

善良な高校生のほうはいい。問題はもうひとりの——素手で自動車を破壊してみせた青年のほうである。

どこから、どうやって現れたのかもわからなかった。直前に足元をすりぬけたのは絶対に人影ではない。いくらなんでもそんなにダイナミックな見間違えはできない。

「……早まりましたか？」

ぽつりと正体不明怪力青年が、ハスキーなバリトンヴォイスで呟いた。

「でも、人助けは、基本的に、いいことだと思う……よ」

今ひとつ確信はない様子で、傍らの好感度上級高校生が、そう答えた。

（何なのよ、それって）

助けなければよかったということだろうか。

「あの……ええと、あなたがた……」

どうやら知り合い同士らしい二人に、なんとか少しでも状況を説き明かしてもらわねばと、珈織は言葉に困りつつもそろそろと切り出した。——が。

「うわっ、何だこりゃ、何したんですか、いったい」

ばたばたとかけつけてきたのは、制服姿のガードマンのおっさんである。やばい、と珈織は考えた。今の光景を見ていなかった人間相手に、いきなり車が走ってきたから素手でうけとめたら車がぺしゃんこになったんです、と言って納得してもらえる自信がない。

「やだなおじさん見てなかったの？　あのねえ、それ、暴走車なんだよ」

不意に、新たな声が珈織の背後から割りこんだ。

珈織の知っている声と喋り方だ。

「何したもどうもないよ、死ぬとこだよ、こっちは。ブレーキかギアに異常があるんじゃないの、その車？　ちょっと業者とか呼んで調べてもらってよ。ほら、オートマってたまに急発進して事故ったりするじゃん、それじゃないかって思うけど、もしかすると持ち主の怠慢だからそっちのほうも確認しといてよ、しっかり。悪いけど俺たち急ぐから結果わかったら『ニュースサーチ』スタッフルームまで知らせて。それじゃよろしく！」

有無を言わせない調子で一気に指示すると、鷹木文彦はあたりまえのように珈織の背に手をまわし、さらに強引に隣の高校生の片腕をひっつかみ、いたいけな高校生が「ええっ!?」と慌てて何か言いかけるのもかまわず、一目散に局内へとまとめてひきずりこんだ。

II

狭い廊下を早足で通りぬけ、機材運搬用エレベーターの前まで来たところで、ようやく文彦が立ち止まった。通用口からずいぶん遠ざかり、人の気配がない場所だ。

珈織は息切れを抑えながら彼のことを振りかえり、口をひらこうとした。……が、できなかった。

意外なほど厳しい顔で、文彦が例の高校生を見据えていたからである。

「君、名前は」

「……」

無理やり道連れにされた高校生のほうは、じっと文彦を見上げてから、静かな声で答えた。

「……崎谷亮介、です」

「中学生？」

「高校二年です。高陵の」

「その高校生が学校にも行かないで、なんでこんな所にいるわけ？」

「人と会う約束があるんです」

「学校サボってまで？」

「大切な約束だったら、学校より優先したっておかしくないと思います」

生真面目にそんなことを言うあたり、そうそう平気で学校をサボれるような子には見えない。言い訳しているようにも聞こえない。キッ、と文彦はもうひとりの人物へと目を向けた。

謎の怪力青年は無表情に黙りこみ、しっかり崎谷亮介の背後に控えていた。主に仕える従者にも似た態度だった。文彦の視線などまったく意に介さぬ様子で腕を組み、なにも語ろうとし

ないかまえである。少なからず不機嫌になりつつ、しかしそっちに話を振るだけムダだと悟ったのか、文彦はふたたび崎谷亮介に矛先を戻した。

「はっきり訊くけど。何なんだよ、君たち？」

「……どういう意味ですか？」

わずかに眉をひそめて、崎谷亮介が問い返した。

「あのさあ。決まりきってること言わせないでくれる？　どこそこのコーコーセーですなんて説明はどうでもいいんだよ、身元をはっきりさせてくれって言ってんだよ！　潔白を証明しろってことだよ！　何をどうしたら車がペしゃんこになったりするのか、しっかり納得させてくれっていうんだよ！　わかってる!?　もう一歩でこの人ってば死ぬところだったんだよ!?　よくおまえらそれで平気な顔してられるよなあっ!!」

「ちょっと、鷹木君……」

文彦がひどく本気なので、珈織のほうが焦った。こんな文彦は初めてだ。

「だってね、珈織さん、さっき俺ガードマンのおやっさんにオートマの急発進がどーのこーのなんて言ったけど、あんなの全部デタラメですよ、駐車してた車がいきなり坂道かけあがるわけないじゃないですか！　下り坂ならともかく！　ありゃ事故じゃありませんよ、狙って細工した奴がいなきゃおかしいんですよ!!　そんなこと大声で言っちゃったら珈織さんの仕事にさしつかえるからあの場じゃ言わなかったけど!!　まちがいなくっ、誰かが珈織さんの命を狙っ

たんですよっ!!」

「……」

漠然とわかっていたことでも、正面きって断言されるとショックがくるものだ。珈織は言葉を失ってしまった。

なら、やはり自分は、新たな標的なのだろうか。

彼——斎伽忍の。

「現に小池なんか死んじゃいましたし。俺もともとミステリーなんかと縁のないたちですけど、今度ばかりは放っとけませんよ！　絶対これって珈織さんに調べられちゃ困る立場の奴が裏にいるんだ、そいつが誰かなんて今さら言うまでもないでしょ!?」

「……でも……」

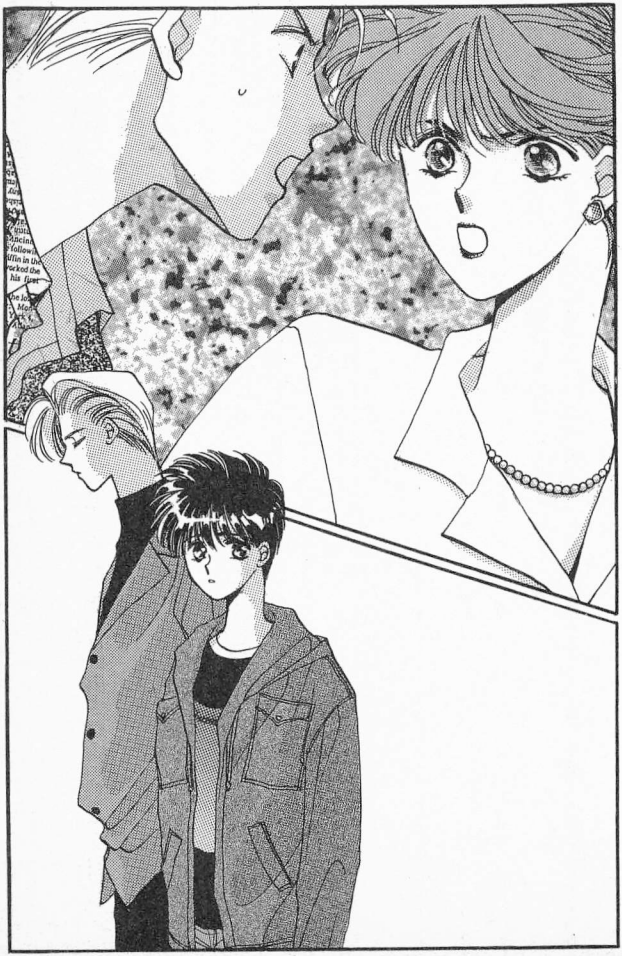
証拠があるわけではない。そう言いかけた珈織を、文彦は強引にさえぎった。

「とにかく俺、珈織さんが危ない目にあうってだけでもたまらないですよ、冗談じゃないですよ!!　もうやめちゃいましょうよ、吸血鬼のネタなんて！　命かけてまで調べる相手じゃないですよ！」

「そんなの無理よ！」

かっとなって珈織は首を横に振っていた。

「あたしの仕事なのよ。本気でやってるのよ。ここで手を引くなんてできないわよ！」



「変なとこで意地はらないでくださいよ！」
「だって！」
「だって何なんですか!?　斎伽忍のことが好きだからだなんて言い出さないでしょうね!?」
「――なに言ってるのよ!?」
一瞬、珈織はあっけにとられてしまった。何を考えているのだろう。
（そういう次元の話じゃないでしょ!?）
発想が違いすぎる。価値観がズレているというか。取材対象に余計な恋愛感情なんか抱いていられるはずがないではないか。
本当に、文彦はどうかしている……。
「……え？」
崎谷亮介が、小さく呟いた。
「斎伽忍？」
その時だった。
（!!）
ざわっ、と悪寒が走った。珈織は悲鳴をあげそうになった。
心臓を握りつぶされるような生々しい不快感に、めまいを覚える。まわりが一気に暗くなったのは電灯が消えたせい――ではない!?

「珈織さん？」

間のびした感じで文彦の声が聞こえてきた。文彦はなんとも思わないのだろうか、こんなに空気が濁りと毒に満ちているのに！

はっと目を瞠り、青年が踏み出した。それまでの不動の態度とはうってかわった、すばやい仕種で。

崎谷亮介が不意にバランスを失って、倒れこもうとするところだった。

III

その女性を珈織が目撃したのは、今月に入ってまだ間もない頃のことだった。

一件目の『吸血鬼殺人』が渋谷のはずれで起きてから、二日後。世間に吸血鬼というキーワードも広まっていない頃。

二人目の死者が六本木で見つかったとの報せをうけて、マイク片手に現場へかけつけた——その時。

ひっそりと現場に佇んでいた、たおやかな美女。アンドロイドのように無機的な、肌のあたたかみを感じさせない姿で。

亡霊。

見た瞬間に、そう思えた。

人間ではない……と。

だが確かめることはできなかった。ちらり、と彼女は一度だけ珈織を見た。無表情に。まったく関心はないように。そして静かに踵を返し、ふりかえることもなく去っていった。

同行したスタッフの誰もが、そんな女性を目にしてはいないと口をそろえた。ならば、あれは自分一人の錯覚だったというのか？

（そんなはずはないわ）

綺麗な、とても綺麗な、さびしげに立っていたあのひと。六本木の殺人現場に。

街の喧噪をはずれた、暗い四ツ辻に。

どうしてそんな場所に彼女は……。

『珈織』

後になって思いだした。子供のころ、祖母に何度も聞かされた言葉を。

『人に会ったら、よぉく影を見ることや』

影。

……そうだ、暗い道端ではっきり見えたわけではないけれど。

彼女が目にとまった理由は、きっと。

（影がなかったのよ）

周囲にとけこまない違和感。棲む世界が異なる者は、かくしてもかくしても浮いて見えるものだと祖母は言っていた。

『人外の者たちは、影がなくて寂しいものやから、人間様に近寄ってきたがる。それを哀れに思ぉたら、あっちがわに連れてかれるんよ。気ぃつけなあかん、おまえは気の優しい子やからね』

哀れみなんかしない。事件だから、ニュースだから追うのだ。

殺人が連続し、吸血鬼の噂が嵐のように吹きあれたのは、その美女を目撃した直後から……だ。

あの女性、何らかのかたちでこの事件にかかわっている。そんな気がした。手がかりはどこにもなかった。直感だけで取材はできない。悶々としていたところに、鷹木文彦が一冊の雑誌を持ちこんできた。

その内の数ページに——彼がいた。

似すぎていた。あの女性と。

同類、ではないのかと思えた。

ここは違う、別の世界に生きる同類。

彼をさぐれば、彼女の真実にもたどりつけるのではないか。少なくとも彼なら、あの女性が誰であるのか明らかにしてくれるのではないか。

珈織は迷うことなく〝彼〟を追いはじめた。そのときはまだ、斎伽忍を暴こうとすることが何を意味するかも知らずにいたのだ——。

＊　＊　＊

なんだか変な成り行きになってしまった。

鷹木文彦は大股で局内のフロアを歩きぬけた。正面入口の受付カウンターで顔見知りの美人受付嬢に救護室の手配を頼む。

「あらあ、文クンってば間が悪い。ちょうど今って看護婦さんがいない時間帯なのよー」

「えええっ、ついてないなあーっ。ま、ベッドがありゃいいよ。うん、大丈夫」

「重病なら救急車お願いしたほうがいいと思うけどー？　呼んであげようか？」

「いらないいらない。坊やが貧血おこしただけだから」

「ホントに？　大丈夫？」

「だといーな——っと、思ってるよ。はは」

えたいの知れないガキ一名の容態など本当はどうでもいい。知ったことではない。いきなり話の途中でぶっ倒れるとは、たいした追及のそらし方ではないか。珈織が心配して世話をやこうとしているから、やむを得ず協力しているのだ。

「あーあと、なんか冷たいもの運ばせてよ。オレンジジュースでいい。四つね」

「出前オレンジジュース四人分？　それでオッケー？」

「待って、やっぱ俺、生ビールにしようかなあ、ここでメイちゃんと飲んでるほうが楽しそうだなぁ」

「やーねー文クン、どっちにするのかはっきり決めてから言ってくれるー？」

軽口をたたいていたら。

すっ、と傍らを黒い人影が通りすぎていった。ふと目で追いかけて、文彦は愕然とした。

今の人影は。

慣れた素振りで廊下の角をまがり消えうせた——あの背中は。

「ちょ、ちょっと、メイちゃん、あ……あいつ！　今のあいつ！」

「ええ？」

きょとんとして受付嬢は文彦を見る。

「どうしたのよ、文クン」

「あいつ……何!?　何の用で来てる!?」

「何の用って……そこまで知らないわよお。でもあの人なら……先週あたりから、よく見かけるようになったかな？」
「先週っ？」
「うん。もっと前からかもしんない。四、五回は見たおぼえあるしー」
「……」
裏をかかれた。
灯台もと暗しとはこのことだ。
とびつくように文彦はカウンターにのりだした。両手をあわせて頼みこむ。
「メイちゃん、お願い!!　あいつの出入りしてる部署さがしだしておしえてっ!!」

「あ、おはようございます、工藤です！」
救護室の内線電話で珈織は『ニュースサーチ』のスタッフ室を呼びだした。はいっ、おはようございますっ、と元気なバイト君の声がかえってくる。
「すみません、今、局内にいるんですけどちょっとトラブルがありましてミーティングに遅れます！　チーフにお伝えいただけます？」
『了解でーす、どうせ今日はたいしたニュースないってスタッフみんな怠けてますから平気で

すよー。なんてね。でも本当の話、今日はかおるさんのローテーションじゃないでしょ、大丈夫ですよ』

　たのもしいというか態度が大きいというか、気のきくバイト君である。

『さっき警備のほうから連絡ありました、駐車場で事故ったっていう話でしたけど。もしやその件の関係で遅れるのでは？』

「そう、その件です。チーフにうまくつなげて話しておいて」

『わかりました、よーくフォローして伝えときます、まかしてください』

　この大胆不敵な声の主は三島君だろう。雑用係として入ってきたのはつい最近のはずだが、バイト初日、一時間足らずでスタッフおよびキャスター全員の顔と名前を憶えてしまったという有能な大学生だ。チーフのプロデューサーも彼のことをミシマユキオ君と呼んでかわいがっている。何がユキオ君なのやら。

『いきなり筋違いで申し訳ないんですが……』

　ミシマ君がやや声をひそめた。

「はい？」

『鷹木編成局長の息子さん、今、局内にいるかわかります？』

「……いるわよ。どうしたの」

『先ほどから美しいお嬢さんがお待ちになってるんですよ、うちのスタッフルームの前で』

「そこで？」

文彦の数多きガールフレンドのうちの一人、だろう。おそらく。

いやな感じがして珈織は顔をしかめた。なにも『ニュースサーチ』の部屋で待ちかまえることはないではないか。文彦はあくまで部外者だし、自分の付属物でもない。なぜそこにいれば文彦がつかまるなんて考えるのか。

（よっぽどいつも一緒にいると思われてるんだわ）

そんな誤解でガールフレンドに敵視されたりしたら割に合わない。

「救護室に来るように言ってあげて」

ああでもこんなこと教えてあげたらますます余計な誤解をまねくじゃないのっ、と思いつつ、他にどうする術もたない自分はけっこうマヌケかもしれない。

『たすかりましたー、ありがとうございまーす』

三島君が心底ホッとした様子でそう言った。

『じゃ、チーフには伝えときますから』

「よろしく」

『はいっ、まかされましたっ。ではではっ』

つくづく元気のいいバイト君である。ほとんど高校生のノリではなかろうか。

「あれ？」

電話を切ると同時に、そんな呟きが聞こえた。
「牙？」
一つしかない簡易ベッドに身を起こして、亮介がぐるりと室内を見まわしているところだった。
そういえば怪力青年の姿がいつの間にか消えている。
気を失った亮介をここまで軽々と運んできて、その後三十秒くらいは、たしかに珈織の視界に彼の長身がおさまっていたのだが。
「牙っていうの？　彼」
人間らしからぬ名前ではあるが、悪くはない名前だ。少なくともあの青年になら似合う名前だ。
「殺し屋さんみたいな名前ね」
「こ、殺し屋はちょっと……」
なにげなく言った珈織の台詞に、亮介がひどく情けなさそうな声を出した。

跳ねあがるような走り方で文彦は廊下の端から端までをダッシュした。閉まりかけたエレベーターのドアにすべりこみ、救護室のある3Fフロアへたどりつくなり一番乗りでとびだす。

「ふーってば遅おおいっ」

いきなり甘ったれた声が腕にすりよってきて緊張感を思いきりぶちこわした。文彦の背中が目に見えてがくりと傾いた。

「もお、いくら留守電にメッセージしてもつかまらないからぁ、わざわざ会いに来ちゃったじゃないのーっ」

わざわざ会いに来ちゃってんじゃねーよ、誰も呼んじゃいねーじゃんよと文彦が顔に大文字で書いているのにもまったくおかまいなし、である。露出度の高い服装と、かわいいルックスのわりにグラマラスなボディは、たしかに文彦の趣味ではあったが。

「マキちゃん、ちょっと急いでっから、俺」

「いっつもそうじゃないのよーっ。いつになったらお父様に紹介してくれるのよーっ」

「今日はマジなんだよ、本当に急いでんだよ！」

「じゃあいつもはマジじゃないんだ!?」

「いや、マジだよ、俺はいつもマジ！　マキのことだって真剣に考えてるよ、オヤジに写真みせたら気に入ってたから心配ないよ、そのうちどっかのプロデューサーにコネつけるって！」

「やー、ほんとー、うれしー」

三流雑誌のグラビアモデルがトレンディ女優に転身したいなどと考えたら、あらゆるコネを総動員してもまだ足りないくらいだ。彼女の目当てが父親の一声であることは、初めから文彦

も承知している。

何が目当てでも別に大したことではない。

「だーから……ああ違うんだよ、今は急いで……！」

仕方なくマキの腕をがしっとつかんで、文彦は再び走りだす。えっなぁに、何なのお？　とマキが舌足らずな口調で問いかけた。

――が。

勢いよく救護室の扉をひらいた文彦の眼前にあらわれたのは、がらんと空になった部屋の光景だった。誰の姿もそこにはなかった。

「……ったく！」

文彦は舌打ちした。なんでこうなるんだ!?

＊　＊　＊

「……そうか、やはり彼女だな」

予測通りの結果を、彼は口にする。

腕を組みあわせ、CBS最上階フロアの白い壁を背にして。

会議室と展望室だけで構成されているこのフロアに、出入りする者はない。それを可能とす

る人物は、彼ひとりだ。
斎伽忍――である。
『妖気は常に不安定で、あの女性を指向しているものとは断じがたく思えます。ですが一度だけ、圧倒的な妖力の渦があの女性を中心として発生したことは確かです』
伝えてくるのは、牙。彼の忠実なる〈使〉である。
「妖気の集中は、外からも感じられたよ」
大型強化ガラスの窓にはブラインドがおろされ、陽光を阻んでいる。
冷ややかな美貌を際立たせるかのように。
「亮介の感覚には刺激が強すぎただろう……」
普通の人間でも、少し勘のいい者なら、不浄の気に反応して目眩のひとつくらい起こしている。並はずれて感覚の鋭い亮介にとっては、防ぎようのないショックだったはずだ。
『……それが契機となるのではありませんか？』
牙がそんな問いを送ってきた。
「面白いことを言うんだな」
忍は微笑する。
「因果など私は知らないさ」

＊　＊　＊

「崎谷君、さっきの場所には……」

生徒手帳なんか落ちてなかったわよ、と続けようとした言葉を、珈織はとぎらせた。

もぬけの空、だった。ベッドも、救護室も。

（……やられた……っ！）

初歩的といえば初歩的な逃げ方ではないか。素直そうな外見にまどわされたようだ。訊きたいことも話したいことも、山ほどあったのに。

何よりもまず、彼と『斎伽忍』との関係を。

亮介が倒れる直前に反応したのが斎伽忍の名であったことを、珈織は聞き逃していなかった。斎伽忍と関係があるからこそ、あの二人は自分とかかわりあいたくなかったのだ。暴走車から自分を助けてしまった後で、なんだか困ったような態度を見せていたのも、それによって身元が問われることを危惧したから……？

（え？）

するとあの車を暴走させたのは誰になるのだろう？

今ひとつ理屈がつながらない。

何かもっと複雑な事情が、想像もつかない連関が……。

「珈織さあん、ようやく見つかったあっ」

ばたばたと廊下を走ってきたのは、やけに慌てた様子の文彦だった。

「いきなり消えないでくださいよー、心臓に悪いっ」

「ごめんなさい、ちょっと離れた隙に逃げられちゃったわ」

「それよりっ！　だからっ！」

珈織の言葉を文彦はまったく聞いていない。自分の言いたいことで頭が一杯になっているのだ。

「聞いて驚けですよ。裏をかかれましたよ。斎伽忍……局内のどこかにいます、今！」

「――どういうこと？」

よくわからない。話をつかめない珈織に、文彦は息をきらせながら訴えた。

「俺、あいつを見たんです、一階のフロアで！　どこなのかはわからないけどあいつはこの建物のどこかにもぐりこんでるんです！　それも今日だけじゃない、知らないうちに何日も前から……！　もしかしたら、あいつ……こっちのやってることなんか全部、お見通しなのかもしれないんですよ……！」

IV

「！」

はっ、と胸をつかれて亮介は立ち止まった。

〝中央テレビ〟ＣＥＮＴＲＡＬ　ＢＲＯＡＤＣＡＳＴＩＮＧ　ＳＴＡＴＩＯＮ、と形どられた色あざやかな電光パネルの、ちょうど手前で。

どうして立ち止まってしまったのだろう。

何が気になったのか、わからなかった。……その時は。

（あの人のことかな）

工藤珈織に嘘をついて救護室をぬけだしてきたのは、たしかに良心の痛む原因である。けれど少し……この感じは、それとはまた少し違う。もっと別の、胸に直接ひびいてくる感覚。

「……」

思いつかない。考えてもわからない。

本当はいつまでもこの建物のなかでうろうろしていてはいけない。工藤珈織に見つかったら、逃げた理由を釈明しなければならなくなる。

彼女が報道関係者だったりするから、話は面倒なことになっているのだ。軽々しく〈妖の者〉がどうの〈術力〉がどうのなんて口に出したら、変な方向に受けとめられかねないし……。

（でも、いい人だったな……）

おまえにかかると世界中『いい人』だらけになっちゃうんだから、と誰かが言いそうだ。そんなんじゃないんだよ、と亮介は胸の内で反論する。自分は、そんな風に考えられるほど優しくもなんともなくて。

広い応接用のロビーを横切り、亮介は出口へむけて歩を進めた。牙とはぐれてしまったのは、けっこう辛い。斎伽忍と合流できるかどうか怪しくなってきた。

「あ、ミシマくーん、さっきはありがとー、助かっちゃったあーっ」

ロビーの奥で、グラマラスな女性が手を振った。服装や物腰が芸能人っぽい。

「どーもどーもーっ。お役に立ててミシマ君うれしいですーっ。マキさんも頑張ってくださーいっ」

エレベーターのほうから、妙に明るい声が返った。

明るい——下手をすると能天気と呼べそうな、声。

（……え!?）

反射的に亮介はふりかえっていた。今の声は。今、すぐ近くで聞こえた、前向きすぎる声は——それは。

何も考えなかった。床を蹴り、ロビーの奥へ迷わず駆け戻り、角をまがって、エレベーターのドアが見えたところで亮介は壁に片手をつき——

「諒!?」

がたん、とドアが目の前で閉じた。

息を止め、亮介は閉ざされた扉と、上昇してゆくエレベーターのランプを見つめた。乗っているのが誰なのか、垣間見る暇もなかった。

空耳？　そんなはずない。単なる人違いか？　それはとてもあり得る話で。

ランプは各階で停まり、さらに上昇を示した。駄目だ……これでは、誰がどの階で降りたかなんてわからない。

この巨大なテレビ局のなかで、もう一度ニアミスする偶然なんて。

（一回しかないから偶然っていうんじゃないか……！）

虫の良すぎる期待だ。いくらなんでも。

しばらくそこに立ち尽くし、やがて亮介はゆっくりと一歩、エレベーターの前から遠ざかった。ランプの表示はのろのろと下の階へ移りはじめた。

ミシマ君、という呼び名が耳に残っている。
別人と考えるほうが当然だ。
あたりまえすぎて……情けない。
そんな勘違いに期待するしかないような、今の自分が。
偶然なんかに頼っている自分が。
本当に会いたいなら、会おうとしなければ何も始まらないのに……！
「……亮介!?」
背後から呼ばれたのは、まさに不意討ちのタイミングだった。心臓を止めるには申し分なしといわんばかりの。
唖然として振り向いた亮介の前に、よろよろと現れたかと思ったら、ぐしゃりとしゃがみこんだ人影。
「……びっ」
息が乱れてろくに声も出ないのは、階段全力疾走の成果である。
「びっ……びっくり……」
ぜーはー、と改めて呼吸を整えて、それから。
「びっくりしたあああっ」
床に頭からのめりこみ、水沢涼が死にそうな一声を発した。

第四章　君のせいじゃない

I

呼吸不全状態で床に貼りついた後に彼が起こした行動は、がばっと立ちあがり亮介の腕をつかんでエレベーター脇の男子トイレへとびこむという怪しくも胡乱なものであった。

いくら大企業の貫禄あふれる清潔にして豪華な化粧室とはいえ、トイレはトイレだ。

「なっ……」

何を考えてるんだ、と尋ねたいところだが、諒には諒なりの思惑があるに違いない。言いかけた言葉を呑みこんだまま、亮介はひきずられるのにまかせて洗面所の奥にたどりついた。

鏡張りの壁面に背を預けて向きなおり、そこで諒はまたもやへなへなとしゃがみこんでしまった。その間、一言もなしである。行動のつながりが読めない。

「……諒？」

「……いやあ……びっくりした」

しゃがみこんだ位置から亮介の両眼を見上げて、諒は真顔でそんなことを言う。

「いっきなり亮介君の声がするんだもん、水沢君あわてふためいて『開く』のボタン押したのに間に合わなかったもんだから死にもの狂いで階段とびおりて来ちゃいましたよ」

「……」

びっくりしているのはこちらも同じなのだ。

なんでこんな、六本木のテレビ局なんかにもぐりこんで……。

「……ミシマ君って誰なんだよ」

予定外の台詞が出てくる。本当はその前に言いたいことがあったのに。

「三島成之と申します。何故かと問うならば、なりゆきで決めた名前だから。なんつって」

「東京にいるならいるって……！」

教えてくれたら。

（馬鹿！）

亮介は唇を噛んで自分を叱りつけた。

斎伽忍の『命令』にさからってここにいることを、諒が簡単に明かせるはずがない。術者の内でただひとり忍の傍らにいることを許された——ただひとり忍と約束を共有した、忍側の自分に。

「うん、本当はすぐにでも……と思ったけどね」

諒はかすかに笑う。十数日ぶりに再会して初めて見る、彼の笑顔だった。

「つまり、亮介が俺には言えない何かのせいで、それを俺に言っちゃいけないってことで負担感じてるんだったら……そしたら俺は、亮介の前に現れるとゆーだけで亮介を困らせてしまうのだよ。しかも実際に俺がいちばん知りたいのは、亮介が隠してるまさにその秘密だったりするからたちが悪い」

「……」

そうなのだ。

望むと望まざるとにかかわらず、亮介は諒の目的を阻む立場に身を置いてしまっている。

「結局、見事に巻きこんじゃったな」

「え？」

「ほら、俺と忍の間に深くて暗ーいナントカがあるのは昔っからの当然でしょ。だから水沢君は別にたいしたことないんですよ、この程度の『忍様の意地悪』ならね。慣れてますから。――ただ、その間に亮介君を板挟みにするのは非常に不本意だなあと……」

（別にたいしたことない？）

それは嘘だろう。当然だと、本当にあたりまえのように諒は言うけれど。

そんなのは違う。ひとりだけつらくないなんて、そんなのは違う。

「だから、ごめん」

短く、諒が言った。

「――馬鹿っ!!」

直後に亮介が怒鳴りつけた。ぎょっとして諒が目をあげる。すとんと自分も諒の正面にしゃがみこみ、もう一度亮介が声をはりあげた。

「力一杯、大馬鹿っ!!」

「……輪をかけて土星バカとか言わんだろうな」

「真剣に言ってるんだから真剣に聞けよっ!!」

「真剣に聞かせていただきます」

勢いに押されて諒が頷いた。

威嚇するがごとく、じっと諒を見据えてから、ふと声を抑え、亮介が言った。

「……だって俺は、こうやっておまえに会えて嬉しいと思ったんだ」

「……」

「なにもかも目茶苦茶になって、どうすればいいのかわからなくなって、おまえに何も言えないまま逃げ出して二度と絶対に顔向けなんかできないって思ったくせに……だけど俺は今、おまえに会って安心なんかしてるんだ」

呼び止める声をふりきって逃げたのは、あの夜のこと。

けれど時間は流れるから。

「うまく言えないけど……でもそれは大事なことなんだ」

「……うん」

少し間をおき、やがて諒が深く頷いた。

「まさにそのとおり。……俺も今、思いきり目先の幸せに流されたもん」

目先の幸せと諒ちゃんの関係性についての考察は専門家の神原さんに聞いてくだされ、とついでに諒はつけくわえる。何それ？　と亮介が目をまるくした。

「……だから、余計なことを考えるのはやめて、みんなが幸せになれるように頑張るしかないんだ」

改めて、亮介がそう続けた。

「多分、俺と諒のやろうとしてることは全然別のことなんだ。どうしても今は諒に話せないこともあるんだ。だけど、きっと最後に目指してるのは同じものだと思うから……」

「お互いに頑張る？」

「うん……。それって矛盾してるかな？」

「矛盾させなきゃいいんでしょ？」

諒の、強引な論理展開が戻ってきた。強気な発言が。

「俺だって一日も早く、亮介君とトイレ以外の場所で堂々と語りあいたいですよ。切実に。今の悪あがきは要するにそのための努力なわけで」

「トイレっていったい……」

そういえば、と亮介は口をはさんだ。やはり何か深い意味がこの場所にはあるのか。

「だっておまえさん、忍に見つからない場所っつったら女子更衣室かトイレくらいしか存在しないでしょうがっ」

「何なんだよ、それはっ！」

「……女子更衣室のほうがよかったとか？」

「ちがうっ!!　そういう意味じゃなくてっ!!」

「あいつのねじくれまがった常識と美意識の接点を追求していくと、そーゆー結論に達するんだってば」

妙に確信をこめて諒はそんなことを言い張る。その確信は果たして、斎伽忍への理解に裏打ちされているのか。――あるいは誤解に、か。

半年ばかり忍と同居（！）していたという過去を考えれば、誰よりも斎伽忍の実像をとらえていて不思議はないのだが。それにしては。

「とにかく……今はまだ、俺も忍の目にふれたくないから」

諒が呟いた。

「……うん……」

しかし斎伽忍の目を避けつつ六本木に――それもCBS局内に――潜伏するのは、ひどく危険な賭けのはずだった。いくら偽名を使い、身元をいつわっても。


ROBIN DES BO
48 04 09 36

相手は〈空の者〉、神の化身だ。
孤独な、初めから不利な戦いを、諒は強いられている。
どうやって、どんな方法で、何を支えにして、と尋ねたい気持ちは山程ある。が……。
「早く……全部よくなると、いいな」
あえてそれだけを、亮介は口にした。
「そだね」
諒が微笑する。亮介も笑みを返していた。
すべての人が悲しむことなく幸せになるといい。
こんなちっぽけな出会いでも、先へ進もうとする確かな力を与えてくれる。それを忘れたくない。
諦めてしまいたくない。
「すっかりクサい仲になってしまいましたな、我々」
肩をすくめながら諒が立ちあがった。
「場所が悪いんだよ」
「す・み・ま・せんねえーっ、いたいけな亮介くんをいかがわしい所に引っぱりこんで」
「また会いたいけど……しばらくは無理だと思う」
立ちあがると互いの目の高さが変わる。大人びた表情で、亮介が諒を仰ぎ見た。

「牙がいるから。いつも、俺の近くには」
「……」
沈黙の後、諒がこくりと首を前に倒した。
「致し方ありませんな、そいつは」
「本当は今も少し心配なんだ。はぐれてから時間たつから、きっと俺のこと捜してる」
「そっか……」
「だから、先に行くよ」
「わかった」
「……」
何か言いかけて、結局亮介は口をつぐんだ。一歩さがり、それから体の向きを変えて、ゆっくりと出口へと踏み出す……。
「亮介」
不意に諒が呼びかけた。亮介がふりかえった。
そらせない、まっすぐな瞳をして——諒が告げた。
「忍を見ててやってくれ……頼むから」
斎伽忍を。
「……諒」

亮介が呟く。それ以外、何も言えずに。

「信じてるから」

諒はそうつけたした。

おまえは誰も信じてない、と亮介は彼を責めたことがある。それは遠くない過去のことだ。

「……うん」

しっかりと亮介は頷き、そして足早にその場を後にした。

(諒はわかってるんだ)

彼にはわかっている。彼はきっと知っている。斎伽忍の抱く本当の痛みを。亮介はそう信じた。目指すあてもなく、空のまま口をあけているエレベーターに乗りこみ、灰色の扉が目の前の景色を閉ざしたとき——泣きだしたいような寂しさが胸を占めて亮介は天を仰いだ。

II

待ち合わせは、銀座に六時。

「遅い」

なぜか時間には妙に律義な和泉希沙良が、テーブルの向こう側から殺気に満ちた視線を投げてくる。たった十五分の何が遅いんだ、と首をかしげつつ水沢諒は椅子の背を手前へ引き寄せる。

「きーさんの彼女って、デートには苦労しそうだなあ」

「別に遅れてきても奢らせないぜ、女だったら」

「それなのにワタシには奢らせよーと言うのねっ!?　千五百円のケーキセットをっ!!」

「当っ然だろッ!?　あ、アメリカン追加な」

「……血も涙もないっ」

前回思いっきりコーヒー三杯分を払わされた教訓は何処へ行ってしまったの、と諒はテーブルにすがりついて泣いている。だったらこんな高い店を待ち合わせに使わなければいいのだ、と希沙良は冷酷に考える。

銀座の中心地なら、あまりに自分たちとズレすぎているから斎伽忍の目にとまることもあるまい、というのがこの場所を選んだ理由らしい。わかるようなわからないような……。

「おまえ、そんっなに斎伽忍に見つかるのが怖いわけ?」

頬杖をつきながら、希沙良はそう尋ねてみる。

泣き真似をやめて希沙良を見返し、ちょうどそこへやってきたウェイトレスにコーヒーを頼

み、それから諒があっさり答えた。
「怖いよ」
「何だよ、それ？　バレたら殺されるとかいうのかよ」
「いや、あいつはそんな短絡的なことはしませんよ。俺を殺しちゃったりしたら勿体ないでしょ」
「……勿体ない？」
希沙良が眉をひそめる。
「もうちょっとマシな言い方はねえのか」
「最も妥当な表現だと思うけどなあ」
「……おまえらの関係ってつくづく非人間的だよな……」
「きーさんってつくづく人道的な人だったのね」
またまぜかえして話をごまかす気だ、こいつは。希沙良は無言で相手を睨みつけ、わざと話の進行を止めてやった。この手を使えば、たいてい水沢諒という奴は向こうから折れてくる。
「……すみませんねえ、どうせ私が悪いんですよ」
思ったとおり、多少のこだわりを残しつつも諒のほうが沈黙を破って口をひらいた。いい傾向である。
「とにかく勘定はそっち持ちだからな」

「か弱い勤労学生になんとゆー仕打ちを……とほほほほほ」
再び泣き崩れる諒のことは無視して、希沙良は今日の本題を切り出した。
「昨日、あいつの家に斎伽忍が来たぜ」
「――――」
明らかな驚愕、が返ってきた。言葉はなかったが。
「夏江さんに会って、あいつに伝言残していった。……知りたいか？」
「当然」
短く、諒が断言する。忍が夏江に伝えた言葉を、希沙良はくりかえした。
「早急に鎌倉へ行き、冴子に会うように。くれぐれも急げ――それだけで、理由はわからない」
「……鎌倉に行って……？　冴子に？」
諒の表情が変化し、深く考えこむものになる。
「くれぐれも急げ……か……」
「棚ボタみたいな感じだけど、とにかく姫の居所はわかっただろ」
「……」
希沙良の言葉に、諒はしばらく反応せずに黙っていた。ひとつの目的は達成されたはずなのに、そのことに対するコメントもリアクションも何もない。

「……何だよ？」

居心地が悪い。希沙良が促すと、ひどく複雑な面もちで諒が一言だけ答えた。

「なんで里見さんなのか……が、気になる」

「……え？」

「それって夏江さんからの情報だよね……。で、里見さんがどうするかまでは、わからないか……」

「行かねえよ、あいつは」

希沙良は迷わずに言いきる。考えなくてもわかりきったことだ。

この期に及んで十九郎に命令を発する斎伽忍の神経が、希沙良には信じがたい。自分が十九郎に何をしたのか、まるでわかっていないのではないか。

あんな目にあっておいて、今さら忍の言葉どおりに動けるはずがない。いくら十九郎が寛容であろうとも。

「行かない……だろうな」

諒も頷いた。

動きたくないと、はっきり十九郎は言っていた。あれは決意だ。よほどのことがなければ動かせない。

よほどのことが……。

（それは忍だって同じなんだ）

忍が自ら里見家まで出向くとなると。

気まぐれの一語では片づけられない。十九郎との間に存在する亀裂をこれ以上広げる必然性は、忍にはないはずだ……すでに修復不可能なところまで対立が進んでいると思えば。

ならば何故、まだろくにほとぼりもさめていないこの時期に、あえて波紋をひきおこすような真似をする必要がある？

「まあ、でも……」

運ばれてきたコーヒーカップをとり、諒が続けた。

「本当のこと言っちゃうと……これはチャンスなんだ。つまり里見さんなら、忍のお墨つきで、堂々と冴子の前まで行けるわけだからさ」

「何だよ、それ？」

希沙良が少しいやな顔になる。

「だから、とにかくどんな方法だろうと、冴子と接触をとりたいんだ。今後のためには。あいつはあいつで今、本家の内側のほうから揺さぶりをかける材料を探してる。あのやかまし娘がおとなしく謹慎してるわけがないざんしょ？」

「だったら自分で行けよ、おまえが」

不機嫌に希沙良がそう言い放った。

「初めっからそのつもりで考えてたんじゃないのかよ？」
「……時間がかかりすぎる」
「いきなり弱音かよ」
「現実だ」
諒が訂正した。希沙良を見据えながら。
「無理だって言ってんじゃない。ただし長期戦になるって言ってるんだ。本気で俺が鎌倉の本邸に潜入しようとしたら」
「……」
またもや『本家を侮ってはいけない』式の理屈だ。辟易してくる。
こっち側の目的のために十九郎の立場を利用しようとする考えが、希沙良は気に入らない。水沢諒の思惑のためだけに、斎伽忍に頭を下げて本家まで出向かねばならない義理は、十九郎にはないはずだ。
「わからねえな……。なんでそんなにガードが固いんだか……」
「もともと斎伽さんちは非常ーっに閉鎖的ですけどね」
ぼそりと諒が答えた。
「そのなかでもほら、冴子さんは『嫁入り前の大事な御方』なんざんしょ？」
「……」

「……」

長い長い沈黙が、互いの間をどろどろと流れていった。

はた、と腑に落ちた。希沙良が顔を上げた。

「じゃあ何か!?　斎伽忍って本気で自分の妹と結婚するつもりだったのかよ!?」

「……きーさんって、ばか?」

がくりと肩を前に落としながら、諒が唸った。いーまーさーらー、と思わず節をつけて歌ってしまう。

「俺はまともな精神と常識をもってるだけだっ!!」

「常識もってたら人を傷つけてもいいと思ってんのか、てめえはっ!?」

ムキになって声をはりあげた希沙良に、テーブルを叩いて諒が怒鳴りかえした。

（……こっちも本気かよ）

さすがに、それ以上つっこんで言い合おうという気は失せた。その話題を持ちだされると俺は傷つくのだ、などとはっきり明言された日には。

「んなつもりじゃねえよ……」

他人の恋愛沙汰に茶々を入れる趣味は、希沙良にはない。

「すみませんねえ、ヒステリー野郎で」

「謝ったって改善されねえんだよな、おまえの場合」

「謝らない人よりはましだよね」
「ひらきなおってんじゃねえよ、そこでっ！」
お客様お静かに願います、と貫禄たっぷりのウェイターが無表情な一声を上から降らせてきた。やむを得ず希沙良はそっぽを向き、諒は脈絡もなくお冷のおかわりを頼んで場をごまかしている。厄介な客であることは間違いあるまい。
「俺はてっきり、あれは斎伽忍の方便だと思ってたぜ」
落ちついたところで、希沙良がそう呟いた。
「その場の方便にしちゃ根が深くてね……」
ひとりごとのように、諒が答える。
斎伽忍ひとりの意志では左右しきれない力が——血縁と因習が、そこに関与している以上。
「それに例の〈炎将〉のお兄さんに、わざわざ大嘘ついても仕方ないだろう……」
——この娘は、我が妻となるべき者。手を出したことが、貴様の命運を定めたというわけだ。
忍が剣司にそう告げたのは、あの戦いの本当の意味を明らかにするためだった。剣司から仕掛けたと思われた戦いが、実は〈伽羅王〉斎伽忍の意図したものであったと——。それこそが斎伽忍の報復であったと——。
あの夜のことを思うと、諒も希沙良も言葉少なにならざるを得ない。

もう少し、せめてもう少しだけでも自分に力があり、そしてもっとうまく立ちまわっていられたら。そんな願いが行き場を失っているからだ。

「……炎将の、剋司くんか……」

なにげなく呟いてから、諒はふと両の目を見開いた。

「あれ!?」

「え?」

何事かと希沙良が見る。眉をひそめ、前髪に掌を押しあてて、諒はしばらく凍りついていた。

「ちょっと待てよ……」

「何だよ?」

よくない話題だ。勘でそうわかってしまう。希沙良は正体の知れない悪寒を感じた。何だ、これは?

何だ、この動悸は?

「……あのさ、俺、あの時ズタボロだったから今いち確信もてないんだけど」

低く、諒が切り出した。

「最後の最後に、剋司の前で俺たち全員が追いつめられて、里見さんが……」

「崎谷に?」

「じゃない、その件のひとつ手前。俺たち全員を守るために里見さんが結界を支えてくれただろう」

希沙良は無言でそれを聞く。十九郎が崎谷亮介を盾に使おうとしたことについては、また複雑な思いがあるのだが。

しかし……結界？

「で、剣司がその結界を破っ……たよね」

「……」

結界は破れた。剣司の妖火に対し、身を守るすべは失われた。

その瞬間に、術者である自分たちの敗北は避けがたいものとなったのだ……。

（妖火!?）

ひらめきが希沙良の呼吸を止めた。

はかりしれない毒素を含んだ、最大級の妖気。〈炎将〉剣司のあやつる、〈妖火〉。

それを受けた者は、激しい苦痛に身をさいなまれ、熱に灼かれ、体中の機能を衰えさせていずれは廃人と化す。——身に負った妖気を浄化してしまわないかぎり。

浄化する能力をもっているのは。

七瀬冴子。彼女ひとりきりではなかったか。

「！」

がたっ、と椅子を鳴らして希沙良が立ちあがった。間をおかず、諒も伝票をつかんで席を立つ。

「あいつ……捜さなきゃ……」

乾いた声で希沙良が呟いた。

「協力する」

諒が言い、先導するように出口へと向かった。

III

黒いCBRがゆっくりと住宅街の一角をまわりこんだのは、日付の変わる直前——深夜。

寝静まった街へ響かぬようにと、排気音を極力抑えた走りで。

誰もいない横断歩道の赤信号で、それでも停止するあたりがいかにも彼らしい。時と場合によっては、信号だろうが速度制限だろうがおかまいなしで突っ走る芸当も見せるくせに。

「……変な所で会うよな」

不意に暗がりから投げられた声に、フルフェイスの内側で視線が反応した。無言のまま。
車道からは死角になる植えこみの陰へ。
信号の鉄柱に手をつき、希沙良は車道へ踏み出す。
「なんで三鷹なんだよ？」
「家に電話したなら、知ってるんじゃないのか？」
ヘルメットを脱ぎ、十九郎がそう反問した。
「三鷹からのほうが、学校には通いやすいんだ。試験が近いから、しばらく泊まりこむ。別にめずらしいことじゃない」
片桐邸――十九郎の父方の屋敷が、三鷹にはあるのだ。
彼が自由が丘の自宅を離れ三鷹に身を寄せるのは、確かにめずらしいことではない。
だが、今この時ではその理由が言い訳にしか聞こえないことは、彼本人が最もよく承知しているべきだった。
逃げ方としては最悪だ。
逃げている、とわかってしまうのは。
ＣＢＲの正面に立ち、希沙良はその進路を阻む。そんなことをしなくても彼はきっと走り去りはしないだろう。知りながら信じきれない情けなさを、どうやって伝えたらいい？
どうしたら。

「……送るよ」
十九郎が言った。
希沙良は唇を噛みしめる。
帰れと言われたも同じだ。何を話そうともせずに。
「奢れよ。缶コーヒーでいいから」
「……」
「そしたら帰ってやる」
静かに希沙良を見つめ、やがて十九郎はヘルメットを置き、CBRを降りた。
歩きだす十九郎に二歩分遅れて、希沙良が続いた。わずかな空白があった。
「――十九郎」
ふと、背後から希沙良が呼びかけた。と、同時に。
音もなく希沙良の片腕が風を切った。渾身の力をこめて――十九郎の首筋へ。
「！」
ふりむいた十九郎の目の前で、白く輝く手刀が静止した。一瞬の動きだった。
（遅すぎる）
愕然とする思いで、希沙良は彼を見る。
あまりにも反応が遅すぎる。今の明らかな攻撃の気配に対し、防ぐ〈気〉のかけらも、そこ

にはなかった。意図でなく、反射の問題だ。
「……やっぱり、おまえ……」
何が大丈夫なものか……！
希沙良の左手が強引に十九郎の腕をつかんだ。力任せに引き寄せて。
「おまえ、こんなこと、今までずっと黙って……！」
「影響が出てきたのは最近なんだ。ずっと隠していたわけじゃない」
希沙良は絶句する。そんなことが聞きたいのではないのだ。
そんなことではなくて……。
「じゃあ、何なんだよ、おまえ……そうやって平気な顔してりゃ、お優しい斎伽忍が助けにきてくれるなんて思ってたのかよっ」
「あの人は関係ない」
切って捨てるように十九郎が言った。
ぞっとするほど冷ややかに。
おまえは関係ない——と聞こえる言葉だった。いや、現実に十九郎はそう告げているのだ。
すべての言葉で。態度で。
（おまえは要らない）
希沙良の指が、十九郎の腕から離れた。

（おまえは必要ない）
「……だったら」
沈黙の後に、希沙良が呟く。
「だったら、俺は……」
「希沙良」
「俺は、おまえの……」
だが言いかけた声はとぎれて、消えた。十九郎がそれを見つめた。
「――帰る」
ぽつりと希沙良が言い、背を向けて歩きはじめた。後を追う声はなかった。

第五章　陥穽

I

二日間の試験を終えて美術室のドアを開いた松田瑞穂は、その場でぴたりと凍りついてしまった。

「――えええっ!?　崎谷先輩っ!?」

「あ、お久しぶり……なんて、変か」

手前の机で部長の山岸と話しこんでいたのは、まぎれもなく確かに最愛の崎谷亮介〝先輩〟だった。ふりむいて反射的に『久しぶり』などと口走った後に、今ひとつはまらない挨拶のような気がして困っているあたりが、間違いなく瑞穂の敬愛する崎谷亮介である。

「変じゃないですよ、ちょー久しぶりですよおおっ。うわあ、どうしようあたし、こんなことならトロトロ答えあわせなんかやってないでさっさと来ればよかったっ」

「松田、おまえ、部活動の本質というものをはきちがえてないか?」

「やーだーな、部長ーっ、そんなの初めっからじゃないですかっ」

「あ、そ……」

あっけらかんと瑞穂に言いきられて山岸は机に突っ伏している。まともに美術部員としての活動に励んでいるのは彼一人と言ってもいいようなものなのだから、瑞穂の発言はあながち嘘でもない。えーと、と彼の隣で亮介が居心地悪そうに呟いた。

「でも先輩、さすがに試験はきちんと受けられたんですね？」

瑞穂が話題を亮介のほうに戻す。

「試験は……って、なんだか人聞き悪くない？」

亮介の返答は複雑である。たしかに、ちょっとした不良少年なみに最近――先月の下旬あたりから――学校を休みまくっていたりするけれど。

「一応、授業だってぎりぎり出てたんだから……」

「けど部活は全滅でしたよねっ？」

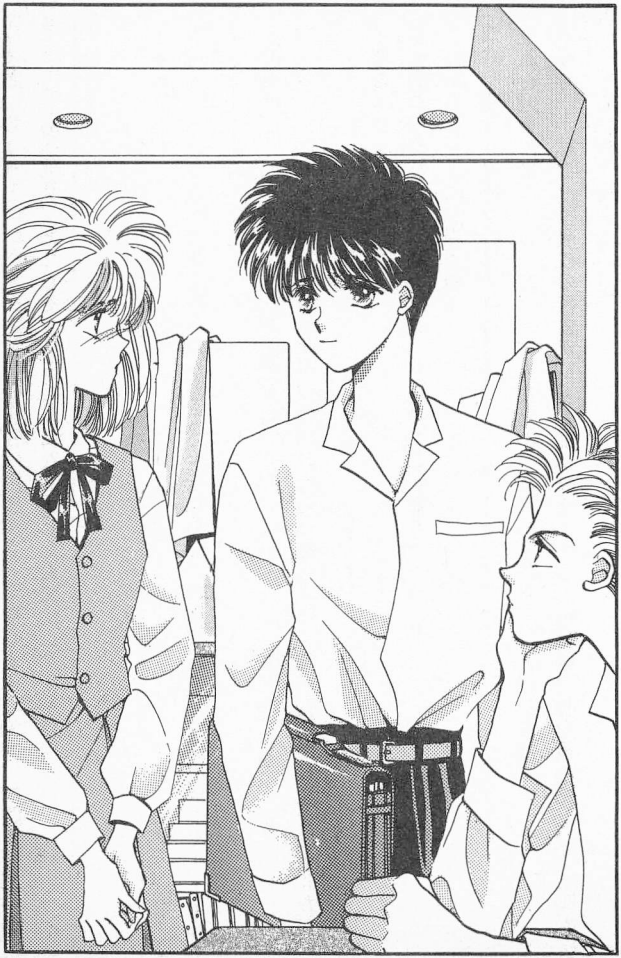
びしっ、と人差し指をつきつけて瑞穂が追いうちをかける。こちらは反論の余地なし、だ。

「……反省してます」

思わず山岸の顔色をうかがいつつ、亮介が答えた。部長にして同級生でもある山岸は、仕方ないとばかりにため息をついた。

「何だか知らないけど大事な用なんだろ？　どうしてもって崎谷が思うんだったら……邪魔はできないしさ」

「理解ありますよね、部長といい……」
神原先輩といい、という台詞を瑞穂は奥にしまいこむ。何を言いたかったのか、亮介にはわかったはずだ。
「本当にそう思うよ」
亮介が頷いた。感謝してくれたまえよ、と山岸が突っこみを入れる。
（ちぇーっ）
これだから駄目なのだ。瑞穂は内心で歯ぎしりした。
口外はできないが——崎谷亮介が得体の知れない『化け物』を『退治』する『仲間たち』のために、その生活のすべてを侵害されていることを、瑞穂は知っている。
学校を休むのも部室に現れないのも、悩むのも傷つくのも、疲れるのも泣くのも、全部亮介自身のためではなく『彼ら』のため。自分ではなく、他人のためだけ。
「で、今日も先輩は……」
瑞穂が口をひらいたとたんに、ごめんなさいの六文字が亮介の表情にあらわれた。
「……帰っちゃうんですね？」
「うん……悪いけど」
（わかりやすすぎる……）
彼がもう少し嘘つきなたちだったらよかったのに。瑞穂は咳払いした。



「じゃあ、ちょうどいいです。あたしも今日は用事があって帰りますのでっ、校門までご一緒します！　あっ部長、あたしそういうことになりましたんで」
「おまえねー……」

中間試験という名の短期決戦をのりこえた生徒たちが、晴ればれとして帰途につく――そんなにぎやかな流れの中心に。
その車はごく穏やかにすべりこんできた。
シルバーブルーメタリックの車体が、校門の傍らに停止する。強い初夏の日光を反射しながら。
小型のパジェロだ。
運転席の扉がひらき、高い位置から細身の影が降りたつ。
生成りのシャツに、濃紺のスリムジーンズ。
双眸を覆う、褐色の遮光グラス。
誰かを迎えに来たらしいことは、その青年の物腰から察することができた。
吉祥寺――私立高陵高校の校舎が、目の前に控えている。彼は両の腕を組みあわせ、太陽を厭うような表情で蒼天を仰ぎ見た。

成り行きで——と言うにはあまりに瑞穂の作意がはたらいていたりしたが——瑞穂と一緒に校舎を出た亮介は、そこではたと足を止めた。

「ですからねっ、あたしは先輩が犠牲になっちゃいけないと思うんです！　先輩たちの事情なんてあたしにはわかりませんけど、そっち側を向いてる先輩が百パーセントで、あたしたちの知ってる崎谷先輩がゼロになっちゃうっていうのは変です！　どっちの先輩も本当の先輩なんだから、その自分のどこかを殺さなきゃならなくなったらそんなの本当の仲間じゃないんです！　だからっ……先輩？」

熱弁をふるおうとしていた瑞穂が、亮介の視線の先に気づいて口をつぐんだ。

校門のむこうに停まったシルバーブルーメタリック。亮介の目は、その車体に寄りかかり腕を組んでいる人物をとらえていた。

（……えっ……!?）

一瞬、目の錯覚ではないかと亮介は疑った。

しかしよりによって彼を見間違えるはずはない。信じにくいほどラフな装いではあったが、その際立った容姿に変わりはまったくない。

「……忍さん？」

亮介が小さく呟くと同時に、斎伽忍は右腕を持ちあげた。黒革の手袋に包まれた指が、褐色の眼鏡を抜き去る。眼差しがまっすぐに亮介をつらぬいた。

光を受け、青く透けてうつる二つの瞳が。

「やだっ……」

圧倒され、瑞穂が無意識に声を発した。

その反応は、恐怖、に近い。

斎伽忍はそのまま背を向け、運転席の扉をひらいて車内へと姿を消した。

「！」

亮介は迷わなかった。じゃあまた、と瑞穂にあわただしく声を投げ、彼を追ってパジェロに駆け寄る。助手席にとび乗ってドアを閉め、息を整えながら運転席のほうを見やった時——再び遮光グラスをかけなおした斎伽忍が、ハンドブレーキを外して車を発進させるところだった。

II

ジーンズにスニーカーの斎伽忍なんて、見るのは初めてだ。
「まるで誘拐だな」
制服姿の亮介を軽く見やり、忍がそう言った。今ひとつ冗談に聞こえないところが怖いのだが。
何を答えていいものかわからず、亮介はフロントガラスの先を眺めていた。シルバーブルーのパジェロは小路をぬけて青梅街道に入り、都心の方角へと向かう。
「……今日はどうしたんですか？」
おずおずと尋ねてから、何か緊急の事態ではないかと亮介は思いついた。何か、自分が――中和能力者である自分の存在が――必要となる局面に到ったのではないのか？
「いや……」
褐色のグラスのむこうで、忍は静かに亮介の考えを否定した。

「理由と呼べるものはないよ」
「……」
わからない。彼の本心が。
あまり深く考えないほうがいいのかもしれない。亮介が内心でそう判断したとき、忍が言い加えた。
「会いたくて……」
亮介は彼の横顔を見上げて、だが口をひらけなかった。さらりと言われすぎて、最初よくわからなかったというのもある。
「そこで困らないでくれないか」
ハンドルをきりながら、忍が苦笑した。
「あっ、いいえっ！　あのっ、そうじゃなくてっ！」
我にかえってあたふたと亮介が身を乗りだす。
「そうじゃなくて……だからつまり、忍さんの言動はいちいち人を驚かすところがあってっ……」
「一貫性がないから迷惑なんだろう」
「そ、それはっ……いえ、その、たしかにそういう面もありますけど……あってもそれが迷惑だとかそういうわけじゃ全然なくて！　つまり俺が勝手にびっくりしてるだけで……ええと」

「ありがとう」

今度は、本物の人懐こい微笑が返ってきた。

ええとだからつまり、と亮介は口ごもってしまう。この人は……こちらの反応を面白がっているわけではないだろうに。

「実際、それとは別に……少々、時間をかけすぎているという反省があってね」

視線を前方へ戻して、忍が言葉を続けた。

「もっと早く、結着をつけられるものだと期待していたんだが。思いのほか長いこと、君を拘束してしまっている。少しくらい発散しておかないと焦りが出てくる。それは望ましくないことだからね」

「……焦り、ですか？」

亮介は意外な気持ちで問い返す。

むしろ今の状態は慣れに近い。亮介にとっては。

常に斎伽忍の近くにいるということ。

いずれ来るその瞬間のために、彼の目の届く領域を出ずにいること。——彼の〈使〉を仲介として。

時間的な犠牲や行動の制限はあるが、しかしそれを負担とは亮介は思わない。

「君は平気そうだな」

亮介の表情を読み、忍が言った。
「もしかすると焦っているのは僕のほうかもしれないね……」
「忍さんが？」
反射的に訊いてしまってから、亮介は後悔した。それは失礼な問いかけのような気がした。斎伽忍という人物に対して。
「案外、僕は短気だよ。待たされる相手に事欠かないものだから、僕自身、自分の性格を忘れかけているけれど」
冗談めかした言葉だが、果たしてこれは本音だろうか？　またもやわからない。
彼の真意がわかりにくくても、自分は本音で返せばいいのだ。亮介はふとそう気づいた。簡単なことだ。
「忍さんはとても我慢強い人だと、俺は思います。気持ちがどうでも、行動には筋を通しているから……感情に負けないから、立派だと思います」
「そんな言われ方をするのは、初めてだな」
興味深い様子で忍が呟いた。

＊　＊　＊

「いや、里見さんが我慢強い人だってことは知ってるつもりですよ。ですけど今回ばかりは事情が違いますでしょ!?　もしもし?　今、自分の身体がどういうことになってるのか自分でわかってます!?」

職場の電話を無断借用して、水沢諒は――またの名を三島成之は――声をひそめて訴えかけた。ようやくつかまった渦中の人物へ、である。

『大袈裟に考えすぎてるんだ。君も、希沙良も』

落ちついた里見十九郎の声に、変化はまったくない。それもまた彼の比類なき精神力の賜物であるはずだった。

『ゆっくりと時間をかけて自動的に自殺する趣味なんて、俺にはないよ』

「言ってることと実行なさってることが一致しないように思えるんですが」

『それは俺が、命にかかわるだけの妖気を浴びている場合だろう?』

「あのですねえ、それを里見さん本人に決められちゃ困るんですよ。妖気の致死量なんて実験したことのある奴はどこにもおらんのですから。そうでなくたって里見さんの感覚はただごとじゃなく強いんだから、影響うけてないはずがないんですよ。この程度のこと、俺ですら考えつくんですけど」

だから十九郎の術力の性質を知りぬいている和泉希沙良が、事態を深刻視するのは当然なのだ、と諒は暗に告げている。

『鋭い意見だ』

「笑ってる場合じゃないでしょっ！」

まったく、里見十九郎は何を考えているのだろう？　まさか、本人が言うようにただ反抗しているわけではあるまいに。

「……斎伽忍が直々に、夏江さんの前へ現れたと聞いてますが」

ぼそりと、諒は低く切りこんでみる。

「それがどういう意味かは、もちろんご存じなんでしょ？」

忍が自ら十九郎の身を案じて命を発したなら。

斎伽の長、そして空者総帥伽羅王としては、ぎりぎりの譲歩だ。斎伽忍を批判して去った術者ひとりに彼がそれ以上の温情をかけたと知れたら、〈本家〉の手の者が黙ってはいまい。

『最後通牒――なんて、つまらないことは言わずにおくよ』

「……もしもし？」

さすがにそこまで悪い冗談にはついていきかねる。諒が頭を抱えこみかけたとき、受話器のむこうで十九郎がため息をついたようだった。かすかに。

『ごめん……』

「……」

その一言を聞くべき人物は、他にいるはずだ。

そう感じつつ諒は沈黙していた。下手な慰めを吐くよりは無言でいるほうが、彼には伝わるように思えて。

『ごめん……今は駄目なんだ。くだらないやつあたりでもしていないと気が狂いそうだ』

「……里見さん」

あまりにストレートな痛みが、その一瞬だけこちらへ届いてきた。諒は思わず受話器を手前へ引きよせていた。

「里見さん、だったら……」

『悪いけれど、切るよ。これ以上、話せない』

「ちょっと待っ――」

はっ、と諒は息を呑んだ。ひらめきが脳裏を走った。

もしかすると里見十九郎の〝理由〟は。

「じゃあ里見さんが動かないのは、たとえば和泉が――」

ふつり、とそこで通話がとぎれた。無情な信号音が耳元でくりかえす。諒は恨めしく受話器を眺めた。もう少しで大切なことがわかったのに。

「三島君」

不意に、すぐ近くから馴れなれしく呼びかけた声があった。ぎょっとして諒は背後をふりむいた。

人の気配にはくれぐれも注意していたはずだった。真後ろまで近づかれて、まったくのノーマークとは。

いったいどういう――。

「三島君、だよね？」

「あっ、どうも鷹木さん、毎日お仕事ご苦労さまです」

鷹木文彦、だ。

諒の挨拶がずいぶんと無礼なものであったことは間違いない。鷹木文彦は毎日お仕事もせずにこのCBSまでやってきては、新人キャスターの工藤珈織につきまとって遊んでいるのだから。

「かおるさんは番組のスポットコーナー撮影のため、新宿西口まで出張中ですが」

「ふうん、気がきくバイト学生君だね。どうもありがとう」

事務的に言って、文彦はじっと『大学生・三島成之』を見おろした。

「でも、今、用があるのは彼女じゃないんだ……」

「誰か呼び出しですか？」

デスクの椅子から立ちあがり、あくまで朗らかに諒は問いかける。

まずい空気なのだ。できれば――いや、なんとしても――逃げたい。いかにしてごまかし、席を離れるか。

「斎伽忍がどうしたって？」
肩がすれちがう寸前、文彦が尋ねた。
（ちっ……）
しまった。やはり電話の内容を聞かれている。いつの間に、どこから。
「誰のことです？」
完全なポーカーフェイスを作って、反問する。この場はしらをきりとおすことに、諒は決めていた。どうせ証拠は何もないのだ。顔に出しさえしなければ、なんとかなる。
「へえ、知らないのか」
あっさり文彦はそう呟き、もう一歩、諒のすぐ目前まで接近した。
「じゃあ君、このことは知らないかなあ」
耳元に囁くようにして、彼が言う。他の誰にも届かぬ声で。何だこいつは気味の悪い、と諒が眉をしかめた時だった。
「斎伽忍って、伽羅王？」
「!?」
意表をつかれた。まともに諒は相手の両眼を見返してしまった。
にっ、と文彦が笑う。
（やられた！）

諒は思いきりほぞを噬む。大失敗だ。

「ゆっくり話そうじゃないか、そのことについて、人のいない所でさ……」

文彦が促した。逆らうことは、諒にはできなかった。何故この放蕩息子がそんな情報をつかんでいるのか——それをつきとめなければ。

……鷹木文彦とは、いったい何者なのだ？

＊　＊　＊

その頃——。

鬱蒼とした木々の合間に身をすべりこませ、枝に膝をかけてくるりと半回転した影が、あった。

場所は神奈川県、鎌倉。

海岸からずいぶん遠ざかった、人里離れた山奥に、その森はある。

森全体が、すでに私有地だ。教科書に載るような有名な寺院が近くにあるが、参拝客たちもこの森の中心にひっそりと建つ古い屋敷の存在は知るまい。

ちっぽけな屋根が見えた。

丈の低い生け垣にかこまれた、平家造りの邸宅。

よほどの大豪邸かと思われたが、あてが外れた。よほど頑丈な鉄柵にでも守られているかと思えば、そうでもない。

楽勝、ではないか。

うまい話には落とし穴、という『お約束』を、和泉希沙良はもちろん承知していた。だが目の前の光景と、里見夏江や水沢諒からさんざん聞かされた『世にもおそろしい斎伽の本家』のイメージとは、あまりにもギャップがありすぎた。

本家にだけは手を出すな、との夏江の言葉にはそむくことになってしまうが。

（もたもたしてられねえんだよ……）

樹上で手首のサポーターをはめなおし、希沙良は枝を蹴って音もなく隣の木へ移る。

三十分だけ、様子を見よう……。

それで屋内の動向をつかんだら、後は強行突破だ。

III

それは夕刻も近づき、屋敷を包む大木の影が広がりを見せる頃。
「一の囲に小鳥が掛かりました由」
報を届けたのは年老いた僧――を装った歩哨の者――であった。そのとき屋敷の西方に位置する〈桐〉の間に控えていたのは、四人の若者だった。
「めずらしい……」
この鎌倉の本邸に、ぬけぬけと侵入せんとする者があろうとは。
呟いたのは、もっとも上座にあった青年。
「おおかた件の馬の骨が〈桜〉を狙って現れたものであろう。違うか？」
やや武骨な匂りをただよわせた低い声が、そう決めつけた。
「さて、どうかな」
その対席から生真面目な声が応じた。

「わずかなりと心得た術者であれば、一の囲にて早々と網にかかる過ちはおかすまい？」
「空者〈沙良耶〉に縁の術者がひとり――」
四人目の声が、末席から控えめに発された。
「あの者なれば、われらの定法に暗かろうとも、やむなき仕儀かと」
「なんと……」
座の空気がゆらめいた。
（沙良耶の息子か！）
術者としての才能を恵まれ生をうけた者ながら、一族の内に数える要はなし、と斎伽の長に――空者〈伽羅王〉の化身に――事実上の絶縁を申しわたされている。それが和泉希沙良だ。
禁じられた者が、禁じられた地へ足を踏みこむとなれば。
「従来の処分では、われらの面目もたつまい」
「制裁を――」
「斬罪でもかまわぬ」
口ぐちに彼らが囁きあうなか、末席にあった人影が、ゆるりと身をおこした。
「兄者方、ここはこの遠野に御一任いただけませぬか？」

＊　＊　＊

水沢諒からの電話を切った数分後、だった。

再び、呼び出しのベルが鳴った。十九郎はあえて受話器に手を触れようとせず、それが途絶えるまでの時をやりすごした。

「お坊ちゃんはこちらにいらっしゃいますか?」

片桐家のお手伝いさんが、障子ごしに廊下から呼びかけた。

広い屋敷の、離れの一室を十九郎は借用している。母屋に暮らしている兄弟たちとの仲は決して悪くないが、しかしその関係に甘えすぎないのが庶子としての礼儀だと十九郎には思えるのだ。

「はい?」

「お電話です……遠野さまから」

「……遠野?」

まったく予測せずにいた名前だった。

「おつなぎしますか?」

一瞬、断ろうかと十九郎は考えた。彼からの電話であれば、内容はまちがいなく斎伽の本家

にかかわることだ。今の自分には……。
『じゃあ里見さんが動かないのは、たとえば和泉が――』
水沢諒の言いかけた言葉が、耳に残って何かを訴えた。
たとえば。
（まさか）
「つないでください……」
「内線の二番です」
礼を言って部屋の電話に指をのばし、十九郎は呼吸を整えた。
何を聞いても平静でいられるだろうか。自分は。
今はその自信がない。
「一真（かずま）」
受話器をとり、その名を呼ぶ。
『すぐれない声だな』
線の細い――やさしげな声が返ってきた。
『気にかかることでもあるのか？』
「そちらは壮健（そうけん）そうでなによりだ」
どうしても、十九郎の態度は硬いものになってしまう。遠野一真という名の少年は、それを

敏感にとらえたらしく小さな吐息をこぼした。
『君は損な性分をしていると思うよ……』
「不愉快にさせたなら、謝るよ」
『違う、逆だ。君はそういう人だから心配なんだ。こう言っても僕が心配している意味なんて君にはわかってもらえないような気がするけれど……』
「……」
少しの間、十九郎は沈黙した。
心こまやかな、同い年の——同族。それが遠野一真。
彼の心遣いの意味など。
わかりたくはなかった……！
「一真」
急に冷えてゆく胸を、感覚の失われてゆく指先を、自覚しながら十九郎は告げていた。
「一真、どんなことでもかまわない、俺にかまわず話してくれ、迷惑はかけない」
『……よくない知らせだよ』
ぽつりと一真が答える。
「わかっているつもりだよ」
覚悟の上、だ。



『そうか……なら話そう』
彼は低く声を改め、そして言った。
『君の従弟は失敗したよ、十九郎。彼は多分……殺される』

＊　＊　＊

映像資料室、と記されたドアを、鷹木文彦は後ろ手に閉じた。
余計な相手に時間をとられてしまった。早く新宿へ行き、珈織と合流しなければ。
（伽羅王に先をこされる）
まさかこの短い時間に、あの若造がこちらをだしぬくとも思わないが。
たった一瞬でも珈織からは目を離したくないのだ。今は大切な時なのだから。
ふわり、と文彦は扉の鍵に触れる。これでこの部屋は完全に閉ざされる。部屋の存在そのものが、人の意識から消え去ることになる。
「さあて」
朗らかに呟いて、文彦は勢いよく廊下を走りだした。通りすがりの女性社員たちに、いつもどおりひらひらと手を振ってみせながら。

……閉ざされた室内には、冷気が広がりつつあった。
整然と巨大な棚におさめられた、記録用ビデオフィルム。
その品質を管理するため、この部屋の室温は常に低めに保たれている。
だが現在、天井に据えられたエアーコンディショナーは、設定温度をさらに下まわる異常な冷風を吹き出していた。
窓はない。照明は失われ、小さな常夜灯がひとつだけ、部屋の片隅に向けてオレンジ色の光を放っている。
その光すら届かぬ所に。
暗く冷たい床の一角に……。
力尽きた身体が横たわっていた。長身の、影が。

第六章　沈黙の代償

I

心地良い初夏の風が、枝葉を揺らし、森をすりぬけてゆく。
さわさわと談笑しながら、数人の女たちが山道を上り、屋敷の勝手口へと姿を消した。揃いの地味な和服。邸内の使用人らしい。
静かだ。
穏やかな緑。
森林浴を気取って昼寝でもしたら、さぞかし気分はいいだろう。漠然と、希沙良はそんなことを考える。何も余計なことは気にせず、日がな一日のんびりと枝の上ですごしてやれたら。そして自分の眠る枝の下では、あの自称高所恐怖症の——それは無理やり樹上に引っぱりあげられないための口実にちがいないのだが——性格のよろしくない従兄が、静かに本のページを繰っていたりするのだ。
当然のように約束された光景。

そういえば昔、まだ術力や術者といった言葉の意味も本当には理解できずにいた子供のころ、希沙良はあの従兄に大怪我をさせそうになったことがある。希沙良にとっては難なく跳びおりられる程度の、公園の大木の枝から、まさかそれが自分以外の人間にとっては危険な高さであるとも知らず、彼を突き落としてしまったのだ。その時はちょうど、彼の父親である片桐龍太郎氏がすぐ真下に待ちうけてくれていたので、十九郎はどこの骨も折らずにすんだのだが。

ショックだった。彼と自分は常に同じであるはずだと――信じていたから。

他の人間に、そんな期待はしない。要求はしない。初めから。普通の人間に、だったら。

『希沙良の力は、十九郎の力と、ひとつのものを分けあっているの。分けたものだから、重なりはしないのよ』

声も出せずに泣いている希沙良を、夏江はそう言ってなぐさめた。

同一のものではなく、異なっているからこそ対をなすのだと。

術力に『静』と『動』ふたつの性質があることを、そのときから希沙良は認識するようになったのだ。

（謝らなかったな、あの時）

突き落としたのは自分のほうだったのに、被害者のはずの十九郎が真っ先に駆け寄ってきて謝ったりしたから。

結局、自分からは一言も謝れなかった。謝らなかった、ように記憶している。
昔から、ずっとそんな風に、二人の関係は続いてきた……。
（それじゃ駄目なんだ）
重荷とせず、変わってゆけばいい。少しずつ自然に、互いを縛らずに変わってゆけば。
それは正論だ。わかっている。わかっている、そのことは。けれど。
今、どうすればいいか、なんて。
たった今、救われる方法なんて。
そんなこと、いったい誰が知っている!?
希沙良は目をあげる。まっすぐに目標をとらえる。森を一周して屋敷の造りは憶えた。
狙うのは、とにかく中枢だ。
「高所恐怖症って……」
もしかするとあれはその場の方便ではなくて、彼は本気で木の上が苦手なのかもしれない。
昔の一件が尾を引いているのかもしれない。脈絡も何もなく、今ここで考えなくともいいような思いつきが頭を占めて、希沙良は戸惑った。
過去や仮定にばかり思考をとらわれているのは、目の前のことに集中しきれていない証拠だ。
何故だ？

胸騒ぎの原因を、希沙良は知らない。

「二の囲、南方より通破――」
「内苑までは確と導き入れよ、との伝達を」
「内苑？〈桜〉の間に近すぎるが？」
「懐まで誘わねば逃しかねぬ。まがりなりにも相手は術者である。――禁呪の界を敷く」
「心得た」

屋敷の南、巨大な蔵の傍らに影が降り立った。
外辺をまわりこみ、炊事場――換気孔から漏れる湯気でそうと知れる――の窓に気づいて身を沈める。
「ねーえ、〈桜〉にお持ちするお菓子はどうしたのよ？」
「いやだわ、さっきからそちらに用意してあったのに。みちよさん、あなた、お茶と一緒に急いでさしあげてちょうだいな」
「はあい、今まいります」

窓の奥からそんな会話がこぼれたと思ったら、からりと引き戸のひらく音がした。
布をかけた盆を片手に、若い女性がひとり、縁側に現れた。慣れた足どりで、まっすぐに板敷きの上を進んでゆく。
（――桜？）
いかにも貴人を扱う様子の、女たちの話しぶりだった。すると〈桜〉にいるのは……。
迷わずに希沙良は縁の下に身をすべりこませた。女の足音を追えば簡単に〈桜〉の間までたどりつける。好機だ。

「餌にかかったようだ」
「他愛ない……！」
「急かずともよかろう、明石川。ここからが我らの本領なれば」
「言わずと知れている！」
「すまぬな。貴君がそう言って、まともに事の運んだためしがないものでな」

「……？」

妙だ、と希沙良は気づいた。

女の足音はゆっくりと屋敷を横断し、一度は中心部に近づいたものの、またすぐに外へとはずれる。

縁側に逆戻りだ。

東の中庭が、縁の下から窺えた。

どこに向かうつもりなのか。

そういえば、誰も彼女とすれちがわない。会話のひとつも、人の気配すらもないのは……おかしい。

屋敷全体がすっかり息を殺しているような……。

（まずい）

これは危険な展開だ。希沙良は動きを止めた。勘だ。こういう空気は、何か悪いことを運んでくる。

希沙良が止まると同時に、足音も不意に途絶えた。

狙いすましたように。

（読まれている!?）

見すかされている。こちらの動きを。驚愕せずにはいられなかった。それほど簡単に見切られる尾行はしていないつもりだった。

この相手は、何だ？

しかし希沙良は固く唇を結ぶと、薄暗闇のなかで両の手首を重ねあわせた。

発見されたなら、それはそれで仕方ない。自分には戦う手段が——力が、ある。少なくともここにいる連中は普通の人間だ。ならば、負けない。

負けるはずがない。

「遠野は戻ったのか？」

「既に内苑の奥に」

「明石川、不破は」

「持ち場に在りて時を期しております」

「では」

軽く微笑して、青年は立ちあがった。

斎伽の護りを固める者として、この獲物、決して討ちもらすわけにゆかぬ。

「始めよ」

ふっ、と重力が変化した。
「!?」
希沙良は上方を仰ぎ見た。両眼を見開いて。
何が始まったのか、よくわからなかった。
ただ——心臓が……。
左胸を中心にして、身体全体が……。
「あ……」
喉が。
意志に反して、喉の奥から押しころされた悲鳴が漏れた。
潰される。心臓が。呼吸ができない。何も見えなくなる。見えなくなる。遠ざかってゆく。
じりじりと潰されてゆく。
ゆるやかに——殺される。
鼓動が全身に広がり、耳の内側でひどく大きく響いた。上下左右の感覚が消えた。
いったいどこから、どんな方法でこの攻撃を。
ギリッと奥歯を噛みしめ、希沙良は腕に力をこめた。冷や汗をふりはらう。精神を集中する。屈するわけにいかない。
術力を呼びおこし、結界と手刀を——。

「！」

手刀に光が宿った瞬間、激烈な痛みがそれを契機として身体中をかけめぐった。希沙良は絶叫していた。意識が千切れ、砕け散るのを感じた。暗黒が近づいた。

II

ずるり、と身体がひきずられ、中庭の地面に投げだされた。

周囲が明るくなったことに、希沙良は気づいていた。自分をとりまいて立つ、いくつかの人影にも。

——四人、だ。

どれも知らない顔だった。口をきく余力も、今はない。四肢を地面に放りだしたまま、希沙良は彼らの姿を見上げた。

「沙良耶の息子か」

そんな呟きが聞こえた。キッ、と希沙良はその相手を睨みつけた。軽々しく口にされるべき

名ではない。母の別名は。

それは、おそらく四人の内で最も年長にあたる青年だった。優男ぶって、と希沙良は思う。いやに人を見下しているのが気に入らない。斎伽忍は本能的に人を見下すから嫌いだが、こっちの相手はわざと見下しているからもっと嫌いだ。

「われらのことはまるで知らぬものと見えるが」

ならば自己紹介くらいしろというのだ。希沙良は胸の内でそう怒鳴りつける。

考えを読んだように、青年はかすかに笑った。

「斎伽の家に生を享けながら、この為体では……」

「和泉希沙良」

ぽつりと、反対側から新たな声が呼びかけた。

「僕たちは君と同様に、斎伽の一族に名を連ねる者だ。ただ異なるのは、僕たちは君のように術者として完成されることがなかったという点だ」

告げたのは、年若い人物。同年代に見えた。

「決して表立った行動をとることはないから、君が知らずにいたとしても不思議はない。だが、いずれにしても許しを得ず本邸へ侵入した罪は、許されないよ……」

「お優しいことだ。遠野は」

傍らで、恰幅のいい大男が吐き捨てた。

遠野？　どこかでそんな名を聞いたことがあるかもしれない。

「……で？」

無残に嗄れてしまった声を、希沙良は強引に絞りだす。

「どうしようってんだよ……」

「……」

四人はそれぞれに目と目を見合わせる。わかりきったことを確認するように。

「貴君が単に〈桜〉を――すなわち冴子殿を狙ってもぐりこんだ賊であれば、今少し理屈は簡単なのだがな」

無表情に、残りの一名が口をひらいた。

中肉中背、質実剛健といった形容の似合う若者である。

「貴君は二重に禁を破った。あの方の命に背き、本家へ立ち入るとは」

……斎伽忍の命令？

そんなもの知らない。知ったことではない。

「その罪、万死に値する」

あくまで生真面目に、彼が宣告した。

「……なに言ってんだ、おまえら」

事態を深刻にとらえる以前に、希沙良は呆れてしまった。どういう発想をしているのだ、こ

の連中は。

斎伽忍の言葉にしたがわぬ者には、死を与える？　……ふざけている。

あの根性悪のバケモノに歯向かったくらいで殺されるなら、自分も水沢諒も、すでに何度か死んでいなければおかしい。なにせ斎伽忍に対して敬意を払ったためしが、自分にはないのだ。

「われらの〈禁呪〉により、貴君の術力は事実上、無と化している。術力を発揮しようとて、苦痛が返るのみだ。無駄に足掻かぬことだ」

「懇切丁寧な解説を、ご苦労だな。不破」

話の流れを、再び例の最年長者がひきとった。

がちゃり、と手中に金属の響きを収めながら。

ベレッタM20。イタリア製の小型オート拳銃である。ごく無造作にそんなものを扱い、違和感も覚えさせない。慣れているのだ。

頭の真上にぴたりと銃口が据えられた。希沙良はいまだ信じられない思いで、それを見つめた。

「これでは一息に頭を吹き飛ばすとまではいくまいな。多少、苦しかろうが……悪く思うな」

「野郎っ……思うに、決まって……」

あたりまえではないか。言い返そうとしつつ、希沙良は気力がふっと失せてゆくのを感じて

いた。

なんだか馬鹿馬鹿しい。自分はいったい誰のために、何が目的でこんな所まで来たのだったか。

何のために。

もう決してとりもどせない心を、そうと認めないために無理やり救おうとしたのでは、なかったのか。

だったら、別にいいのかもしれない。こんなくだらない終わり方も。

絵に描いたような犬死にでも。

少なくとも、これで——決して忘れられずにすむ。自分という存在は。絶対に。

(あいつが死ぬまで)

それは甘美な誘惑。

ひきずりこまれる陶酔の悪夢。

息を静かに吸いこみ、希沙良は暗い銃口に目をこらした。

魅入られる瞳で……。

「咸月殿!」

不意に鋭い声が場をつらぬいたのは、その時だった。なにもかもを打ち破る、声が。

はっ、と四人の暗殺者たちが一様にふりむいた。

咸月、と呼ばれたのはペレッタを手にした最年長の青年。彼は相手の姿をとらえ、そしてわずかに眉をしかめた。

「……里見」

咸月陣、明石川耕宇、不破武人、遠野一真。

上は二十三歳、下は十七歳まで。いずれも斎伽の分家筋の後継者たちである。

斎伽の血を少なからず受けついでおりながら、不運にして幼少時に術力を失ってしまった元術者——あるいは因子保有者。

親衛隊、と呼んでもいいかもしれない。七瀬の家が擁する、現世ただひとりの〈空の者〉伽羅王の、まぎれない信奉者たち。

自らを〈地の者〉と言い換える。

または〈道者〉と。

斎伽忍が現在、本家方で——田舎の馬の骨などではなく——抱える術者は、妹の冴子と里見十九郎の二名ばかり。

もう二十年早く伽羅王が転生していれば、現役の術者が確実に十名は揃ったであろうに、とは、今の長老たちの嘆くところであるが……。

ともかく術者として斎伽忍に重用される立場の里見十九郎は、道者四人衆から見れば、複雑な思惑を抱かせる相手であることに違いはなかった。

「命乞いとは、不調法な」

咸月陣が呟き、苛立たしげに遠野一真を見やった。

「遠野。おまえの案とはこういうことか？」

「誤解なきように、咸月殿」

一真が答えるより早く、里見十九郎が張りつめた言葉を投げた。

刃のような、冷たい声音で。

「その者は、我が手にて葬らせていただきたい」

Ⅲ

「その者の不明は、我が不徳の致すところ。責はこの自分にある――。御一考いただきたい、咸月殿！」

静かながら有無を言わせぬ語調で、里見十九郎はそう訴えた。興味をひかれたように、咸月陣は彼を眺めかえした。
「名誉挽回の機会ときたか……」
「私は反対だな」
不破武人が、相変わらずの無表情でぽつりと意見をのべた。
「里見の個人的な意地としか思えぬ」
「俺はどちらでもよい」
大男の明石川耕宇が、つまらなそうに言葉をつづける。
「さっさと片づけてくれさえすれば、な」
「ふむ……遠野は？」
かすかな笑みを浮かべながら、咸月が問うた。
「里見に任せればよろしいかと」
それが遠野一真の返答だった。
「私も同意見だ。多数決で、可決だな」
咸月陣はショーの開幕を待つ風情で、楽しげに一笑してみせた。

（……え？）

彼がいつ現れ、そして何を言ったのか、希沙良にはよくわからなかった。いや、本当ははっきりと知っていたのかもしれない。だが……すべてが、眩しい夢のつづきのようで……。

立ちあがれ、と十九郎は告げていた。立って戦うのだと。

誰と？

「俺とだよ」

十九郎が答えた。希沙良は目を瞠った。

「生きのびたければ俺を倒すんだ。おまえは幾重にも法を乱した。斎伽につらなる一族総勢を代表し、俺がおまえを制裁する」

「おまえ……何……」

めまいがする。疲れはてた身体からは、気力のかけらも出てこない。何の話をしているんだ、自分たちは？

「反撃の権利は与える。禁呪の縛も解く。これで術力は自由になるだろう。影響が残って辛いかもしれないが、今の俺の力の程度を考えれば、互いに順当なハンデだ」

「……おい……！」

立てるわけがないだろう。こんなに思いきり痛めつけられておいて。頭の中身も無事かどう

か知れないのに。さっきから幻覚は見えるし、幻聴は聞こえるし……。
幻。なにもかもが虚像。
夢の世界。
「くだらねえ……」
肺を動かし、希沙良は吐息まじりに呟いた。
「殺したきゃ殺せよ……死んでやるから」
「立つんだ！」
それは叱責だった。希沙良は目を上げた。
「手は貸さない。自力で立つんだ」
言って、十九郎はわずかに間をおいた。
「俺に恥をかかせる気か？」
「!?」
思わず、希沙良は地面に腕をつき上体を起こしていた。恥!?　――体面!?
名誉挽回だの、個人的な意地だの……。
（こいつらは……）
四人の傍観者たちは、すでに中庭の四方にそれぞれ陣取り、ことのなりゆきを見守っている。

（こいつは、なんにも……）

おまえは何もわかってない！

「畜生……」

急に怒りがこみあげた。どうして。どうしてこんな簡単なことが。

「なんでわからねえんだよ……!!」

怒り、だったのか本当は定かでない。切なさだったのかもしれない。悲しみかもしれない。思い——だ。感情だけを力に代えて希沙良は立ちあがった。

ぐらりと世界が揺れた。別にかまわなかった。視界がふらつこうと、足が震えようと。

「畜、生……」

希沙良は両の拳をかためた。

一瞬でいい。攻撃の態勢を作れば。

こちらから仕掛ける一瞬を、十九郎は待っている。

待っている……。

（手は貸さない。自力で立つんだ）

おまえはわかってない。そう告げることそのものが、俺が自力では立てないと信じているおまえの証明だということ。

（……だったら、俺は、おまえの……）

希沙良はまっすぐに十九郎を見つめた。
知らない。どうすればいいのか、なんて。
誰も。

カッ、と白銀の光が希沙良の両手に宿った。
みなぎる光は、高められた気のあらわれ。
手首を打ちあわせ、輝きを増幅する。
白光に透かし、相手をとらえた瞳。そこに迷いはなかった。
「！」
希沙良の爪先が地面を蹴った。ふっ、と十九郎の片腕が動いた。
勝敗は直後に決した。
あまりにも正確に撃ちこまれた気の塊が、希沙良の胸をつきぬけた。肋骨が砕ける音を希沙良は聞いた。一歩も動かずに十九郎は己の放った気の行方を見ていた。無言で。
十九郎まで届かぬ位置で、希沙良が着地する。着地の衝撃が、ダメージをとりかえしのつかぬところまで深める。そのまま前のめりに倒れる身体を——抱きとめる腕があった。
崩れゆくだけの、傷ついた身体を。

「……っ……」

息をしようとして、希沙良は咳きこんだ。

自分が鮮血を吐いていることを、彼は知らずにいる。自分が今、誰に身体を預けているのかさえ。

「希沙良……」

低い、声が耳元で呼びかけた。

希沙良は一度その目を瞠り、そして閉ざした。見ないほうがいい。どうせ見えないのなら。

「そんな、風に……呼ぶなよ」

温かい肩を指でつかみ、希沙良は呟く。

「畜生……」

何故こんなことになったのだろう。

すべては、あの、斎伽忍の一言から……。

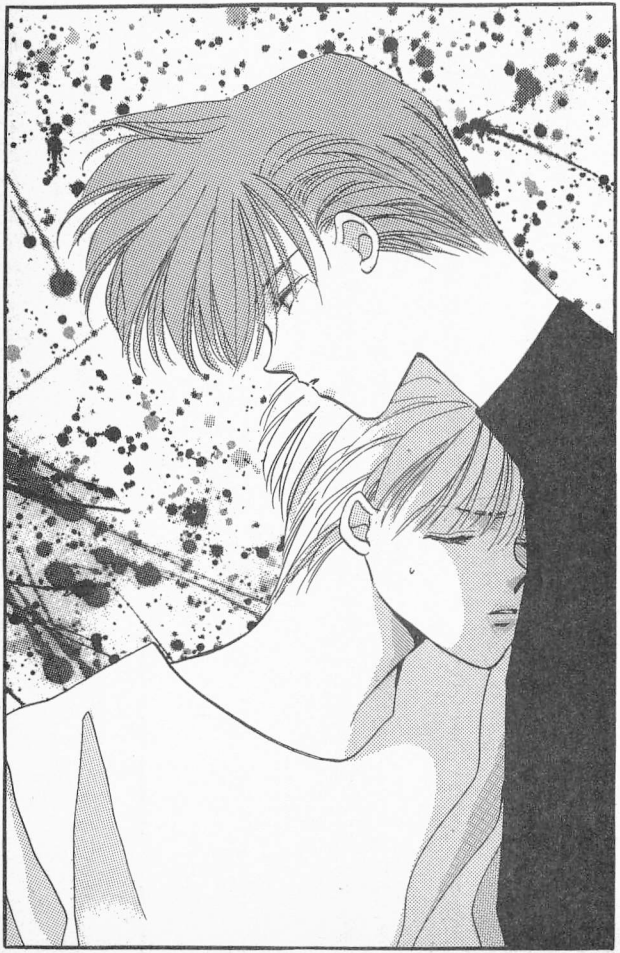
あの時からずっと、自分は訊きたかった。ずっと訊きたくて、訊けずにいた。

だから苦しくて。

「なあ、ひとつ、聞かせろよ……」

聞こえているだろうか。この声。

腕に力をこめ、彼の肩に額を押しつけ、希沙良は口をひらいた。



「俺は、おまえの、何なんだよっ……!?」

「……」

十九郎は答えなかった。希沙良が闇の眠りに墜ち、その身からすべての力が失われるまで。

IV

十分以上前から斎伽忍が一言も口にしなくなっていることに、亮介は気づいていた。もともと彼は多弁家ではないが、しかし現在の沈黙はかなり唐突に、不自然なタイミングでやってきたように思えた。

褐色の遮光グラスが、彼の表情をますますわかりにくいものとしてしまっている。とりあえずパジェロのハンドルさばきには、これといって変化もないようだが……。

常にいつ起こるかわからぬ『発作』を抱えている人物だから、心配だ。生身の人間ひとりが負うには巨大すぎる術力のために。

牙がここにいれば、もっと敏感に斎伽忍の反応を読んでくれるだろう。あの〈使〉は、六本

木CBSにて留守番をおおせつかったのだそうだ。だからこそ、こうやって斎伽忍が直々に学校まで車で乗りつけて、亮介をにわかドライブに引っぱりだすなどという離れ業も可能になるわけで。

（忍さんとドライブってのも、なんだか凄いけど……）

一見とんでもない行動でも、裏には必ず意味と必然がひそんでいる――。

冴子の発想を借りれば、そういうことになりそうだ。希沙良あたりに言わせれば、ただの不気味な気まぐれで片づけられそうでもあるが。

（自分は？）

彼らの言葉でなく、自分の言葉で考えたらどういう結論になるだろう。亮介がそんな思いを漠然と胸に浮かべたときだった。

「……愚かな……」

ぽつりと、斎伽忍が呟いた。

前触れのない、そして深刻に聞こえる独白だった。ひどく……冷たい。

「え？」

亮介はぞっとした。不意に隣にいる人物がすりかわってしまったような、説明しにくい違和感があった。

「いや……」

首を横に振った忍は、亮介のよく知っている斎伽忍に違いなかった。
「君には関わりのないことだ」
シルバーブルーのパジェロは、進路を変更した。どこへ向かうのか、告げる一言もないままに。

＊　＊　＊

東京の片隅の小さな風景をほのぼのした人情話とともに届ける、というミニコーナーの収録は、あっという間に終わってしまった。
「でも、なーんかおかしいよねえ。ほのぼの人情路線なのに、かおるちゃんがマイク握って立ってると画面が社会派になっちゃうんだよ」
「ひどいですねえーっ。どおっせ堅物女ですよおっ」
つまんない女ですよおっだ、と珈織はふくれてみせる。すまんすまん、とカメラマンのゴンさんが笑った。
「たしかに社会派のほうが好きだし、得意かもしれませんね。私、ダメなんです、心と心のふれあいとか、助け合いの感動とか、気の毒な人がこんなに頑張りましたとか、そういう話」
「嫌いなの？」

「じゃなくて。単に弱いんです。報道できなくなっちゃう、自分がその話にハマリこんじゃって、だーっとか泣いちゃって」
「へえっ、かおるちゃんがねえ」
意外そうな反応が来る。珈織は肩をすくめてみせた。
「そんなにクールに見えます？」
「うーん、しっかりしてるからかなあ」
「そうでもないんですよ。おばあちゃんっ子だし」
「ははあ、そういやちょっと古風なところもあるよね。だから芯が強そうなんだね」
「そうですかあ？　おかしいわね、英米文学科卒なのに……」
「かおるちゃん、その理屈、ぜんっぜんつながってないよ」
新宿西口の高層ビル街。
すぐ近くに中央公園の緑が見える。傾いた太陽の光が、巨大な都庁の壁面を淡く染めている。
こんなに穏やかでいいのだろうか、と珈織は思っていた。
こんなに何事もなく、平和でいいのか。絶対に何かが——こうしている間にも、何かが進んでいる気がする。誰かが泣き、誰かが苦しみ、そして異界の者が……。
人間ではないものたちが。

「やだ、あたし、今にわかに一文なしなんだったわ」
機材車に乗ろうとして、珈織は足を止めた。
「先に戻ってください。私、このあたりで用を片づけてから電車で戻りますんで」
「銀行？　待っててあげようか」
ゴンさんは親切に言ってくれたが、珈織は感謝しつつ断った。せっかく予定の時間が余ったのだから、羽根をのばしてから局に帰るくらい許されるだろう。
キャッシュコーナーで現金をおろして、今月分の家賃もついでに振りこんで、それから……何かやっておかねばならないことは？
（ほら……）
この程度なんだ、と心のどこかで呟く声がする。
仕事と日常に呑みこまれて、危機感など消えてしまう。
ミステリーやオカルトより、生きることのほうが大事で。それが人間というものだから。
――〝彼〟は違うのだろうか？
こんな風に、生きているのだろうか？　あの美しい青年も。

＊　＊　＊

「やりかたを、変えようと思う」
斎伽忍の決断は、急転とも呼べるものだった。
「……今から、ですか？」
亮介はぎこちなく問いかえしていた。本当は、そんなわかりきったことを口にするべきではなかったのだろうけれど。
「これまで受け身にまわりすぎたんだ。あまりにも監視者として徹しすぎた。それが今になって、さまざまな弊害を招いている」
弊害？
忍の言う『害』が何を指すのか、亮介は知らなかった。
どんな事実が彼をかりたてたのか。
「機を待つのは、安全だが消極的な策でしかなかった。機会は作り出すものだ――本来はね」
「……」
忍の言葉は、決して間違ってはいない。
間違い、ではなかった。だが……。
焦りは望ましくないと、そう彼が口にしてから、まだ数時間も経過していないのだ。そこに持ちだされたこの転換策は、危ういもののように亮介には思われた。

もしも牙が——はるかな過去より伽羅王につき従ってきた〈使〉が——ここにいたならば、彼は誠実に言葉を尽くし忠告したはずだった。

それは弊害などと呼ぶべき事項ではなく、切り捨てて然るべき要素であると。

それはあなたのせいではないのだと。

しかし現実に、この時、斎伽忍に再考を促す者はここに存在しなかった。その役割を亮介に求めるのは、酷というものであったろう。

なぜ斎伽忍が前面へ出ることを選ばねばならなかったのか……亮介が知るのは、近い将来。斎伽忍という存在が、失われてしまった後のこととなる。

＊　＊　＊

五月二十三日、金曜日、夕刻。

大量の人の波にまぎれ、まわりに乗りおくれない早足で工藤珈織は新宿駅の地下を歩いていた。今頃はちょうど、六本木のスタジオで『ニュースサーチ』の本番が撮られている最中だ。番組が終わるまでに局に戻っていなければ……。

ふっ、と人の流れのなかで、隣に並んだ影があった。
「失礼――」
「え？」
声をかけられて、目を上げる。――誰だ？
どこかで見たような。黒の似合う、物静かな。ハスキーなバリトンヴォイスの。
背の高い、青年。
（あっ……!!）
思い出した。命の恩人だ。謎の怪力青年。
「あなた……！」
「手短かに、お伝えします」
歩く速度はゆるめずに、彼が口をひらいた。
「斎伽忍が、あなたの取材をお受けします」
「……え!?」
一瞬、よくわからない。
誰が、何を受けると……？
「追ってご連絡いたしますので……」
こちらの反応をフォローしようともせず、彼は勝手に言葉をつづける。そっけないくらい

に、愛想のない態度だ。その冷たい双眸が、威圧するように珈織を見た。
「くれぐれも、他言は無用に願います」
「……あ、あの……」
「では」
影のように素早く、さりげなく、彼は傍らから離れ、人々の内にまぎれて去っていった。
一言も、珈織の都合は訊かずに。
「ちょっ……」
ちょっと待ってよ、との声は行き場を失い、珈織のまわりをさまよっていた。
(取材……!?)
息を呑み、珈織は立ち止まった。ようやく、彼の——殺し屋さんみたいな〝牙〟の——伝えた言葉の意味がわかってきた。
ついに、斎伽忍が自ら動きだしたということだ。
姿や気配だけを垣間見せていた、今までとは違う。
本格的に。彼自身が。
「どうして……あたしに……」
なぜ、今になって。
疑問ばかりが、今はふくらみつづける。疑惑と、恐怖。興味と、関心。

けれどひとつだけ、今の珈織にもわかっていることがあった。
ここからすべてが変わりだす。
今この瞬間から、正体も知れぬ巨大な流れが、珈織の目前にひらかれようとしていたのだ。

――つづく――

『天冥の剣』第一回緊急対談

《崎谷亮介・和泉希沙良編》

（作者注・ここから先は本編の内容を忘れてからお読みください）

崎谷亮介「読者の皆さん、お久しぶりです、こんにちは。崎谷亮介です。あっ、もしかして今、本編を読みおわって怒っていませんか？　とりあえずそっちのことは全部忘れてから、こっちを読んでください。と、若木が言ってます」

和泉希沙良「……こんな対談、読む奴いるんだろうか本当に」

亮介「えーと、若木がいきなり『本編の最中にあとがきを書くのはいやだ』と駄々をこねまして、急遽、この『天冥の剣』が完結するまでは、あとがきのページにいきあたりばったりの緊急対談が収録されることになりました。ちなみにこの対談がどのくらいいきあたりばったりかというと、次回は誰と誰の対談になるかすら、いまだに決まっていないそうです」

希沙良「あれだろ、『炎獄のディアーナ』の前編で懲りたんだろ」

亮介「ストーリーの途中であとがき書くと、ろくなことがないから、だって」

希沙良「あの時、あいつって確か『後編では出雲木皿（仮名）が大活躍する』とか言いきったんだよな」

亮介「活躍したじゃん」

希沙良「どこがっっっ!?　『期待したのに、さわいで怪我して倒れただけだった』とまで言われたんだぜ、俺はっ!!」

亮介「（クールに）そういうこと言う人は、本物の希沙良のファンじゃないんだよ」

希沙良「……（そういや『ディアーナ』のときはこいつの評判が一番悪かったんだよな、と思っている）おまえってますます暗くなってないか？」

亮介「……（でも『ディアーナ』で誰よりも顰蹙かってたのは伽羅王・忍様なんだよね、と思っている）仕方ないよ、主人公は悩む宿命にあるんだって若木が言ってるから……」

希沙良「（いやな顔）なんだそれっ。勝手につくるなっ、んな法則をっ」

亮介「あ、そういえば今度、主人公やるんだよね。おめでとう、よかったね、ふふふ」

希沙良「……なんか今、嬉しさがどっと半減した……」

亮介「突然ですが、ここで宣伝です！　いつもイラストを担当してくださっている杜真琴さんの手で、なんとハイスクール・オーラバスターの番外編が漫画化されます！　九月二十四日発売の『ララ』（白泉社）十一月号から連載です！　ぜひ読んでください！　ちなみに主役は希

沙良と里見さんと、それから冴子ちゃんです。タイトルは『十戒』。無敵の顔合わせによる番外編です！」

希沙良「誰かの名前が足りないぜ。言いたくねえけど」

亮介「あの人も、少しくらいなら登場してもいいかなとおっしゃっているそうです。重ねがさね、楽しみですね！」

希沙良「もったいぶる野郎だよな」

亮介「どうしてそういう、わざわざ反感をかうようなことを……」

希沙良「で、全滅組がおまえと水沢で。ま、よかったじゃん、暇で」

亮介「……ありがとう。一部の読者にケンカを売ってるような番外編ですが、もちろん原作を書いたのは若木です」

希沙良「大部分の読者のニーズにこたえたわけだろ？」

亮介「だ……だって希沙良と俺が出会う前の話だっていうからっ……」

希沙良「わかった、俺が言いすぎた！　俺が悪かった！　だからそこで泣くなっ!!」

☆

亮介「それにしても久しぶりだよね、オーラバスターの新刊が出るのって。シリーズが終了し

たと思って『終わっちゃって残念です』ってお手紙をくれた読者さんが何人もいたらしいけど、一年と一か月も待たせたら当然だよね」

希沙良「十三か月ぶりってとこが不吉でいいよな」

亮介「今年のコバルト四月号にオーラバスターの特集ページがあって、忍さんがインタビュー受けてたの知ってた？」

希沙良「んなもん読んでる暇ねえって、こっちは！」

亮介「……惜しいことしたねえ……（しみじみと）」

希沙良「何の話だよ？　あっでも、そういや、あれ読んで十九郎がすげえ悩んでた」

亮介「それ単に、笑いをこらえてたとか言わない？」

希沙良「えっ何でだよ!?　ええ!?　何しゃべったんだよ、あの野郎」

亮介「……読んどけばよかったのに……（ふかぶかと）」

希沙良「オーラバスター第七弾大予告、なら無理やり若木に読まされたぜ。登場人物の義務だとかいわれて。けどさあ、そういや何だったんだよ、『天冥の門』って……」

亮介「天冥の剣が、なぜか天冥の、門！　になってた件だろ？　あれは六月号で、すかさず訂正したんだけど……若木のところに届くお手紙を見るかぎり、今の今まで知らなかった人もたくさんいる模様です」

希沙良「だって普通まちがえるか？　『剣』と『門』だぜ。特大の活字で『堂々大予告！』と

書いといて『天冥の門』だぜ。『堂々大誤植』にしたほうがよかったんじゃないか？」

亮介「そこまで言う……。あんまり言いすぎると……」

希沙良「最後のアオリ文句の『92年夏、凄絶なドラマが開幕する！』ってのは『秋！』のまちがいじゃ……」

亮介「ないんだってば！　ほら、そこにつっこまれると思って弱腰になってたのに……」

希沙良「あっ今いきなり、この本、無事に九月に出るのか不安になってきた」

亮介「やめろってば！　……えーと、忍さんのインタビューは特に好評だったんで、機会があれば文庫に、おまけとして収録するつもりだと若木が言ってます。予告編は……恥ずかしいから葬り去りたいって」

希沙良「それさあ、この『天冥の剣』が完結したらラストに収録して、みんなで眺めて笑ったらおっかしーだろーなー」

亮介「ここの予告、事実と違ってるじゃん……とか言って？」

希沙良「っていうか、あれ、はじめっからハッタリなんだろ？」

亮介「希沙良って……」

希沙良「絶っ対、ラストにのっけて笑いものにしようなっ。決定だからな、これはっ」

亮介「希沙良って……」

☆

亮介「そういえば結局、なんでオーラバスターの新作が遅れたのかについて話してないよね」
希沙良「若木が『エクサール騎士団』書いてたんだろ？」
亮介「いきなり言いきってるけど、あのね……」
希沙良「トロいくせに新作に手を出すからだよなー。オーラバスターのほうがまったく進んでいないにもかかわらず、合間に二冊もエクサール出してんだからいい度胸してるよな」
亮介「……今、オーラバスターのせいでエクサールの進行が止まってる、とはまったく考えないんだね？」
希沙良「あったりまえだろ!?　関係ねえだろうが、俺には、全然っ!!　若木はあんなもん書かなくていいから早くオーラバスターを書けっ!!　出し惜しみするなよなー、どうせいくら書いたって終わらねえくらい長い話なんだろー？」
亮介「今の希沙良の発言が、一部の読者さんの意見をものすごく正確に代弁したと俺は思う……」
希沙良「正直者の意見だよな」
亮介「希沙良のは単にわがままなんだよっ」

希沙良「どこがっ!?」
亮介「全部がっ」
希沙良「じゃ、直しようがねえじゃん」
亮介「……っ、そ、それはちょっと違うんじゃ……。で……でも、それはそれで、すごく前向きな考え方かもしれない……（悩んでいる）」
希沙良「間にうけてんじゃねえよ……。おまえってそういうとこ、ほんっとバカだな」
亮介「すみませんねえ、バカ正直な鬱陶しい主人公で……」
希沙良「だーから、なんで新刊が出なかったかって、若木がぐしゃぐしゃ理屈こねたってダメなんだよなー。だって俺、知ってるもん、オーラバスターが出なかった真相」
亮介「ええっ!?　なんでっ!?」
希沙良「聞きたいなら教えてやるけど」
亮介「それよりなんで希沙良が知ってるのか疑問だけど」
希沙良「聞きたくねえんだな?」
亮介「言いたいんだろ?」
希沙良「……おまえな……。だから、つまり真相はな」
亮介「うんうん」
希沙良「それは……ずばりっ！『今月の新刊コピー』だ」

亮介「……は？」

希沙良「ほら、新しく出た文庫には必ず『今月の新刊』って帯がまかれてるだろ。本のあらすじが書いてあるやつが。昔は蛍光オレンジだったこともある、今はハートマークがついててピンク色の帯が」

亮介「……はあ」

希沙良「あそこにいつも、でっかい文字でその本の宣伝コピーが書いてあるだろ。『学園ファンタジー!!』だの『決死の対決!!　空者vs妖者』だの。『戦え、守るべきものがある限り』ってのもあったよな、たしか」

亮介「古いこと憶えてるなあ……」

希沙良「毎回、最新刊で買ってる人間にしかわからない話だな。ちなみに今のは『天使』、『セイレーン』、『十字架』のコピーだ」

亮介「そのコピーがどうしたんだよ、それで」

希沙良「おまえ、『ディアーナ』の後編でどんなコピーがついてたか憶えてるか？」

亮介「ええっ？　一年前のことなんか、もうわからないよ」

希沙良「おまえなあっ、主人公だろっ!?　あの、なんでだか知らねえけど水沢がアップになりやがった表紙で、その水沢の顔の下に青い文字で」

亮介「あっわかった！　『今度の〈妖者〉は、手強いぜっ！』……だよね？」

希沙良「……（深く頷く）」

亮介「だからそれがどうしたんだよ？」

希沙良「そのコピーを見た瞬間、若木の背筋にさーっと冷たいものが走ったんだな、実は」

亮介「……（全然わからない）」

希沙良「あのなあっ、『炎獄のディアーナ』が『今度の〈妖者〉は手強いぜっ！』だったら、この先のオーラバスターは全部『今度の〈妖者〉も手強いぜっ！』『今度の〈妖者〉はもっと手強いぜっ！』『今度の〈妖者〉はますます手強いぜっ！』だけで言い尽くされちまうだろうがっ！　この宣伝コピー・エンドレス状態のおそろしさがおまえにわかるかっ!?」

亮介「……（呆れはてて絶句している）」

希沙良「えらいことだろ、これは。はっきりいってシリーズ生命の危機を感じたんだぜ、若木は。で、この深刻なショックから立ち直るのにまるまる一年かかったっていうことなんだな、要するに」

亮介「……（いいかげんにしろよと思っている）」

希沙良「だから今回もわかんねえぞ、この本の帯のコピーを見て若木がガーンと思ったら、二巻が出るのが思いっきりのびるかもしれないんだぜ。責任重大だな、今回のコピーライターは」

亮介「あのねえーっ……。その話、本当に本当だって胸はって言える？」

希沙良「……と、俺が考えたってだけだろ。おまえって『超』のつくバカ正直だなー」

亮介「読者の皆さんに、誤解のないよう断言しておきますがっ、そんな些細な理由でオーラバスターの新作が出なかったという事実はまったくありませんっ！　その程度のことで本が出なかったら読者の人に失礼だよ、ほんとにっ。――わかった、希沙良、『迷える羊』のときの『諒や希沙良の素顔をみせちゃう！』を根にもってるだけだろ」

希沙良「それじゃ俺がただのバカだろっ」

亮介「バカなんだよっ」

希沙良「……強気じゃん」

亮介「どうせ俺は昔っからかわいくないよ。みんな、暇があったら一度『天使』を読みかえしてみてください。俺が凄く口の悪い奴だということがよくわかります。あの頃はよかったなあ、のんびりしてて……」

希沙良「だよなあ、あの頃と今じゃ、人格のまるっきり違う奴もいるし……（はっとして口をつぐむ）」

亮介「……（同様に口をつぐむ）」

希沙良「む……昔の本の話題をもちだすと若木が泥沼にはまるからやめようぜ……。とばっちりでどんな目にあわされるか知れたもんじゃねえだろ……」

亮介「そ……そうだね……。だからっ！　もとはといえば希沙良が変な話をもちだすから

っ！」

希沙良「そもそも俺はあの宣伝コピーには、いつもじゃねえけど、たまーに疑問を感じてたんだよな。なんかこう、さんっざん苦労して俺たちが戦ってるさまをだぜ、『力をあわせて、戦おう！』とか簡単にまとめられちまうと空しくならねえ？」

亮介「そんなコピーあったっけ？」

希沙良「今のは『セイレーン』の文庫広告に使われたコピーだけどさ。……よりによって『セイレーン』だぜ……誰が力をあわせて仲よく戦ったんだよ、あん時？」

亮介「みんな力をあわせて戦ったんだよ、あの時は！」

希沙良「俺、あいつとかあの野郎とかと力あわせても、全っ然ありがたみ感じない」

亮介「仕方ないだろ、まとめなきゃコピーにならないんだから……。一度、希沙良も自分でコピー書いてみたらいいじゃん」

希沙良「俺がコピー書いたら、さしずめこの本は『ここまでやるか若木!!』だな……」

亮介「……『どうしてくれるんだ!!』とつけくわえたい気がする……」

☆

亮介「少しは明るい話をしてくれと若木が言っているので、話題を変えましょうか……えー

と、あっそうだ、バレンタインのチョコレートのことを言わなきゃ」

希沙良「いつの話だよ、それ……。バレンタインって二月十四日だろ？」

亮介「半年前のことになりますが、今回のバレンタインも大勢の読者の皆さんからチョコレートやプレゼント、カードなどをいただきました。本当にありがとうございました！　いただいた物は、誰あてに贈られたものか、すべてチェックして集計し、当人のもとへ届けたと若木が言ってます。ホワイトデーのお礼はできませんでしたが、ここで全員を代表してお礼を申しあげます！」

希沙良「ひとつのチョコが二人あてになってたりしたら、どう集計するんだよ？」

亮介「そしたらちゃんと、それぞれに一票ずつ入れたんだよ」

希沙良「じゃあ本命にバンッと贈ったやつと、数うちゃあたるってノリの義理チョコが、おんなじ重みになっちまうのかよ」

亮介「義理なんかでわざわざ小包でチョコレート送ってくれる女の子、いないよ。どの熱意も真剣にうけとめなきゃ。……でもそういえば、希沙良に来るチョコレートって『和泉（いずみ）希沙良に一票！』って、それだけ書いてあるストレートなのが多かったね……里見さんあてに来るのには『希沙良くんとわけてください』とか『皆さんでどうぞ』とか……」

希沙良「うるせえなああっ、あいつは外面がいいから誤解されてるんだっ!!」

亮介「別に、だからどうだとは何も言ってないのに……」

希沙良「んなこと話したあとで集計結果発表したら、変に深読みされるだろっ」

亮介「そうかなあ……？　えーと、じゃあ発表します。一九九二年のバレンタインで一番たくさんチョコレートをもらえた幸せものは、余裕のダントツで、水沢諒でした」

希沙良「ダントツを強調するなって……」

亮介「以下、二位・里見十九郎、三位・和泉希沙良、四位・斎伽忍、五位・若木未生、六位・崎谷亮介、七位・叶省吾、八位・来生衛、同点九位の、一個ずつチョコレートが届いた人たちは、牙、七瀬冴子、早水京平、来生閃、イズミ、渡辺拓己、如月士郎……という、豪華な顔ぶれでした」

希沙良「聞いたことない名前がいくつかあったぜ、今」

亮介「……わかる人だけわかってください」

希沙良「それ、不親切っていわねえか？　オーラバスター一本に情熱をかたむけてる立派な読者に、失礼な態度じゃねえのか？」

亮介「気になる人は本屋さんに行って『イズミ幻戦記』と『エクサール騎士団』と『XAZSA』の人物紹介のページを見てもらえば全員わかりますっ。なんでこんなことまで言わなくちゃいけないんだろう……」

希沙良「げっ。そんなにシリーズ持ってたのか、若木って……」

亮介「じゃあ希沙良、『XAZSA』に里見さんがちょっとだけ出てたのも知らないんだ」

希沙良「……えっ!?」
亮介「やっぱり……」

☆

亮介「バレンタインだけじゃなくて、それぞれの誕生日やクリスマス、その他の機会にも、いろんなプレゼントをいただいてます。どうしてもこんな場所でしかお礼を言えませんが、いつもありがとうございます。あっ、『今年で何歳になったんですか?』と訊くのだけはやめてください……」
希沙良「みんな気をぬくなよ、俺たちの誕生日、なぜか秋から冬に集中してるからな。油断してると、あっという間にくるからな」
亮介「煽ってどうするんだよっ。でも希沙良あてのプレゼントは、なぜかどれもオシャレです。アクセサリーのたぐいをもらうのは、たいてい希沙良だもんね。マフラーとか、サングラスってのもあったし。むやみやたらにお金をかけてなくても、センスがいいんだよね」
希沙良「気合がはいってるよな」
亮介「本人は、もらった服ならなんでも着るような奴なのになあ……」
希沙良「ばあかっ、だからこそ気をつかうんだろ、おまえって女心がわからねえ奴だなあ

……」

亮介「……（希沙良なんかに、女心について語られたくないと思っている）えーと、諒あてのプレゼントは、なぜか食べ物が多いです（笑）。あと、なんとなくわかるけど、バンドエイドとか、タオルとか……。テレホンカードも一時期、多かったかな」

希沙良「色気のかけらもない奴」

亮介「……（希沙良なんかに、色気について語られたくないと思っている）凄いなあと思わされるのが、里見さんと忍さんの二人に届くプレゼントの内容です。凝ってるんだ、これが、甲乙つけがたいくらいに…」

希沙良「十九郎って、やたら学用品もらわねえ？　あと置物とか」

亮介「ノート、ペン、ルーズリーフときたら里見さんだよね。本も。サリンジャーの短編集が原書で届いたりするのは、里見さんならでは、だと思います」

希沙良「斎伽忍がもらうプレゼントって……俺、想像がつかない……」

亮介「忍さんへのプレゼントは、本当に、深い愛を感じさせるものばかりです。だって、すごいよ、『玉』が贈られちゃうんだよ」

希沙良「……あ？」

亮介「これを『玉』だと思って……って、緑色のビー玉とか、青緑の銀紙でつつんだボールチョコをくれる人がいるんだよ。本物の愛だよね。『玉』を飲むたびにグラスを割ってちゃ大変

でしょう……って、カクテルグラスをくれる人もいるし」

希沙良「……おちょくられてないか？」

亮介「絶っ対にちがうってば!!　失礼だよ、忍さんのファンって一途で真剣な人ばっかりなんだから……」

希沙良「いいけどさ、俺は別に……。で、崎谷は？」

亮介「え、俺？　俺は……絵本とか、ハンカチとか、ジグゾーパズルとか……」

希沙良「お子様……」

亮介「そんなことないよっ!!　失礼だなあっ、その人がどんな気持ちで選んでくれたのかって考えるだけで嬉しいだろ!?」

希沙良「そりゃ、俺あてに来るなら嬉しいけど」

亮介「……（そうだ、こいつはそういう奴なんだと思っている）冴子ちゃんや亜衣ちゃんに、イヤリングやリボン、キーホルダーなどをくださった皆さんも、ありがとうございました。誰にむけたプレゼントでも、きっとみんな気持ちだけで嬉しいから、無理はしないでくださいね、本当に。もちろん若木あてにいろいろ送ってくださる方にも、若木がとても感謝してますと言っています」

希沙良「あんまり若木を甘やかすと、いい気になってつけあがるから、ほどほどにな」

亮介「えーと……最近の話題だと、入浴剤やパジャマがとっても重宝したらしいです。いきな

り健康対策にはげんでるのかな。それから『逆襲のシャア』のサントラCDを送ってくださった方、今回の執筆BGMに使わせていただいて、おかげさまで絶好調のペースで書けたということです。他にも、ほんとにいろんなテープやプレゼントをいただいてるんですが、全部について言葉をかえせなくてごめんなさい。どれもありがたく、使わせてもらってます！　――以上、若木からのメッセージでした」

☆

亮介「気がつくとあっという間に、この対談も時間ぎれなんだけど」

希沙良「えっ？　なんかすごく重要なこと、話しそびれてないか？」

亮介「なんだっけ？　……まあ、とにかく時間ないから、ここで私信をいくつか、若木を代理して伝えておこうかな。あ、まず、このセリフは絶対に希沙良の口から言えって」

希沙良「じゃあ俺からいくけど。桑原水菜様、がんばってください、いつだって俺がついてるぜ。だから今度、高耶のテレカを若木に進呈するように。……おい若木、根性があさましいぞ」

亮介「みずき健様。『ぱふ』（雑草社）一月号にて、一ページまるまる使ってオーラバスターの紹介をしていただき、ありがとうございました。あのときは読者の皆さんからの反響がすご

くて、たくさんの人がそのページのコピーを送ってくれたり、『はふ』を見てください、とのお手紙をくださいました。みずきさんの、作品およびキャラクターに対する深い考察に、若木も非常に感動しておりました。よろしければこれからも、この物語につきあってやってください、とのことです。お礼が今ごろになってしまってすみませんっ、一月号の話題なのに……」

希沙良「もひとつ若木から。――彩花みん様。お手紙をありがとうございました！　連載をおもちになっていると知って早速『りぼん』（集英社）を読んだら、美しくも奇妙キテレツな（笑）……なーに言ってんだかな、若木の阿呆は……えーと、キテレツな世界一の魔法使いセラヴィー様に心を奪われてノックダウンのクラクラです、応援してます！　……とのことだ。意外なところで交流をひろげてるな、若木って」

亮介「ありがたいことです（しみじみと）。それから、究極のお助けレディース、T杉M子様、里見様、泉様。おかげさまで今回も若木は飢えることなく修羅場をのりこえることができました。あなたがたあっての若木未生です、ほんとに」

希沙良「あと、さんっざん原稿の邪魔をしやがった兄弟猫の拓己と省吾にも、一応感謝しとくってことで。退屈しなかったもんな」

亮介「なによりもコバルト編集部様、担当の川野様、印刷所の方、その他この本にかかわってくださるすべての方、そして杜真琴様、本当に心からありがとうございます！」

希沙良「……そんなとこか？　メッセージは」

亮介「本当はまだあるんだけど、時間に限りがあるから今回はこれくらいで。……で、なんだっけ？　話しそびれてることって」

希沙良「なんかほら、切実に重大なことが残ってないか？」

亮介「なんだろ……」

希沙良「……（考えこむ）」

亮介「あれっ!?」

希沙良「え？」

亮介「この本のつづきっていつ出るんだよ!?」

希沙良「――おまえなああっ、それだよ、それっ!!　なんではじめっから気がつかねえんだよ、んな肝心なことにっ!!」

亮介「気がつかなかったのは希沙良も同じじゃん……」

希沙良「うるせえなあっ、俺はちゃんと問題提起しただろうがっ!!　どうすんだよ、もう時間ねえのに、この話題をうやむやにして逃げるのかよ、えっ!?」

亮介「少なくとも来月には出ないね……」

希沙良「今月の『乙女ちっく通信』見りゃわかりきってることをわざわざ言うなっ!!」

亮介「仕方ないよ……なんたって若木未生の本だし……」

希沙良「……悟りをひらいたみたいに、あっさり言うなよ……。とにかく年内には出るんだ

ろ、二巻が。で、三巻でケリがつくんだろ、たしか」

亮介「だといいねえ……」

希沙良「おい……」

亮介「若木が全力投球して書いてるのは嘘じゃないみたいだから、あとは運を天にまかせて待つしかないんじゃない？」

希沙良「ったく……。みんな、こうなったら黙って『ララ』を読め！」

亮介「いきなりそっちに引っぱる（笑）」

希沙良「若木が毎月連続して本を出すなんて考えた俺が甘かった。いちばん賢明なのは、『天冥の剣』が完結するまでは本編を読まないことだよな。よおおし、みんなしばらく小説は読むな、漫画を読め！　ただし本は発売日に買っとけよ」

亮介「それができてたら、誰も、はじめっから苦労しないのに……」

希沙良「……けど、『天冥の剣』ってどういう意味なのかわからねえよな、そういえば」

亮介「あっ、それはね……（ブツッ、と録音テープが切れる）」

第一回緊急対談・おわり

——以下続刊——

この作品のご感想をお寄せください。

若木未生先生へのお手紙のあて先

〒101―50　東京都千代田区一ッ橋2―5―10

集英社コバルト編集部　気付

若木未生先生

わかぎ・みお
1968年12月2日、埼玉県生まれ。射手座。A型。1989年4月『AGE』で、第13回コバルト・ノベル大賞佳作入選。好きなものはマンガと音楽。週刊少年ジャンプをこよなく愛する。苦手なものは料理。コバルトシリーズに『天使はうまく踊れない』『セイレーンの聖母』『十字架の少女』『迷える羊に愛の手を』『炎獄のディアーナ（前編）（後編）』『エクサール騎士団1、2』『XAZSA Ver. 1』がある。



天冥の剣1

COBALT-SERIES

1992年9月10日　第1刷発行
1993年7月15日　第4刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　若木未生
発行者　若菜正
発行所　株式会社集英社
〒101-50
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
（3230）6268（編集）
電話　東京（3230）6393（販売）
（3230）6080（制作）

印刷所　株式会社美松堂
中央精版印刷株式会社

© MIO WAKAGI 1992
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611675-8 C0193

コバルト文庫

〈好評発売中〉



天使はうまく踊れない

高一生の亮介には、見えないはずのものが見える厄介な力がある。ところが、最近奇妙な奴らが出現して…。

セイレーンの聖母

十九郎が狙われた!? とてつもない妖力をもつ女を敵にまわして、総帥の斎伽忍はある作戦を。

十字架の少女

夏休み、亮介たちは、諒の妹・彩を迎えて、軽井沢で合宿をはじめた。悲惨な過去をもつ彼女は。

迷える羊に愛の手を

転校先での諒の生活、妖の者に闘いを挑む希沙良と十九郎…オムニバス形式でおくる初の番外編。

炎獄のディアーナ〈前編〉〈後編〉

女の子を狙う髪切り事件が続発した。事件に妖の者の気配を感じた亮介たちは、ある作戦を…。

術者VS妖者！
いま大人気の
アクション・
ファンタジー。



若木未生の本

「ハイスクール・オーラバスター」
イラスト／杜 真琴

コバルト文庫

〈好評発売中〉



私はレア、多元界の
因果力を制御する者(エール)—。
アクション・ファンタジー!

エクサール

若木未生 イラスト／羽音こうき



来生(きすぎ)あきら、14歳。彼女の真の
姿は、異次元の〈狼月界(ろうげつかい)〉からやって
きた巫女〈エクサール〉なのだ…。

コバルト ノベル大賞 募集中！

『COBALT』編集部では、「コバルト・ノベル大賞」を募集しています。この賞は、才能ある作家志望のかたを、新人作家として世に送り出すためばかりではなく、小説を書くことの楽しさ、創作することの喜びを広く若いかたたちにも味わっていただきたい、という願いもこめて設置されたものです。

ロマンの新しい時代を切りひらく、あなたのフレッシュな力作100枚前後（400字詰原稿用紙95枚以上105枚以下）を、お待ちしております。

〈入選作〉 **正賞の盾と副賞100万円**

〈佳　作〉 **正賞の盾と副賞 50万円**

応募要項は隔月刊「COBALT」に毎号掲載されています。

恋を夢みる乙女のための小説誌！

[コバルト]

Cobalt

1月、3月、5月、
7月、9月、11月の
18日発売！

隔月刊ですので、お求めになりにくいこともあります。あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

●「コバルト短編小説新人賞」「ショート・ショート」を毎号募集しています。